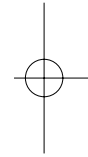
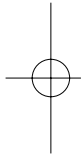
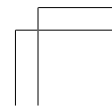
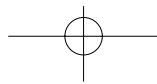
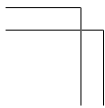


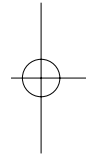
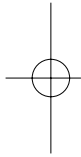
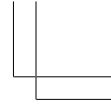
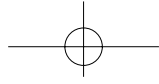
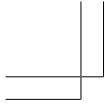
3

Eternity LineIII

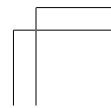
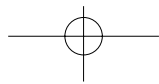
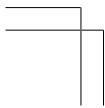


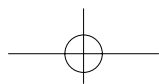
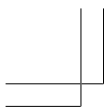
kifumido



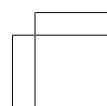
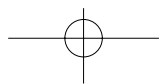
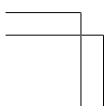
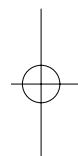
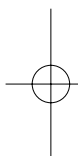


本文：桐月
カバーイラスト：バハムーチョ





この作品は、「TYPE-MOON」製作である「Fate/stay night」の世界観、キャラクターを使用した二次創作作品です。
本書の内容は全てフィクションであり、登場する人物・団体などは全て架空のもので



a first prologue へりあまじのあひすじへ... 8
second prologue ... 17

九章 昏く道程 ... 44

Interlude / 12 a Darkness ... 88

十章 アイミングレン ... 102

Interlude / 13 森の中で ... 152

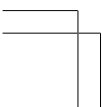
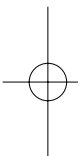
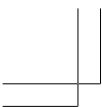
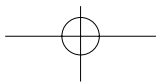
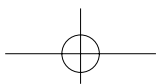
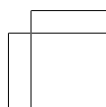
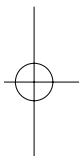
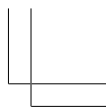
Interlude / 14 魔術師 ... 194

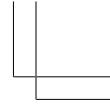
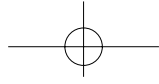
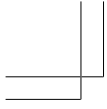
十一章 Deep Forest Roller coaste ... 210

Interlude / 15 Bloodness ... 256

目次

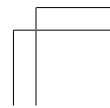
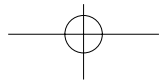
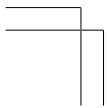
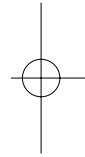
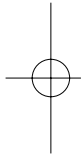
—Next prologue Episode— ... 272





7

a first prologue
～あらすじ～



——夜闇を裂いて、閃光が走った。

川沿いの道を海に向って駆け抜ける俺たち——遠坂やアーチャーと合流して港まで一気に走り抜ける。

そこにいたライダーは死に体で、腕には瀕死の桜が抱きかかえられていた。

『先に逝きます。——後はよろしくお願いします』

そう言って彼女は消えた。

見送ったセイバーの声が今も残る。

『後を頼む——か。皮肉なものです。私たちは互いに消しあうために召喚されたというのに』

彼女の横顔が今も脳裏に焼き付いている。
聖杯——全ての願いを叶える万能の力——。
それを廻る戦いは、いつのまにか別のものにすりかわっていた。

——一体、何がどうなっているのか。

布団の中でだらだらと夜を過ごしている。
やることは沢山あり、身も心も疲れきっていた。
それなのに——眠れない。
今まで見たこと、体験したことを頭の中で繰り返し、取り留めのない思考に彷徨っている。

こういう場合、物事を整理していくのが一番だろう。過去をきちんと見極めることで、今後の方針も見えてくるはず。
そう思い直し、今までのことを思いだして反芻する。

最初は……。
そう、この戦いの発端となった出来事だ。

『問おう——貴方が私のマスターか——』

あの聖緑の目を覚えている。

月光に照らされた淡い金糸を覚えている。

どこが発端だというのなら、やはりセイバーと出会ったあの瞬間こそ、俺にとつての始まり。

何も知らない俺と、サーヴァントとしてランサーの槍を弾き返す彼女。——アーチャー

を切り伏せ、遠坂の正体を知った。そして教会への道行きとバーサーカーとの一戦……。

どれも、今も色鮮やかに思い出せる。

次に起こったのは——。

「ライダー……か」

臨海公園で慎二に連れられたライダーが見も知らない女の人を襲っていた。

——それが、多分もう一つの発端。

それまでの俺は言峰や遠坂、セイバーから説明を受けても、バーサーカーに殺されかかってなお、どこか他人事だったのだろう。

サーヴァントとマスターの区別もよく分からなかった俺が初めて受けた衝撃——それがあの時の懐いだ。

人をヒトとして扱わない姿に、怒りと震えのくるような悪寒を覚えた。それは恐怖ではなく、道を外れた魔術師と相対したことを心の底から理解した証だ。

ライダーの撃退と言峰から聞いた親父と、アインツベルンやマキリの魔術師……。イリヤと出会い、遠坂と束の間の協力関係を経て——。

「……柳洞寺に行ったんだっけな」

そこにキヤスターがいた。

初めて会った彼女は動揺し、嘆き、悲しみ——そしてセイバーと戦った。

全ての術を防がれ、なす術もないはずなのにどこか自暴自棄で戦う彼女が気になった。そして——。

「……」

左手に刻まれた令呪を見る。
セイバーを象徴する鋭角的な線は、一つが燃えつきたように消えている。残りは二つ
消えたこの一つは、二人の戦闘を止めるために使ってしまった。

——でもそこに後悔なんてない。

意識を失ったキャスターを介抱し、何とか話をして、戦線離脱をするという彼女を匿っ
た。

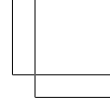
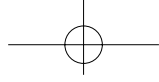
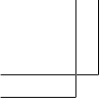
そして、それを告げた遠坂との協定破棄と——。

「あの時から、変わらず無茶するな」

自宅に襲撃をかけてきた、遠坂、アーチャーとの戦い。殆ど一方的に玩ばれただけだっ
たけど、遠坂なりの忠告なんだと今は思っている。

めまぐるしく立ち位置が変わっていく。

少しずつキャスターがこの家に馴染み、魔術の手解きをしてくれるようになって——。
この頃が一番平和だったように思う。



ならば、一つ区切りをつけるならここまでだろうか。その後が続いているのは、あの地獄のような赤い世界。キャスターと出会ったのは発端ではなく、聖杯戦争という舞台の転機だ。

次のシーンではそれがもう少し明確に際立つ。

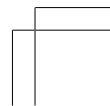
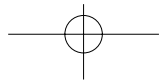
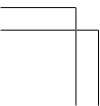
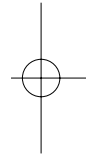
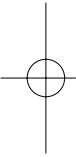
慎二と、奴に使役されたライダーによって桜が連れ去れた。俺をおびき寄せるためにセイバーを連れてくるなどアイツは言い放ち――。

『ならば、私が参りましょう――セイバーが動けないとなれば、当然の選択ではないかしら？』

そう言ってキャスターは俺を助けてくれた。

屋上でライダーに颯られる俺。駆けつけるセイバーと結界を押し止めるキャスター。

一度は慎二ごとライダーを無力化させたものの、マスターが桜に移り、赤い結界が発動する。



戦闘に介入したアサシンと正体不明の“黒い影”——そして聖杯戦争の裏に見え隠れする間桐臓硯。

教会で知った、ライサールの消滅。——俺の知らない所で事態が次々と動いていく。そうして、先ほどライダーが消えた。

これで残りは五人——いや、ライダーを倒した正体不明の八人目を入れて六人。手探りで進むような、暗澹とした世界をイメージする。

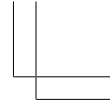
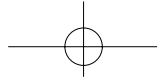
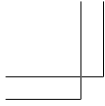
まだ——複雑に絡まった麻は解けない。

僅かながらの手がかりを求めて、溺れる者が藁を掴むように、

夢ともつかない夢想へと沈む。

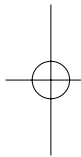
悠久よりなびく因果の糸がある。

それを解きほぐし、全ての決着をつける鍵は——。

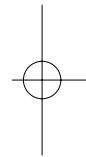


すべてを忘れてもいいと思った。

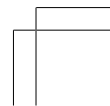
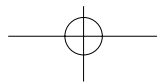
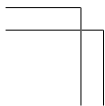
身を焦がす炎は既になく、
凍りついた記憶すら、穏やかに解ける遠い幻

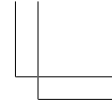
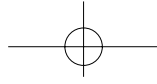
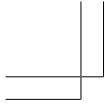


握りしめた刃は紅
鮮血とともに
自らの生き方を思い出す

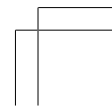
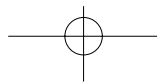
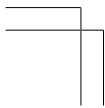
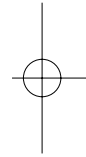
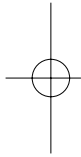


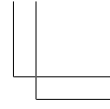
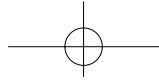
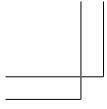
そう——
私は変えようがなく——なのだから。





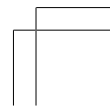
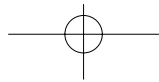
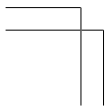
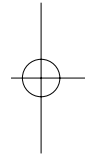
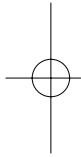
16





17

seconde prologue



「あなたはどうして魔術を？」

——隣を歩く彼女に、そう問われた。

先ほどからなんだか見た夢の内容を思い出してちらちらと眺めていたから、それを見答められたのかと少し驚く。

「どうしてって言われても……」

でも彼女はそれに気がつかなかったようで、俺に問いを投げた後も、無言で返事を待っている。

——魔術、か。

思い返すが特に明確な理由がある訳じゃない。

昔起こった災害。そこで多くの人が死んで自分もこれ以上ないほどに死にかけて。

どうしようもない——迫り来る死。

身体は奇跡的に今も動いている。けど、そんなあの当時の俺にとっては何の救いにもならない結果論だ。

だから今ではこう思う。

肉体は奇跡的に救われたも、あの地獄で代償なしに生き延びるなんてありえない。それは俺も同じで、他の人たちは身体の方が先に死んだ。

そして俺は、あの時にきつと——心のほうが死んだのだ。

ただ——。

「そうだな……憧れたのかな。うん、そう言うのが一番近いかもしれない」

「憧れ……強い力に？ それを揮う自分自身に酔いしれるために？」

「そんな話じゃないよ。……昔、何も出来ない自分が嫌になったことがある。無力さを思い知ったんじゃない、もつと深く——きつとそれを魂にまで刻み込まれたんだ。——古傷みたいなものだな。時間が経って傷が見えなくなってもズキズキと今も痛んでいる」

「心の傷を癒すための代償行為としての学問ですか」

「——そうはつきり考えたことがある訳じゃないけど……」

彼女の問いの意味がよく分からない。

憧憬だと言った。それは多分間違っていないはずだ。きつかけはそれで、あの頃の気持ちのまま今も続いている。

「だめだ……よく分からないな」

だから答えられない。

——それどころか、このように聞かれたのすら初めてだ。

習えた頃は彼に師事した。しかしそれはすぐさま終わりを告げ、後はただがむしやらに一人でやるしかなかった。

相談も出来ず、誰も明かせない。

日課として毎日続けていたものの、方法があつてるかどうかなんて考えたことすらなかった。

この戦争が始まるまでは術の成功率すら数パーセントを下回り、ランサーに襲われたあの夜に成功したのだって数年ぶりなのだ。

そんな自分が魔術について、何をどう語れたものなのだろう……。

「正しいことをしたいのではなくて？ 前にそう聞いたように思うのだけれど」

「……それは、あるよ」

正しいこと。正義の味方。

何に対しての正義？ 何から、誰を守るための？

なんとも子供っぽい理想だ。——でも本気でそう思ってるんだから捨てられない。

——それが貴様の望んだ在り方か？ それとも貴様自身の内から発した——。

不意に、赤い騎士の言葉が甦った。

もうずっと昔のことみたいだ——あの日、戦いを終えて去る時に、彼はそう俺に問い掛けた。

それは今も変わらず答えることが出来ない。

俺が望んだ正義の味方。俺が望んだ救済——俺が求める魔術——。

「坊やには難しいかしら」

「……笑わないでくれ。結構気にしてる」

なら——と彼女はさらにおかしげに口元を抑える。

「めいっばい笑われなさい。そして考えなさい。自分が何をしたいのか、何になりたいのかを」

「俺が……やりたいこと……」

人々を救いたいと思っていた。救われなかった俺はそうしなくちゃいけないだと思っ
て、生きてきた。

——ああ、そうか。
だから魔術はわかりやすい手段だったんだ。
人を救う力が無い——だから力が欲しいという、なんて——単純な理屈——。

——喜べ、お前の願いはもうすぐ叶う。

そして次に神父の言葉が甦った。

何か正義を為すなら、妥当される悪が必要になる。

悪を倒して誰かを守るのが正義なら、倒される悪が必要になる。

日々の根幹を司る日常では、倒される悪が存在しない。

もちろん、今も世界では苦しんでいる人がいる。この街でも困ってる人はいるだろう。
でも——違うのだ。

——お前と私の願いは同一の——

巖のように響く神父の言葉が甦る。

聖杯で何かを為したいという、直接的な願いはない。だけど、それに至る過程でやりた
いことがある。

人の手に余る災害を覚えている。

あの圧倒的な破壊と死を覚えている。

俺が守りたいものは、あの時救えなかった人。

俺が助けたいものは、あの時見殺しにした人。

俺が誰かを助けるためには——あの時のような圧倒的な災害に押しつぶされる被害者が
必要なのだ——。

「——ッ」

ギリ——と奥歯が軋む。

考えたくはないが、俺の理想の至る道は、踏みにじられる誰かの上に……。

「ふふ」

「——ッ」

はっとして顔を上げた。

隣で彼女が、口元を抑えて笑っている。……とたんに決まりが悪くなった。

「笑わないでくれ」

「だから、何度も笑われなさいな。それにしても」

うんうんと感心したように一人で納得している。

「なるほど、セイバーと相性がいいはずです。良くも悪くもあなた方はよく似ている」

「石頭とでも言いたいのか……？」

「あは——なんだ、坊やも分かかってるんじゃないの」

はっとしてくれと言ってそっぽを向いた。

何のことはない——ふてくされたのだ。

「正しいこと——正義というのは理想ですね。私とは相反し、相容れないもの——だから

私はこう思うのです」

「……なんて？」

「それはきつと、どうでもいいことなのだ」と

「は？」

何を言われたのか分からず、ぼかんとして見返す。

「背負う必要はありません。何かを為す必要もありません。そして、きっと何かに縛られる必要もないでしょう」

「いや——でも、だからって……」

「だから全ては」

誰かのためではなく、自分のためにやるのでしよう。——と、どこか遠くを馳せるように、キャスターは続けた。

「そんなの……できるはずもない」

「どうしてですか？ 術を学ぶのもあなた。行動を起こすのもあなた。——全ては我が身に降りかかることね」

「それでも……俺は……」

こぶしを握りしめる。——そんなの言われたことなんてなかった。

そもそも魔術について話せる相手が出来たのも二十日ほどの話だし、それまではただがむしやらにやるだけだった。

「……そういうアンタは、自分でやりたいようにできたのか……？」

悔しくなって聞き返す。

彼女はそれに、優雅に頭を振った。

「もしそう出来ていたら、きっとこの場には居ないでしょうね」

「……すまん。考えなしに言った」

魔女と呼ばれるサーヴァント……死後も今なおこの世界で願いをかなえる聖杯を求めた彼女に、満足な死など訪れたはずもない。

それを知っていたはずなのに、つまらないことで墓穴を掘ったと後悔する。

「私がここにいること。あなたが魔術をはじめたこと——それは言ってみれば運命のようなものでしょう」

「運命……だつて？」

それは——なんとも聞き捨てならない言葉だ。運命だから、不可避だから——なんていうのはイヤだ。理屈じやない。とにかくイヤなんだ。

彼女は俺の顔を見つめ、ぼつりと言った。

「他の世界の貴方はどうしてでしょうね。やっぱり今のようにならなうか」

「は——？」

「この世界と無限に並列する可能性の世界ですよ。そこで今の貴方はやっぱり聖杯戦争に参加していると思いませんか？」

話が飛びすぎていてよく分からない。

けど、彼女は俺の師匠だから付き合うことにした。

「多分……今と同じじゃないかな。なんだかんだあっても、結局こうしてると思う」

なんとなく返した俺に、彼女が怒涛の突っ込みをいれる。

「私とあなたが肩を並べて？ 本当に？ そんなことが、他の世界でもありえるんですか？」

「そんなに言われても……困るけど……」

勢いに押されてたじたじになる。でも——言われてみるとそうだ。あの時柳洞寺でキャ

スターと遭遇した時、止める前にセイバーが彼女を切り倒したり、そもそも止めるなんて

考えが起り得ないこともあるかもしれない。

キャスターは人の精気を啜る魔女で、あの時の俺がキャスターを倒しに行った気持ちは、

今、間桐臓硯に対して持っているモノとなら変わっていないのだ。

「だから、それは可避できる事象だったということです。私が貴方と出会わず、ただ刃を

交えるだけの関係である可能性は非常に高かった。それだけは今も変わらない真実です」
「それが変わったのが、運命だということか」

俺の返答に首を横に振る。

「違います。運命と断定するならば、さらに強烈に逃れられない事象のこと——多分、何千何億、何兆と繰り返しても貴方はセイバーと出会いこの聖杯戦争に関するのでしょう。——その後の行き着く結果はどうあれ、これだけは覆らないはず……なぜだかわかりますか？」

「それは……オヤジが聖杯戦争に参加していて、セイバーが呼び出されたことで、彼女はあの土蔵に召喚されるのはとても自然なことだから……」

「あなた達を見ていると、他にも理由がありそうですけど」

——それを言ってしまうと、俺が魔術を習っていたこと——そもそも、魔術を習いたいと思っただけの根源である、あの火災にまで行き着く。

そして更には、あの火災の原因となった前回の聖杯戦争がありそれオヤジが参加して、更にはオヤジは聖杯を作ったアインツベルンに雇われて……と、因果が次々と繋がっていく。

……となると、助けられて魔術を習わないという選択肢はあったのだろうか？
——無いだろうな。と即座に否定した。

アレだけの圧倒的な災害に押しつぶされた子供が、自らを救ってくれた力に焦がれないことなどありえない。——ならばこそ、俺がセイバーと出会わない選択肢というのは、そもそも俺が生き残らない可能性しかなかったのだろう。

だから、俺がこうして生きている限り聖杯戦争に首を突っ込むことになる……。

「……だから、運命か」

覚えておきなさいと彼女は告げる。

「魔術とは過去に向うこと。確定された運命を由^よとせず、あがらうこと——そして、自らを取りまく事象の根源にたどり着くこと」

「根源……？」

「全ての物事には原因と結果があり、遡ると一つの因果に辿りつきます。それがこの世界であつても同じ事——そして、未来もそれに繋がっている」

今すぐには理解しがたい話だけど、頭に叩き込む。

理解するのは後回しでいい。ただ唐突に行われた彼女の講義を聞いていく。

「全ての原因と結果が繋がる場所——そこなら己を取り巻く運命すら容易に変えることができるのではなくて？」

「それが、魔術師……いや、まて」

今のは何か聞き覚えがある。

己が辿った道筋すら変え、望みのままに……。

「それって聖杯じゃないのか？」

「でしょうね……規模は違うかもしれませんが似たような物でしょう。あるいはそこから漏れ出した力を僅かばかり溜められる器が、そう呼ばれているのかもしれませんが」

「そんな……」

だから、何百と聖杯を廻る戦いは行われ、魔術師はその舞台の一つである、この街に集うのか——。はは、なんとも理解が遅いと我ながら呆れた。

遠坂に素人扱いされても仕方が無い。今の今まで、何故魔術師がそう躍起になるのかも分からなかったのだから。

「確定された運命を変容するということは、世界に穴を穿ちます。悠久より確定された因果を穿たれ、変更された事象は多くを巻き込む——それ故、世界の敵とされてしまう。だ

から、魔術師もサーヴァントも悠久の糸を手繰り寄せるのではなく、直接手にする為に聖杯に集う。自らの望みを叶えるために」
「なるほど」

それが魔術師で聖杯戦争か……。

オヤジに聞いたことがあるのかもしれないけれど、覚えていない。もしそうだとっても今より遥かに未熟だった自分には理解できなかった話だ。

でも——あの災害を何とかしたいと思うが、無くしたいと思っただことはなかった。

そんな俺はいつたいどちらなんだろうか。

「そうですね……だから、あなたは魔術師には向いていない」

「……そっか」

思ったより衝撃はなかった。才能の無さは自分でも痛感していた所だし……。

しかし、彼女の話は終わらない。

「未来を求めるのは人の生き方。坊やは己の過去ではなく、他人の未来の方が大事なのですね。——それは魔術師の生き方ではない。坊やの魔術は、業ではなくただの技術に過ぎないのでしょ」

だからこそ、そんなものは魔術師ではないと言う。

「なら、今のままでいいのではなくて？」

「いい……のかな」

「それはもちろん。——先ほども言ったでしょう。そんな生き方^キはどうでもいいのです」

そう唇をにやりと持ち上げて断言する。

切れ長の目が笑っている。——不詳の弟子を翻弄して楽しむように。

「なるほど……」

いろいろな考え方があつたんだと、少し胸を打たれた。

だから、ついでにキヤスターに聞いてみることにした。

「アンタは魔術師で、聖杯を求めているだろ？ ……じゃあやっぱり何かやりたいことがあつたんだ」

それが出来なかつたのが彼女の悔恨なのかと、問うた。

「いいえ」

だけど、きつぱりと否定する。

「土郎……私はきつと……何もしたくなかつたのです」

そして寂しそうに微笑み、俺はその笑顔に瞬間、見惚れた。

その笑みは一瞬でなりを潜め、何か考えていそうな邪悪な笑みに摩り替えられた。

「さあ、講義の代金をいただきますようか」

「な——なんだそれ。聞いてないぞ」

言ってませんでしたから、などと首をかしげて可愛らしくいう——つて騙されないぞ！

「……ちなみに、何が望みだ？」

でも立場の弱い俺のこと、次の瞬間には下手に出ているのだから救えない。

そう問うと、キャストは少し頬を赤く染めて——。

「……貴方もこのように、あの人に教えを受けていたのでしょうか？ その時のことを話さないな」

なんて表情以上に可愛らしいことを言った。

「——ぶっ」

「な、なんでですかその笑いは……っ。今すぐ収めないとカエルにして踏み潰すわよ。ど、道路に叩きつけて平たくして車に轢かせてカラスの餌です！」

「い、いや——すまん。ツボにはいった……くくく」

「——きいいつ！ 可愛くない……全然可愛くない、坊やだことっ！」
必死で笑いを抑えようとするが、なかなか上手くいかない——しばらく睨まれたり脅されたりした挙句にやっと収まり——そう多くはなかったが、平和だった学校を思い出して話はじめた。

一つ一つに相槌を打ち、時には真面目に聞き返してくる顔はやはり綺麗だとそう思った。

「さあ着きました」

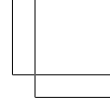
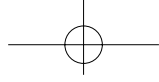
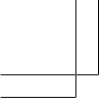
話が区切りに入ったところで、キャスターがそう告げる。
顔を上げると、目の前には教会がある。

すっかり思い出話に埋没して、橋を渡ったのも気がつかなかった。

——さて、いったいどんな内容なのやら……。

「行ってくる」

それだけを言い残し、重い扉に手を掛けた。



——ふと、少女の夢を垣間見た。

高い標高——山と海、深い森に囲まれた黒海東岸^{コルキス}。
そこに住まう一人の少女の物語だ。

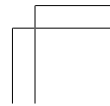
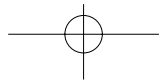
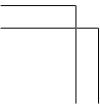
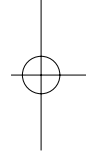
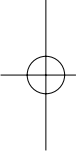
たなびく風に髪を抑え、メディアは外界を見下ろしていた。

遙か高い山——褐色の大地と深い森。そして海に囲まれた国——コルキス。王女にして女神の巫女である彼女の日常は変わらず、ここで風に吹かれるのが僅かに許された贅沢だった。

「姉上様」

「……？」

少年の声に振り向く——メディアと同じ青い髪。少女と見紛う程に美しい少年が駆け



寄ってくる。

まだ年若い弟は勢いのまま彼女に抱きついた。

「……甘えんぼさんね」

「姉上様……あの英雄殿とご一緒されていたというのは本当ですか？」

メディアの胸に埋もれたまま少年は問い掛ける。

不意に持たされた名に、彼女の胸が一つ高鳴る。

——コルキスに現れた英雄船アルゴ。

——そのキャプテンを務める英雄、イアソン。

彼はこの国の至宝である金羊の皮を求めて現れたという噂があった。

「ええ……外のお話を聞かせていただいていたの」

「……それは本当ですか？」

メディアは答えない。ただじつと黙って少年の頭を撫でる。

——それは、彼女が初めてついた偽りの言葉。

イアソン——彼を想う。

メデアは胸の高鳴りを隠せない。その身に沸いた恋心に委ねるだけでいつ如何なる時
も至福となる。

だから——ただ姉を慕う弟を騙したとして、何の罪悪感すら覚えなかった。——なぜな
らば、全ての行いはイアソンの為——。

少女は頷く。真っ直ぐに、己の感情の欲するままに。

しばしの時が流れる。

蒼穹は太陽のかげりに合わせて茜に染まり、青い髪を束の間金色に照らし出す。

少年は暫くして顔を上げ——。

「もし、姉上様がこの国を出るおつもりがあるのでしたら……」

「……」

メデアは答えない。

この国を誰よりも愛し、ここに在ることが幸せなのだと思笑んだ少女が、弟の問いに何
ら変化を見せない。

——それで悟った。姉に変化が訪れたのだと。彼女が心変わりをしてしまう、何かが

あつたのだと。

彼女を愛した国の誰より、

彼女が愛したこの国より、

外界へ出てゆくのだと思い知ってしまった。

少年が紡ぐ言葉を変えろ。真つ直ぐに少女の瞳を見上げて、言った。

「僕も一緒してもよろしいでしょうか」

「もちろんよ。一緒にゆきましよう」

少年は俯いて唇を噛み締める。

握りしめた拳が震える。

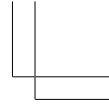
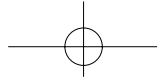
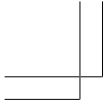
歯を食いしばり嗚咽が漏れるのを必死で防ぐ。

敬愛する姉にだけは無様な姿は見せたくないと、背を向け走りさった。

「アプシユルトス……？」

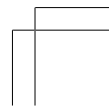
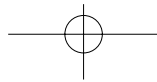
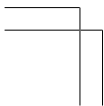
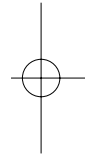
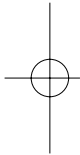
僅かに伸ばした手とその背に触れることは無い。

ただ一目散に少年は岩を蹴る。



——見上げたメディアの瞳に映っていたもの。
——それは紛れもない恋心。
——国を捨て、父を捨て、外界へと旅立つ心。
その瞳に映る光。それは、どこか熱病にも似ていた——。

翌日、彼女は住み慣れたコルキスを出た。
師である女神ヘカテにも、
彼女を慕い、彼女が愛した国民にも、
メディアを育て上げた叔母にも語ることなく。
彼女に同行したのは、港で待ち受けていたアプシユルトスだけ。
従者が僅か一人という、孤独な王女の旅立ち。



……彼女の様子を冷たい瞳で嗤う男が一人いる。
アルシユプトスはどこか、女の笑い声を聞いた気がした。

——そうしてもう一つ。

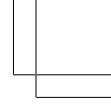
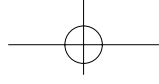
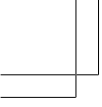
この日、コルキスから宝である金羊の皮が姿を消し、永遠に帰ることはなかった。

——帰してください。

あの日から、どこか遠く木霊する。

——私は、帰りたいのです。

叶わぬ願いを夢に見る。



私は――。

――あの穏やかな――。

――帰りたいのです――。

§

……気がつけば、朝日が差し込んでいた。

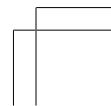
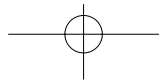
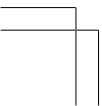
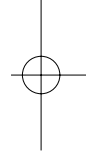
夜明けではない。太陽は少し高くなっている。

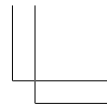
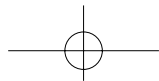
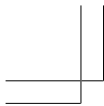
そんな午前中の時間――冬の空気は、冷たく透き通っている。

「あ――れ――」

目覚めた身体に現実味が無い。

思わず頬に手を当てると、理由の分からない涙で濡れていた。





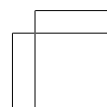
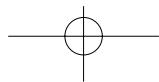
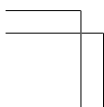
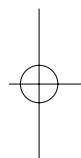
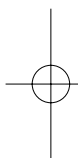
「……」

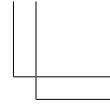
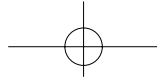
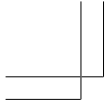
虚ろなまま辺りを見渡す。

いつもの自分の部屋、いつもの風景がそこにある。

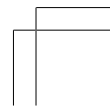
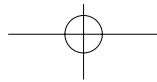
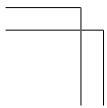
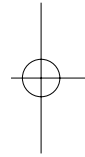
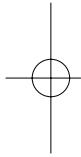
—— だというのに、ぽっかりと胸に空いた喪失感が埋められない。

居間から、電話の音が鳴り響いていた。





43



9 / 昏い道程
1

「さて、お前にここまで来てもらったのには理由がある」

そう言峰綺礼は切り出した。

礼拝堂の中は静寂が降り、彼以外に話す者はいない。

遠坂は俺から離れた壁にもたれかかり、腕組みをしたまま俯いている。

俺は長椅子に座ったまま、言峰が喋るのをみている。

日時は二月十日——朝十時。

ライダーが消えてから約半日が経っていた。

「その前に……」

ちらりと遠坂を見る。

あの様子では俺が同席していることに納得などしていないだろうに……。

「構わん言ってみろ」

「このこと呼び出されておいてなんだけど、本当に俺がいていいのか？」

言峰は心底つまらなそうに言い放った。

「構わんと言っている。付き人よりは患者の言葉を優先するものだ」

「……そっか、わかった。つまらないことをいった」

視界の端で遠坂がこぶしを握りしめるのが見えた。——あまりいい兆候ではないが、桜の容態を直接聞けるなら俺としては願ったりだ。

今、この場には俺たち三人しか居ない。

キヤスターは気になる事があると外に。アーチャーは姿が見えない。

今回は戦闘の気配がないため、何とか宥めすかしてセイバーには午前中休んでいてもらうことにした。

——まだ昨夜の話し合いの決着がついていないが、最悪の場合、なんの策もないままバーサーカーとやりあうことになる。

「まず、治療の方は無事に終わった。間桐桜は一命を取り留め、先ほど僅ではあるが意識を取り戻した」

「……そっか」

「目に見えて安心した顔をしているな」
「当然だろ、それが一番気がかりだったんだから。それで桜の様子を見ることはできるか？」

「許可はできんな。今はまた眠っている」

「じゃあ、仕方がないか……」

そこに遠坂が大げさな溜息をついた。

「つかつかと歩み寄り、だんっ！」と大きな音を立てて椅子に座る。

挑発的すぎて普段の印象からかけはなれた仕事だが、そんなこと言ってる状況じゃない。それに、どこかやり場のない怒りのようなものを感じる。

「あまり綺礼の言う事を真に受けない方がいいわよ。持ち上げておいて落とすなんていつもの手なんだから」

「持ち上げて落とす……？ ——つて、桜にまだ何かあるつてのかわか——」

「ずいぶんな言われようだな。本人を前にしてそこまで言えるなら十分だ」

「気にする人には言わないわよ。——でもアンタは違うでしょ？」

「ふむ——では本題に入ろう。間桐桜の治療は成功したが、実際には五分という所だろう」

「半分ってことか……じゃあ桜はまだ致命的ではないにしろ危険な状態にあるんだな」

「ある意味ではそうだ。衛宮、間桐桜には既に解呪が為されているな」

「あ、ああ……」

一昨日の屋上を思い出す。

赤い世界。対峙するライダーとアーチャー。アサシンに不意打ちをされたキャスターの光景が鮮烈に甦る。

——そうして愕然とした。あの地獄のような赤い世界から、たった二日しか経っていない事実。

「半分——というのは、私が関与できた範囲のことだ。まず傷の治療だが、これは危険な状態であったが持ち直した。懸念すべきは失った体力の回復と血液だが、これはなんとかなる。——問題は彼女の体質の方にある」

「体質？ 血液型が特殊とか？」

「アレをそのように位置付けていいのかどうか。……いや、魔術師というカテゴリに置いては概ね間違っていないだろう。さて衛宮士郎、刻印虫という名前を聞いたことはあるか」

「刻印……？ いや、知らない」

遠坂を見る。彼女も首を横に振っていた。

言峰もそれをみて、一つ頷く。

「簡単に言えば毒物だ。この虫は本来ただの寄生虫で、人為的に作られた低級な使い魔にあたる。役割としては主人の存命を発信させる程度にしか用を成さない」

つまり、主人が生きてればその刻印虫も生きてるから、虫を辿って主人の気配を感じ取れる……ってことか。

「魔術で作った監視装置ってどこか——それって今も機能してるの？」

「魔術師が自らの身体に飼っているのだ。機能しているかどうかなど、この際問題にならないのではないか」

問い返す言峰に、遠坂はキツ——と視線を向ける。

「悪いけどアンタの問答に付き合ってる時間なんてないの。桜の生存を知らせる装置って言ったわよね。なら受信者は誰かって話になる。そして、そんなの間桐臓硯しかいないじゃない。——なら、あの爺が植え付けたってことでしょ」

「そうだな。あの老人は蟲使いだ。可能性が最も高いのは間桐臓硯だろう」

「——だったら！ こんなまだるっこしい話なんてしているヒマは無い。さつさと結論から言いなさいよ！」

遠坂の激昂を受けても、言峰に動揺は見られない。ただ何時ものように冷静に、俺に視線を向けた。

「それでもいいのなら、そうしたいのだがな。……さて、お前は どうする？ 衛宮士郎。結論だけ聞か？」

「……いや、実はさっぱり状況が分かっていない。最初から説明してもらえるならそれに越したことはない」

言峰が頷いた。

遠坂が殺気の籠った視線を向けてくるが……しかたない、これも自らが捲いた種だ。

「この刻印虫というのは、本来ただそれだけの役割しか持たない低級な使い魔だ。それは理解したな」

「ああ」

「だが、問桐桜の場合は植え付けられた時期が早かったのだらう……刻印虫は身体の中で神経と融合し、その状態で主に寄生して生きている——それは例えるならば生きた魔術回

路のような存在と言ってもいい。普段は眠っているが、一度目を覚ませば術者の魔力を貪り喰らう——それがどのようなことか分かるか？」

横に振った——そんな俺に分かる訳がない。

たった一本の魔術回路を作るだけで、あんな激痛に死にそうになる。——事実失敗しかけて死にかけてのも一度や二度じゃない。

それが全身にある事実……俺には想像もつかないし、安易に分かったフリをしていいことでもない。

「……全身が魔術回路になってるようなものか。慣れた今でさえ、左腕の異物感に時々切り落としたくなってくる。それが全身に……ね」

「しかし元来はそのように無害のモノであるから、偶発的に目覚めることなど滅多にない。

——屋上で暴走した時に薬品をかけられたと言っていたな」

「——ああ、そうだ。慎二のヤツが確か……」

その後起こったことが鮮烈過ぎて、すっかり忘れていた。

あの時、桜のイヤリングが割れて何か緑色の液体が飛び散っていた。

「間違いないな。それが起動だろう。目覚めた刻印虫は術者の命令に従い動くだけ——

間桐桜は自らの身体を人質にされていたという訳だ」

「人質……それは取り外せないのか？」

そんな物騒な物、いつまでもつけておく訳にはいかないだろう。

しかし言峰はその必要はないと首を振る。

「ライダーが戦闘を止めなかったことからして、彼女に与えられた命令は、マスターとして戦え、だろうな。これは間違いない。ライダーの権限を譲渡している間は、それが間接的な戦闘命令になる。そして、それが撤回された後はサーヴァント自身が戦闘を続行したということだ」

「マスターとして……でも今の桜は」

「そうだ。お前たちに敗れ、その後の戦闘でライダーは消滅した。今の間桐桜はマスターではない」

それでは桜は命令を遂行できない——しかし、今は治療が終わり助かったと言っている。ならそれは喜ばしい結果だと思っていいいのだろうか。

「じゃあ……結果的にそれで桜は助かったのか……？」

安堵の溜息を漏らす。

桜の怪我と、屋上の真相——二重の安心感が俺の身を包んでいた。

「まだ分かっていないようだな、間桐桜を助けたのはお前だ」

「俺……？」

「解呪したと言っていたな。それがキャスターの宝具か」

「ああ……」

話しているのかどうか、迷う。

あの時キャスターが使った短剣——アレは確かに強力な契約解除の力を秘めていた。

それこそマスターとサーヴァントの契約すら断ち切るくらいに。それをこの二人に説明していいのかどうか、迷う……が、彼らが俺に桜のことを話してくれているのだから、できるだけフェアに行きたいと思った。

知る限りの契約解除の呪いのことを告げる。

言峰が納得したように、頷いていた。

「解呪と、消去の違いは分かるか？」

「デイスベルとキャンセル……？ 掛かっている術を解くのと、無かったことにするって意味か？」

「その通りだ。契約が行われる前の状態に戻す——遡っての負債を無くし既に執行されている契約を無力化するのは、どちらかといえば消去に近い」

「キヤスターはあの時、ライダーと桜の間の契約を断ち切ることで、戦闘を終わらせた……その時、一緒に間桐臓硯の命令も打ち切っていたってことか……」

だとするなら、それは想像以上の妙手だということになる。

もしキヤスターが居なかつたら……なんとかライダーを切り抜けたとしても、今ごろ間桐臓硯の命令に逆らえない桜と、術者である臓硯の板ばさみになっていたはずだ。

「このままなら、間桐桜が虫に食われることもあるまい。——再び、間桐臓硯の手に落ちなければの話だがな」

「——ちよつとまで。さつき虫は取り除けないって言ってたけど、今の説明じゃもう虫は居ないってことじゃないのか？」

契約を断ち切ったというなら、刻印虫も無力化されてしかるべきものなのではないだろうか——事実、桜は屋上で巨大な虫を吐いている。

説明を聞いて、俺はそれが刻印虫なのだと思っていたのだが……。しかし、期待と困惑交じりの俺を言峰は否定した。

「既に神経と融合したものを除くことはできない。——破棄できる契約が魔術的なものであるなら、だからこそ肉体の変化は影響を受けない。例えば腕の一本を代償に契約を交わした場合、契約を破棄したことで腕が戻らぬと思うか？——いや、戻りはしない。契約における過程ではなく結果を消去する宝具ならば、過程で使用された代償はそのままだ。ならばこそ、いまや間桐桜の肉体の一部になっている刻印虫を排除するのに必要なことは、融合している神経を入れ替え刻印虫を物理的に除くことだ」

「そんな……」

じゃああなたにか。

桜はライダーという身を守る術を失ってなお、間桐臓硯に狙われる可能性があるってことなのか。

「……でも、間桐臓硯にとって桜の価値が手駒としてのマスターなら、もう関わってるヒマはないんじゃないの？」

「さて、それは何とも言えないな」

言峰の反論に、遠坂が黙る。

「今、現存するマスターの最大戦力を考えれば分かる。間桐桜を切り札や交渉の道具とし

て考える可能性もあるだろう」

「最大戦力……？」

脳裏に白い少女が浮かぶ。

圧倒的な破壊力、セイバーを為す術もなく叩き伏せた大英雄のサーヴァント——。

「確かにアレは暴風としか言いようがないけど……」

「違うでしょ。なに寝言いつてんのか知らないけど、どう考えてもアンタのことじゃない」

「お——俺？」

困惑にがたんと椅子から立ち上がる。

遠坂はそれを呆れた目で見て続けた。

「あのね……今、残ってるサーヴァントは正体不明の八人目もいれたとして六人。そのうち二人を抱えこんでるんだから、アンタ一人で全体の三割の戦力持つてるってことじゃない——まあ、マスターがへっぽこなのも加味したり、その謎の八人目次第や、他に綺礼が関与していたりすれば、簡単に覆る戦力差だけだ」

「残念だが、私がどうこうした訳ではない。それに既に消滅している可能性もあるぞ」

「冗談。慎二なんていう三流じゃなく、枷を外された桜と組んでたライダーをあっさり倒

すような化け物が、何に負けるっていうのよ」

それには同感だが、同時に幾つか懸念がある。

「理由は二つある」

同じ事を考えていたのか、言峰が続ける。

「一つはそのような戦力を持つなら、そもそもライダーを逃がしはしないだろう。間桐桜にしてもここまでダメージを与えておいて致命傷には至っていない」

「わざと見逃したってこと？」

「可能性は否定できん」

何かを思い出すような顔で頷く。

「なら次の理由は、それどころじゃなかったってことか……？」

一瞬俺をみやり、頷いた。

「そうだ。ライダーに止めを刺すよりも優先すべきことができた」

「なによそれ……。……ッ、しまった迂闊……。……例え一瞬でも失念するなんて」

思い出したのか額を抑えて口元を歪める。

屋上で的一件は今も忘れがたい——あの時現れた影は絶望を伴っていた。

あの時、コレには勝てない——と、理屈ではなく本能で思い知らされた。

「……そういや、アンタにはあの件で借りがあつたわね。とりあえず礼言っておくわ」

「……」
「なんじゃそりや——と、あまりにも無然とした言い方に絶句する。

口元は苦虫を噛み潰したようにぶるぶると震えて、視線を合わせないようにそっぽを向いている。ついでに腕組みして、めいっばい食い込んだ指をみれば、これはもう殴るのを我慢してるのだと思えない。

「……く。礼というのは、何もそうふんぞり返って見下すように言うものではないだろう」
「珍しい……言峰が笑っている。

それに顔を赤くした遠坂が、一層俺にきつくあたる。

「うっさいわね。これでいいのよへっぽこ相手なんだから」

「あまりへっぽここと連呼しないで欲しい。これでも少しは気にしているのだ。

「それも分かった……それで、話がずれ込んでるけど結局のところ桜はどうなるんだ？」

「遠坂が聞きたかった結論ってそれだろ」

「それを決めるのは私ではなく、お前達だ。どうする？ 彼女はサーヴァントを失ったマ

スターだ。望むならここで保護するが」

言峰の問いを全て聞くまでもない。そんなことなら返事は決まっている。

「ダメだ、教会に置いておくなら——」

「私が連れて帰るわよ。だから——」

奇しくも返答は同時だった。

両方から否定されて、言峰の大きな肩がどこか寂しそうに見える。

「……ちょっと。アンタに桜任せておけるわけないでしょ？ いいからひっこんでなさいよ」

そして、遠坂にジト目で睨みつけられた。

こう言われてしまうと、俺に返せる言葉なんて一つしかない。

「——わかった。よろしく頼む」

「ふんっ。アンタに言われるまでもないわ」

返答は厳しいけれど——しかたない、ここまで話をしてくれるように戻っただけ、よしとするしかない。

「お前はそれでいいのか？ 間桐桜は——」

「私が良いって言ってるのよ。これ以上文句でもあるっての？」

「——なら構わん。目覚めてるかどうかは分からんが、ついてこい」

遠坂が頷いて立ち上がる。

俺は扉の方へと向った。

「帰るのか」

「ああ——寝ている女の子の部屋になんて入ったら、後ろから刺されそうだ」

「なによ……人のこと猛獣みたいに……」

無然とした顔で言う。

「違うかい」

言峰まで笑っている。

遠坂はそれで拗ねたのか、駄目押しの一と睨みを見ると、ドカドカと足音を立て行ってしまった。

「お前はこれからどうするのだ？」

「そんなの決まってる。——間桐臓硯を倒す」

「そうか。ならば気をつけろ。ヤツは我々の知らない手を隠し持っているだろうからな」
確か、先日も同じ事を言われた。

「——アンタ意外と面倒見いいんだな。世話になったよ。……それと、桜を助けてくれてありがとう」

「礼には及ばん。迷える者に手を差し伸べるのが神父の責務だ」

その言葉に呆れる。

「そんなこと、ほんとはちっとも思っちゃいないくせに」

そうして、扉を開けて外に出た。

§

外に出ると高い陽射しに目がくらんだ。

冬の陽射しはそう強くはないが、室内に目が慣れていたので少し戸惑う。——大して時

間もかからず、いつもに戻った。

「あれ？」

入る直前に、この辺りが気になるといつてキャスターが言っていた。中に入っている間に、少し周囲を見てくるとのことだったが……。

「どこ行ったんだ」

教会前の白い石畳には誰も居らず、周囲に人影は見えない。

このあたりは丘の上で、少し小さめの公園のような作りになっている。だから、樹の影に入ってしまったり、建物の裏だどこからでは見えないが——それでも、こういう事態に姿が見えないというのは、少し不安を掻き立てられた。

「しかたない……」

あまり単独行動をしない取り決めだったけど、この場合はしょうがない。

教会を右に折れて坂に出ると、手前に墓地がある。

——近場からみてるか……。

整然と立ち並ぶ洋風の墓標は教会に合っているが、こども数が多いと一種のオブジェのように見えるから不思議だ。

ここには新都が出来上がる遥か以前、外国人が多く移り住んできた大昔の時代からあつたお墓らしく、眠っている人々の歳月を思うと感傷的な気分が湧きあがってくる。

——でも今は関係ない。

それを心の底に沈めて、歩く。

背の高い物から、小さな物と多種多様にあるが、概ねサイズは統一されていて視界を極端に妨げるものではない。

目を凝らして遠くを見ると、離れた木陰に赤い服が見えた。

「あれは……」

そちらに近付く。

自然と早足になっていった。

「アーチャー……と、キャスターか」

何とも珍しい組み合わせをみたもんだ。

俺が貸したジーパン姿のキャスターの前で、サーヴァント服のままのアーチャーが樹に持たれて話をしている。

仲がいいとは言えないが、緊張感みたいなものは感じられない。単なる情報交換といった様子だろうか。

「……どうしたんだこんな所で。なんだか珍しい組み合わせだけど」

「他に話す相手もないでしょ」

「それ言われるとそうか。お前はいいのか？ 遠坂についていなくて」

「なに大丈夫だ。どこぞの半人前とは違って、今のここなら問題なく対処できるだろう」
一言多いヤツだ。

「今の……ってどういう意味だよ。前は敵が居たとしても？」

俺の言葉に答えず、ふっと笑って横を通り過ぎる。

馬鹿にされたような笑みに瞬間沸騰しかけたが、なんとか落ち着きを取り戻した。

「アンタ知ってたのか。あの神父がランサーのマスターだって」

「いいや知らんな。あの槍兵もどこの英霊かと思ったら、ここで飼われていたのか」

「そうかよ」

それでなんだか話す気力をなくした。このまま立ち去ってもらえるなら、そっちの方がありがたい。

さっさと行けとばかりにキャスターに視線を戻す。

そこに、

「小僧、バーサーカーはどうするつもりだ？」

「——！」

向こうから話し掛けられた。

「どうするって……どうしようもないだろ。あんなの」

「そうか？ 何かよからぬことを考えていそうだが」

挑発するような笑みに、こちらも自然と不機嫌になっていく。確かに、今の聖杯戦争はおかしい——一度イリヤと会って話をし、出来れば味方についてもraitたいと思っている。

だが……それが成功するかどうかは、正直五分と俺は見えていた。

彼女と教回話したが、それが戦闘回避に繋がるかどうかは、はっきり言って断言できない。

それどころか、少ないやり取りでも聖杯戦争に対して真剣になっている姿を見せ付けられていた。

——まずはイリヤの説得もか。

これは策でどうにかなるものではない。話さないと始まらないが、決裂したらその時点でバーサーカーと戦闘になるのだ。

それを考えると、正直気が滅入る。

「まあいい、好きにしろ。こちらはこちらで勝手に動く」

「——なら話し掛けんな。さっさと遠坂の所に戻れよ」

「まったくだ。無駄な時間を使ってしまった。これは私の失態だな」

くそ、悪態には悪態で返してくる。

コイツは話していても嫌な気分にしかならないので苦手だ。

それ以前に、相性自体が合わないのだろうと思う。前世で何かしら因縁でもあったんじゃないかと疑りたくなるほどだ。

まったく……とついグチグチと悪態をついてしまっていたらしい。

「アナタたち、本当に気があわないのね」

キャスターがなにやら呆れていた。

来た時と同じように並んで帰る。

「お昼の材料でも買っていいこうか」

「……その辺りは、坊やの好きにすればいいのではなくて」

あまり日常生活に関心が無いらしい彼女は、「反応がセイバーと正反対で面白い。」

「ところで、アーチャーと何の話をしてたんだ？」

「ああ……あの場所についてです」

教会の？

「あそこも霊力が強い土地になっている。この冬木市にはそういう場所が複数あるのは気がついてますか」

「柳洞寺もそうだな……」

「そうですねと頷いた。」

「私が神殿にしていたからではなく、あそこも元からそういう土地ね。特に山全体に張られている対サーヴァントの結果は異常なほど強力。何か理由がありそうだけど……後回しにしましょう。そして、柳洞寺のほかに教会と、それから新都にある公園……」

「ぴくりと思わず足を止めた。」

あの場所は、更地になって芝が植えられ、公園になった後も人の寄り付かない地になっている。

「このどれもが、密度の濃い霊力が渦巻いている。今回は柳洞寺のようだけど……どうかしたの？」

「いや——どうもしない。それで、今回って何が？」

「聖杯の降臨場所です」

キヤスターの言葉に、今度こそ足を止めた。

「聖杯って、コップみたいなヤツじゃないのか？ 手に触れて、持てるからこそその聖杯だろ？」

「私もそう思っていたのですけど……」

朝話したようなものなら、聖杯の受け皿は何でもいいらしい。だから、聖遺物としての伝説の聖杯でなくても、力を受け取って封じられる物があれば、それは即ち聖杯になる。

降臨にあわせて力が注がれるのだから、今の時点では無機物と変わらない——というのがキヤスターの説明なのだが……。

「それって、教会にあるんじゃないのか」

確か最初の夜、遠坂に連れられて行った先で言峰に聞いた覚えがある。

「……そっか、知らず知らずのうちに言峰を信じ込んでるな」

それ自体は悪いことだと思えないが、取捨選択できずに盲信するんじゃ意味がない。それでは自分で考えて戦っていることにはならない。

「聖杯が穴よりあふれ出る力を受け止める入れ物なら、それ自体は何でも構わない——ただ、私には教会にあるようにには思えないのです」

「キャスターが言うならそうなんだろうけど、よくそんなの気がついたな」

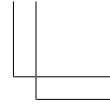
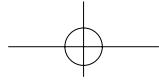
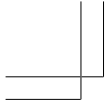
「そうね」

——と、どこか自嘲気味に言う。

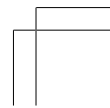
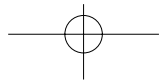
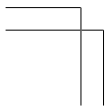
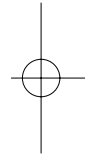
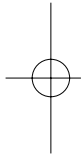
「……？」

首を傾げたが、何も語ろうとしないのでそのまま聞き返すこともしなかった。

そろそろ、新都と深山町を繋ぐ大橋を渡る。後は商店街で買い物をしていけばいいだろう——。



69



食材を買い込んで家に戻ってきた。

行きつけの八百屋に仕入れたてのいい野菜があつたからそれにする。今からだあまり時間を掛ける物はだめだが、森に行くなら弁当くらいは合つた方がいいだろうとの判断で、サンドイッチに使えるようなものを中心に選んだ。

「ただいま」

玄関に買い物袋を下ろして一息つく。

何も持っていないキャスターはそのままスタスタと中に入っていく。——いやまあ女の人に持たせる気も無かつたけど、全然手伝おうという気配が一切無いのはさすがとしか言えない。

よほど人にかしずかれる生活に慣れていたんだろう。

「よく敵しい柳洞寺で暮らせたもんだ」

なんだかそこに、葛木への愛の深さを垣間見た気がした。

「お帰りなさいシロウ。変わりはありませんか」

「ああ、たがいま。——つと、悪い」

奥から出てきたセイバーが買い物袋を持ってくれる。

そのまま後に続いて居間を抜けてキッチンに入った。

「待たせて悪かった。ちゃつちゃと作るから待っていてくれ」

「それは構わないのですが……キヤスターはどうでした？」

——と、ついできたセイバーがちらりと後ろを見る。

そこには悠悠自適、我関せずの顔をしたキヤスターが、自分用にいれたお茶を飲みながら座っている。

最近はず室に引籠もることもなく、こうしてテレビをみてヒマを潰していることが多い……何か趣味とかないのだろうかと思わなくもないが、戦っていない時のサーヴァントなんて概ねこんなものだということを、セイバーの例からもよく知っている。

「いや、特にどうということもないけど……魔術を教えてくれると言うようになってからは、ヒマを見つけてはいろいろと講義めいたことをしてくれるようになったよ」
「そうですか……ならいいんですが」

「……？」

納得したような、それでもどこか警戒心の拭えないような表情をしたセイバーが曖昧に頷く。

「簡単に作るから座ってテレビでも見せてくれ」

「……はあ。シロウがそう言うなら」

何とも煮え切らない返事をして、居間に戻っていった。

二度目の疑問符を頭に思い描きながら、料理に戻る。出かける前にご飯は炊いてあったので、それに合わせて作ればいい。

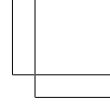
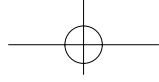
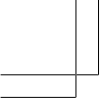
冷蔵庫の残り物を取り出し、いくつかをレンジで暖める。

後は簡単に鰹節を煮込んでダシを取り、大根を多めにいれて味噌汁を作る。——こういう時間を考えて作るとき、味噌は楽でいいと思う。

器にコンニャクをいれてラップに掛け、電子レンジで暖める。

取り出したら三角に切って串を通し、湯通しして甘味噌で味をつければこれで立派な味噌田楽だ。後は他のものと合わせて居間のテーブルに並べ……。

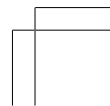
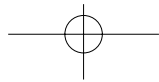
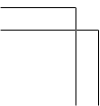
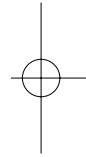
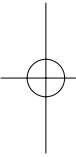
——ついでに弁当も作っておくか。



イリヤと会うと決めた時から、やはり行かなくてはという思いがひしひしと強くなる。
……もしかしたら、イリヤもこんな状況になる事を見越して、俺に城までの道順を教え
たのかもしれない……。
ふと、そんな事を思っていた。

§

「反対です」
昼食を終え、切り出した第一声がこれだった。
——もう何度目になるか分からない議論は、何時までたっても平行線のままです。辟易する。
「でも、今の聖杯戦争がおかしいってセイバーも分かっているだろう？ 味方にならなく
ても、バーサーカーと積極的な戦闘を避けられるなら、それだけ対処しやすくなる」
「……シロウは、私がバーサーカーに勝てないと思っっているのですか」



「そういう挑発めいたことを言ってもダメだ。セイバー自身が一番よく分かっているだろう？
何の策もないままぶつかっては今のセイバーじゃ負ける。一度身を持って体験して
じゃないか」

「それは、そうですが……」

今でもあの時のことを思い出すと冷や汗がでる。

血に染まったセイバー、殺されかけた俺。あまりよくない記憶だ。

「キヤスターはどうなんだ。やっぱり反対なのか？」

そして先ほどから変わらないキヤスターに水を向けてみた。実は彼女も反対派で、教会
から電話があるまでは結構派手にやりあっていたりする。

「ただ、キヤスターから出た言葉は意外なものだった。」

「そうね。いいんじゃないかと」

「——キヤスター、貴様」

まあまあと手で押し止める。

ようやく見えた突破口だ。ここでセイバーにさらにヘソを曲げられては話にならないた
め、細心の注意を払って落ち着ける。

「とりあえずセイバー、話を聞こう。さっきまで二人がかりで俺を止めていたんだから、考えが変わる何かがあったってことなんだろう？ 俺も賛成してくれるのは嬉しいんだけど、その理由を聞いてみたい」

「坊やがそう思うのは無理からぬことでしょうけど……アインツベルン。聖杯を作りし者たち。先ほどの話をあわせて何ともキナクさい匂いを放っているわね」

「教会には聖杯がないって話か……」

なるほど、確かに近道で言うならイリヤが最も聖杯というゴールに近い。

この冬木市の聖杯戦争は三つの家系の協力で作られている。——世界に穴を穿つもの。サーヴァントを役する術を作り上げたもの。そして聖杯を用意するもの。

世界に穴を穿つというのは、朝話していたこの世界の外の力のことだろう。

聖杯はそれを受け止める器だというなら、これを所持していた方が聖杯戦争で有利になる……。

「教会に聖杯が無いのなら、イリヤが行く先を知ってる可能性が高いな。……となると、臓硯もそれを狙ってくるかもしれないのか」

「そうね。それもあるけど……」

少し考えたしぐさをする。
「やっぱりなんでもないわ。ただ、私はバーサーカーが嫌いなもの。坊やお遊びには付き合わないわよ」

「ああ、それは構わない……俺としてもバーサーカーは苦手だよ。強すぎるくらいだし、狂戦士の名の通り話し合いもできないやつだからな。だから、セイバーに頼もうと思ってる」
「……シロウ。だから私は反対なのですが」

「今のキャスターの話聞いて、そうも言っちゃられないだろ？ バーサーカーが負けるとは思えないけれど、アサシンはどこにでも潜むって言ってたのはセイバーじゃないか。不意打ちでマスターを倒せばバーサーカーも消える。そしたらみすみす臓硯に聖杯を取られて終わりだ。……賞品としての聖杯はいらないけれど、それを奪われていいかどうかっていうのは、別問題だし」

——はあ、とセイバーが盛大に溜息をつく。

「こうなったシロウは頑として話を聞かない。本当に、頑固だ」

「……それ、前に貴女が私に言った台詞ではなくて」

含み笑いをして、キャスターが言う。あの時……慎二に捕らえられた桜を助けに行こう

と、学校に乗り込んだときだろう。

その時も俺は留守番しろと二人がかりで言われて、自分が囿になるとつきとおしていった。

「そういうこともあったっけな。とりあえず、イリヤの方は大丈夫だと思う。この前会った時は何とか話を聞いてくれそうな雰囲気だった」

「話を聞いてくれる雰囲気……？ バーサーカーをけしにかけて、一人で高みの見物をしていたあの少女がですか……？」

——あ。

そういえば、彼女と会ったのは俺が一人でふらふらと歩いている時だった……。

「いや、前に街中で会ったことがあって……その時に……」

しどろもどろで説明する。

セイバーから、先ほどより倍化した嘆息が戻ってきた。

「私はそろそろ、諦めという言葉と自らの無力を知りました……」

「い、いや——ホントに悪かったって思ってるんだぞ？ 最初にイリヤに会った時なんて、令呪でセイバーを呼び出そうかと思っただくらいなんだから」

「—では何故、その時に呼ばなかったのですか」

ギン！ と眼光が鋭く光る。

表情こそ大して変わっていないもののめちやくちや怖い。

「だつてなあ」

あの時のイリヤは、俺の無事をただ純粹に喜んでくれていた。殺しかけた敵対するマスターを前にあんな無邪気な顔で『本当に生きててよかった』なんて言われ、その事を話すと泣き出しそうにまでなっていたのだ。

突き放すなんてとてもできたものじゃない。しかも一度きりじゃなく、それから数回出会っていて、セイバーに話すのを忘れていたなんて言ったら……。

——ダメだ。恐ろしすぎる。

背筋を走る寒気は、何も目の前の彼女だけに感じる物ではあるまい。

「……ところで、先ほどから分からないのだけれど」

そこで、キヤスターが不思議そうに口を挟んだ。

「イリヤというそのバーサーカーのマスターは、どのような魔術師なのかしら？」

「ああ——そうだな」

どう説明した物だろうか。

俺には、相手の魔術を説明するなんていう知識はない。

「うーん……」

首を捻る。彼女に会って城の道まで教えてもらった……それは話さなくてはならないだろうけど、メカニズムが分からない。

キャスターにどのように説明するのがベストなのか検討もつかない。

「私が見たときは幼い少女の姿をしていた」

見かねたのかセイバーが言う。セイバーの目からみたイリヤの特徴が挙げられていく。あくまで確定ではなくその時の姿として語っているのは、魔術師において姿などどうとでもなるという意味合いを含んでいるからだろうか。

幼い少女で銀髪の——と、セイバーが続ける中、キャスターがこちらを見ている。

「……ふうん。なかなか可愛い魔術師だね。——ねえ坊や、頭の中見せてもらってもいいかしら？」

などといった、ニヤリと笑う。

「なんで？」

「キャスター……きさま」

「話を聞いてもよく分からないわね。直接見せてもらった方が、すぐ理解できるのだけれど」

「それは確かにそうなのだが……」

「危険はないのか……？」

「何も問題はないわ。万が一失敗してもただかだか廃人になるくらいで済みます」

「そこで何か一つ、得心したように頷く。」

「その場合余計な意識が消えるから、貴方の脳髓を貰い受けて私の魔杖として活用してあげましょう」

「絶対につ！ お断りだっ!!」

「あらそうと残念そうに言うキャスターを、セイバーが目を丸くして見ている。」

「そして、優雅に微笑むと――」

「興味が湧きました。私もそのイリヤさんの所に同行しましょう」
「なんてことを言い出した。」

その後ひと悶着があり、議論は終わった。

「どうしてこんなことに……」

珍しくセイバーが文句を言っている。

反対派だったキャスターが積極支援派に回ったことで、二対一となりそのまま押し切られる形になった。

俺としては紆余曲折あったものの、話し合いで済んだのだから万々歳といった結果だ。だけど、セイバーにしても聖杯の行方と、それを間桐臓硯が抑える危険性を考えては、強く反対も出来ないように最終的には領いてくれた。

ただ、完全に納得は出来ないみたいで、どうしてこんな状況になったのかと自問自答している。

「とりあえずさ、結構長い行程になるだろうから弁当作るよ。もう少し待っていてもらっていいかな」

「……わかりました。そちらはシロウにお任せします」

——言って、道場の方に歩いていく。

「ふふ」

それを横目で見て、キャスターが楽しそうに笑っていた。

「まったく……」

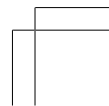
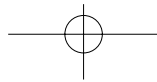
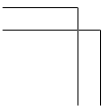
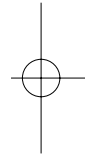
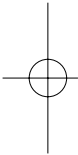
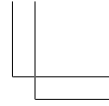
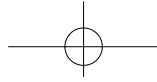
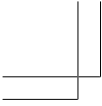
意見を受け入れてもらったのは嬉しいが、前途多難な雰囲気を漂わせていた。

もともとお昼の買い物は弁当前提だったので、準備自体は手早く終わる。

各人の好みと携帯性を考え、サンドイッチとおにぎりで済ませる。捨ててこられるように竹の皮で包み——あの深い森で方が一迷ってもしばらく持つように、飲み物を余分に用意する。

まあ、サーヴァントが二人もいて、マスターが迷子になった上に餓死ではなんとも情けない。

イリヤに教えてもらったルートを頭の中で反芻しつつ、準備をすすめていった。



「ここで止めてください」

街の郊外までタクシーを出してもらい、料金を払って降りる。

セイバーとキヤスターという美人二人を連れてこんな森の前で降りるのだ。人のよさそうな初老の運転手は車を出しながらも、不思議そうにちらちらとこちらを眺めていた。

「ここを降りるのですか？」

「ああ、確かこの先に入り口がある。結界が張られているみたいで、特定の場所からじゃないと入りできないらしい」

「……そうね、強い魔力を持つものか、森の主ならともかく……貴方だと入り口からでないと無理でしょう」

「だろうな」

キヤスターの言葉に頷く。

やはり半人前は定められたルートを使うしかないだろう。

深山町の交差点でタクシーを拾い、ここまで約一時間。途中信号に捕まったり、遠回りしたことを考えると、徒歩だと大体三から四時間と言った計算だろう。

——なかなかの距離だ。

料金もそれに比例してあがっているので、今月はそろそろピンチになってきている。
——なんとも小市民的だが、これが終わった後も生きていかなくちやいけないんだから、仕方がない。

「……いこうか」

そう言って、荷物を担ぎなおす。

木刀を二本入れた竹刀袋と、弁当の入った小さなバックが行軍のお供だ。

セイバーとキャスターは無手になっている。

彼女達に何か荷物を持たせることはできない——俺ではなく彼女達が最大戦力なのだから当然だ。

ガードレールをまたいで斜面に降り立ち、そのまま森へと向って降りていく。セイバーは身軽に一気に飛び越えていた。

「……あの、すこし待つて欲しいのですけれど」

「ほら、手捕まって」

なにやら後ろで一人、乗り越えるのに苦勞している人がいたが、ここまでは概ね順調

だった。

ガードレールから道路沿いの坂を下り、しばらく歩くと徐々に木々の密度があがってくる。

「……………少し寒いな」

時計で確認するとまだ午後三時になったばかりなのに、すっかり夜の雰囲気を感じさせている。

上を見ると、厚い木の葉に日光が遮られている。

『くすくす』

不意に、少女の笑い声が木霊した。

耳に聞こえたのではなく、直接頭に響いたように感じる。

「テレパシー……ってやつか……？」

どんな魔術なのか——それとも魔術とすら呼べないただの技術に過ぎないのか、俺の未熟な知識では分からない。

しかし、既にイリヤに存在を悟られていることは理解した。

「イリヤ！ 聞こえるか？ 会って話したい……中にはいるぞ！」

『やっぱり来てくれたんだ、お兄ちゃん。——うん、いいよ。来るまで待っていてあげる』
「戦いに来たんじゃない。俺は会って話がしたいだけだ……それを忘れないでくれ」

『せつかくセイバーとキャスターまで連れてるの？ それだけじゃつまらないけど……
うん、せつかくお兄ちゃんの方から来てくれたんだものね。準備して待っていないと』
「……約束だからな！」

再び笑いの気配を残して、イリヤの声が遠ざかる。

第一段階クリア……つてところか……？

「もう少し先が、侵入者を阻止する結果になっているようですね」

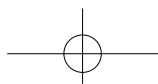
とすると、まだ本格的なテリトリーに入っていないものにも関わらず、見破られていたって
ことか……。外見こそ幼い少女だけどやっぱり俺なんかとは桁違いだと実感する。

「……いっつう」

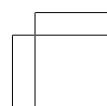
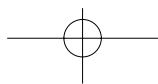
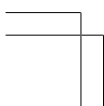
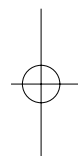
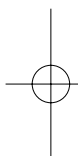
油断なく前に進んだ。

キャスターが示した空間を通る時に、

「——っ」



ちくりとした痛みが走った。静電気が走った背筋が粟立ち身震いする。
「これが境界か……」
セイバーとキャスターが同様に通り抜けるが、首を傾げる。——特に何も感じなかったらしい。
彼女たちの対魔力の高さを思うと、これくらいなら何ともないのかもしれない。
森の奥に視線を向ける。
そこは入り口とは比べ物にならないほど昏い。僅かな木漏れ日だけが光源の、昼にしてなお黒々とした闇が広がっていた。



Interlude / 12 a Darkness

—— 昏い、湿った石造の室だった。

光源のない室内は漆黒の闇。ただ騒々と蠢く気配がある。

「魔術師殿」

一つ——白貌が浮かんだ。

眼窩は虚。肉の亡いその髑髏は、闇に浮かぶ面だった。

「戻ったか——して彼奴らの動向は？」

気配の無い室内より、皸枯れた声がする。白面は誰とも分からない声に向かって語りつづけた。

「セイバーと魔術師は狂人の元に。アーチャーとその主は御老人の孫を連れ戻りました故、その後は掴ませぬ——しかしよろしいのですかな。奴らを野放しにしておいて」

「珂ッ！」

皺枯れた甲高い声を出す。

「珂珂珂珂ッ……構わぬよアサシン。所詮、あの器など壊れた玩具に過ぎん。ただワシの望みを叶えられるのであれば、何でもよい」

「——しかし、聖杯の器を取り返されたのは」

「だからよいと言っておる。この聖杯戦争というのは、陣地を競い合うのでなければ、何かを奪い合う必要もない。——ただ、座して待てばそれでよいのよ」

アサシンには老人の言葉がわからない。

座して待つ——それは、聖杯の降臨を待つということだ。しかし、ならばこそ手元に聖杯があつたほうが事は容易く成せるはず。

しかし、それすら要らぬと言われては困惑の一つもしよう。

「最後に勝てばそれでよい。我が孫にいたれた虫の呪も解かれた今、再び掌中に収めた所で足手まといよ。……いやいや、しかしは何とも孝行な娘よな。自らの責務だけはきちんと果して行きおったわ」

「あの、真夜^{アルヌイト}のことですか」

聖杯戦争に割り込むように現れた、正体不明の影――。

「おうおう。おうよ。その通りよ……！ あれはな、アサシン。影よ。罅割れた器より零れ出でた、聖杯の中身よ。ならばこそサーヴァントはあれには勝てぬ。――聖杯は聖杯戦争を司り、英霊を呼び出すもの――そして、英霊の逝く所よ」

「……………」

アサシンはじつと老人の言葉を反芻する。

あの影は危険なものだ。自分のような英雄もときでさえ、触れば魔力を奪われる。

――聖杯戦争の表舞台に現れる純正な英雄にとって勝ち目などあるまい。

「して、魔術師殿はどのようにして、あの真夜を……？」

「なに。昔、面白い物を拾ってな。十年程前に辺り一帯が業火に包まれたことがある。その時手にいれた欠片に手を加え、虫に変えてとある娘に埋め込んだ」

「なんと――」

欠片――辺り一面を焼き尽くす炎の原因となったモノ――ならばそれは――。

「前回の聖杯の、欠片……！！」

「カッ！ カカカカカ……ッ！ ただの気紛れが面白い物を産み落としたわ。聖杯とは指向性のない力の塊。それが悪意に染まったのが今の冬木の聖杯よ。仮初の器となった我が孫はそれに形を与え、衝動を与え、魂を貪り喰らう影とした」

人から拒絶されること。人を欲すること。人を傷つけたいと思うこと——。

「だが足りぬ。この世界で中身を維持することはできぬよ。肉体を持たぬ塊というのは、その実極めて不安定よ。身を形づくる魔力は大気に溶け、世界が正常に浄化するそして、それを阻む殻もない——なんせ実体が無いからのう。……腐り逝く我が身と同じよ」

老人の言う通り、室内はむせ返るほどの臭気で満ちている。

肉の腐りゆく臭い——大気を汚染するほどに濃い、瘴気。

「だからこそ僥倖。だからこそ幸運よ。——のう知っておるかアサシン。我が孫に埋め込んだ聖杯の欠片——それと同じ、いや……遥かに濃い泥を直に浴び、飲み干し、長い時間を掛けて体内で育て上げた者がいることを」

「……………」

アサシンは咽を鳴らす。

この闇に住まうサーヴァントにして、老人の狂気は棘のように突き刺さる。

「飲み干された闇は消えず、時間と共に肉体の隅々まで行き渡り一つとなった。汚染されることなく、飲まれることなく育まれた闇は既に同一。——仮に、聖杯が破壊されることがあるならば、この者も一蓮托生の身となろう。ああ……ああ、そして、なんとも不憫なことにこの者はそれを知らぬ。カカカカツ！ 悲しいのう……悲運に満ちた生とはなんとも嘆かわしいことよのう」

「それが……魔術師殿の切り札……！」

「応よ。ならば既に勝敗は決したも同じ事。手にすべき中身に勝てる者など居らぬ。」

——だからこそ、ワシらは座して待てばよい」

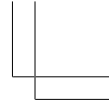
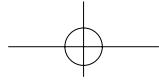
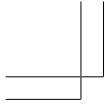
ただ懸念があるとすれば——。

「そうさのう。となると本物は邪魔なだけじゃ。——ちと様子を見に行くとしよう」

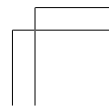
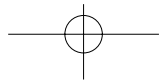
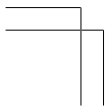
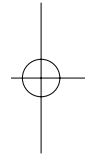
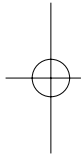
「……承知仕った」

白い髑髏が掻き消える。

闇の中、老人の声が木霊する。



落ち窪んだ眼窩の先。老人——間桐臓硯が見下ろす先、蟲共の寝所に横たわった人物は



森に入ったとき、西に向って傾いていた太陽はすっかり地平線に沈んでしまった——らしい。

断言できないのは空が満足に見えずに時計と、木々の隙間から入る木漏れ日が完全に消えたことから推測するしかなくなったからだ。

森に踏み込んで、既に三時間が経過しようとしていた。

「はあ」

足を止め、大きく息を吐き出す。

常日頃から鍛えている成果か、まだ疲労が溜まっているという程でもない。最近セイバーから受けている厳しい稽古のおかげでもあるだろう。

とはいえ、幾ら進んでも森の出口が見えないというのは、精神的に参る。

「少し休憩にしましょうか」

そうセイバーが提案してきた。

「……そうね」

キャスターが同意し、どこか休める場所を探す。

これからイリヤに会うかと思うと、少し気が逸る——できれば一分一秒でもと思い、このままでも大丈夫だと言いつ張ろうと思つたが……ダメだな。先が見えないからこそ、休息を取って万全の状態にした方がいいだろう。

「わかつた。軽く腹こなしでもしておこうか」

背負っていたザックから、竹の皮で包んだ弁当とタオル。それに水筒を取り出した。それらをセイバーに渡すと、表情が僅かにほころぶ。

そんなにお腹減っていたのかと聞こうと思つたが、

「——あ」

腹の音が鳴つたのは同時に、気がつけば俺の身体も空腹を訴えていた。

「まあ——くすくす」

笑い声に向けると、戻ってきたキャスターがいた。

「坊や、あちらに」

指差す方向に少し開けた場所がある。

少々バツが悪くセイバーと視線を交わすと、先導するキャスターの後をついていった。
——そこは、空の見えるほど開かれた場所で、まるで円形の舞台のように森から切り抜かれたようだった。

「そろそろ日が沈むな……」

見上げた空は茜というには深い群青に染まり、漆黒というにはまだ明るさを残していた。だが、それもいつまでも持つまい。

森に着くまで一時間——ここまで歩いて三時間……。

周囲を見渡し、記憶で辿った道のりを確認する。あの時は一瞬の出来事ではあったが、こうしてみるとイリヤが丁寧にトレースしてくれていたのがよく分かる。

このままのペースなら、後一時間ってところか。

「シロウ」

目の前におにぎりが差し出された。

「ああ、ありがとっ」

取って口をつける。歩き詰めだった身体に少し濃いめの塩加減が美味しく感じる。休憩中に今辿ってきた道のりと、残りの距離を伝える。

——もしバーサーカーを連れて迎撃に来るなら、とつとくに遭遇していてもおかしくない時間が経っている。

それをしないということは、やはり俺たちが辿りつくまで待つているということだろうか。迎撃のための待機ではない保証がないのが痛い——こればかりは着いてみないと分からない。

「……シロウは聖杯についての情報を求めるために、イリヤスフィールに会いに行くと言っていました」

「ん？ ——あ、ああ」

とつとつとセイバーが言う。

「しかし、それがここまで危険をおかしてまですることなのですか？ 聖杯とは聖杯戦争終了時に現れるもの。それが何であれ、今の私たちが気にする必要はないと思うのですが……」

セイバーの言う事は正しい。今の俺たちはバーサーカーに対抗する術を持たず、無策で敵の陣地に取り込まれている。

キャスターは……ここまで来たということは加勢してくれるかもしれないが、それだけ

を宛てにしてはいけないうらう。

あの暴風のようなバーサーカーの攻撃は、油断が即、死に繋がるほど圧倒的だ。

「セイバーの言うことは正しいと思う。……それが通常の聖杯戦争ならだけど」
「……………」

既にこの聖杯戦争が異常をはらんだまま進行しているなんて——この場に居ない遠坂たちを含めても——全員の共通見解だらう。

「ありがとう。でも……………」

少し思考をまとめる。

森の空気は街中より冷たく、周囲を木々に覆われているせいかどことなく酸素の密度が高い気がする。

——息を吸い込むと、それで思考がクリアになる。

「一番の理想はイリヤと手を組めることだ。……アインツベルンが保有する聖杯戦争の知識は頼りになるし、バーサーカーの戦力はアテになる。……でも、イリヤは聖杯戦争に積極的だったから、これがスムーズに行くとは思っていない。だから忠告くらいはしておきたいっていうのがもっとも現実的な所かな」

「忠告……ですか。それであのイリヤスフィールが受け入れ、引き下がるとでも？」

「確率としては五分五分か、もう少し高いと思ってるよ。間桐臓硯のやり方は気に入らないけど、手回しが良くて姑息だ。アサシンは正面からバーサーカーと戦ったら絶対にはバーサーカーに負けるけど、アサシンの最大の戦力ってそこじゃないだろ」

サーヴァントにはそれぞれ得意とする能力と相性がある。

セイバーは総合的な戦闘力が、キャスターには魔術の知識と自らの陣地である神殿を作る権利が。

そしてアサシンには、彼女達にすら気取られずに気配を消し去る非常に高い隠密性を有している。

「だから、結局のところ、イリヤに忠告くらいはしておきたいというのが第一かな。次にせめて傍観に回ってくれば余計な敵を増やさないで済む……味方についてくれるというのが理想だけだ」

話はこれで終わりだ。

セイバーは俺が戦い始めた時から、ずっと無茶に付き合ってもらっていた。だから、今回も納得してくれるといいんだけど……。

「——はあ。シロウの無茶無謀はもう永遠に治りそうにないですね」

「悪かったな」

「そんな所も含めて、マスターと認めたのですから……わかりました。貴方の判断に従いましょう」

「——ホントか！ そりゃよかった。やっぱりセイバーに納得してもらえてないっていうのはちよつとキツかったからな。これで安心できた」

「何もそこまで喜ばなくても……」

——と深々と溜息をつく。

「……まったくあなた達ときたら」

「笑うなキャスター。……これでは、反対していた私が馬鹿みたいだ」

——無然とした調子でキャスターに返す。

——やり取りの意味が良く分からないが、懸念事項が消えたのありがたい。見ると、すっかり日も落ちようとしていた。

「行こう。もう少しで城に着くはず」

ザックを手に立ち上がる。

暗くなっただけで方向を間違えないようにしないとイケない。——と、ふわりとホタルの
ような淡い光が飛んできた。

「それを先導させましょう」

振り向くと、キャスターの周囲にも五つほど飛んでいる。明りを作ってくれたのだろう。

「助かる」

頷いて感謝する。彼女は微笑んでそれに答えた。

「——待ってください。シロウ」

「ん？」

必然的に殿を務めるセイバーに振り返った。

「二つだけ確認です。——もしイリヤスフィールが話し合いに応じず、バーサーカーを差
し向けてきた場合……」

「……ああ、その時はどんな手段を使っても倒そう」

「分かりましたマスター。話はそれだけです……いきましよう」

日はすっかり落ちていく。

ふわふわと漂う淡い光源に照らされ、俺たちは昏い獣道に足を踏み入れた。

10 / アインツベルン
1

遠坂邸とも言うべき遠坂凛の住まう洋館は、深山町から外国人住宅地の名残である——
通称洋館街の坂を登りきった所にある。

広さこそ、遠坂家に並ぶ古い歴史を持った間桐家に及ばないが、それでも一般人がうらやむほどの敷地と風格を備えている。

敷地内は最小限の手入れだけでも人々を圧倒する佇まいを見せ、窓に閉められたカーテンは外部の光を遮断する。

煉瓦造りの外壁の内側は樹木で二重の壁となり、そこを通り抜けた中庭にはプールまで存在していた。

——もつともこちらは膝の高さまでしか水が張られておらず、その上からビニールシートで覆われて枯葉や風に飛ばされて吹き込んでくるゴミが入らないようにされているため、一見してプールだと思わず、うっかり足を踏み入れようものなら十メートル規模の落とし

穴として機能する。

あまりの風格と、魔術師が代々住まう霊格は付近住民にも浸透し、立派な幽霊屋敷として扱われている。

噂が一人歩きしているだけではなく、結界すら張られている屋敷には泥棒はおろか、近所の子供から猫の子一匹入り込まない。

……そんな優雅な造りの遠坂邸に今、住人が一人増えていた。

「あの、遠坂先輩……なんだか申し訳ないです」

言いつつも頬を染めて、嬉しそうにシーツに顔を埋める。

あそこまで大見得を切った上にそんな嬉しそうな顔をされては、もはや魔術師として問うだの、遠坂と間桐の間の盟約なんてものはすっかり忘れた。

遠坂凜はそんなくすりと笑みを浮かべつつ、手にした器を差し出した。

「あんまり味しないけど……今ならお粥くらいが限界でしょ。綺礼のおかげで傷そのものは塞がっても、しばらくは寝たきりのダメージでしょうね」

「……ごめんなさい。迷惑かけて」

「馬鹿ね。こういう時はありがとでいいのよ。死んでもおかしくなかったんだし、桜の

「ミスじゃないんだから生きていた事を喜びなさい」

桜が頷く。——あの時の光景は忘れたいほどに強く、脳裏に刻み込まれていた。

ライダーは弱くない——いや、純粋な戦力比較で言えば、間桐桜が使役し、流星となつて地を駆けるライダーの強さは、屋上で垣間見たセイバーにすら匹敵するだろう。

衛宮士郎の未熟さゆえに全力を出し切れていないセイバーだが、どこかの名の知れた英雄なのか、そのポテンシャルの高さはマスターとしてみれば一目瞭然だ。

それに匹敵できるライダーは、その実力は、数ある英霊の中でも決して低くない——それどころか、上位に位置しているのではないかと思う。

単純な数値比較で言うてしまうのなら、目の前の遠坂凛が連れているアーチャーより高かった。

もちろん、純粋な意味の強さでライダーがセイバーとアーチャーを完全に上回っている訳ではない。英霊にはそれぞれ相性があり、基本数値の差など相性と宝具によってあつさり覆ってしまう。——だが、それだけに無視できない。

追い込んでから宝具を撃てるのと、追い込まれてやむなく宝具を使うのでは状況が大違いである。

だから、力、体力、スピードと根本的な実力を持ったライダーは、強い。

「そうですね……なんで生きているのか、私にも不思議なくらいです」

それをあの青年はあっさり打ち破った。

僅かにライダーが反撃の機会をつかめていたように思うが、それは遊ばれていた結果だと知っている。山ほど宝具を持ち、それらが無造作に放つ謎のサーヴァント……そんなものに相対して生きているのだから、一瞬の隙をついて逃げ出せたのも不思議で仕方がないくらいだ。

「ま、人生不思議なことなんて幾らでもあるんだから、さつさと傷を治しなさい。あなたが殺されずに戻ってきて今ここで寝てるなんて、あのへっぽこがセイバーのマスターになるより当り前のことなんだから」

「先輩、ひどいです」

くすくすと二人で笑いあう。

外は薄暗くなっており、夕陽が沈もうとしていた。——柔らかな光に照らされた室内に、穏やかな空気が満ちる。

「……美味しいです」

スプーンを放し、嘔み締めるように味わう。確かに薄味だったが、塩加減の効いた食感に染み渡るようだったし、口当たりの甘さにほっとする。

数度口に運んで息をつく。

消耗しきった身体は食事を欲していたが、感慨が深すぎてそれだけで泣けてきそうだった。

「——あと、あなたの怪我、後に残らないってさ。傷口も刀傷だったし、なんか剣の切れ味良すぎて素直にくっついてくれたって。……世の中には傷つけられたら治せない魔剣なんてのもあるから、その類じゃなくて本当によかった」

「はい……私もそう……思います」

その言葉に喜びがこみ上げ、間桐桜は頷いた。

あんな——間桐の家では女どころか人としてすら扱われなかった。幾日も蟲蔵に押し込められ、人間性すら蹂躪された。子供の頃はいつも鏡を見て綺麗に死ぬ方法なんて考えていたのに……それでも傷痕が残らないといわれて、嬉しい。

——が、胸を締め上げる程に狂おしい感情が湧きあがる。

学校に仕掛けられた結界。紅の地獄で肌を溶かされる人たち——彼らの傷は障害残るモノだ。それなのに、今こうして喜んでいる自分が浅ましい……。

「あの……先輩はどうなりました？」

「おすおすと切り出す。僅かに意識を取り戻した時に、神父が他にも自分の状態を伝える者が必要かと聞いた。」

「それにきちんと答えられたかは覚えていないが、二人の名を出して再び眠りについたように思う。」

「一人は目の前にいる遠坂凜。もう一人は幾度となく桜を助けてくれたあの少年——。」

「あいつか……。」

凜はなんだか複雑な顔をしている。

「敵意と言うには薄いけど、好意というにはまだ遠い。曖昧すぎて自分でも持て余す、中途半端な感情だった。」

「衛宮士郎に借りを作っていた訳ではないが、彼がキャスターを助けたり、凜を焼き付けるとようなことを言わなければ、魔術師のプライドに凝り固まった自分桜を前に何を言い出したのか想像に難くない。」

だから、ある種の恩義のようなものが漠然とあるのだが……気持ちの整理がつけられない。

凜にとつてキャスターを倒すのも、外道に落ちた魔術師を処理するのも、全て自らが是として生きてきた道だ。

今までそれら外道の魔術師に手を下したことはなかったが、そうするものだとは心構えをしてきている。

それに異を唱えられて、最初は全力で反発した。だが——今の結果を思うと、少しくらいは許してやろうという気にもなる。

ただ、何とも憎らしいのは彼の方は変わらず友好的な態度を崩していない。これで少しは下手に出るような言動をすればいいのに、嫌われている前提でそのまま友好的に接してくるのだ。

それも複雑な感情を掻き立てる一因になっている。

「あの、遠坂先輩……？」

言葉が途切れた事に桜は心配になった。

——何かまずいことを言ってしまったのだろうか？

目の前の遠坂凛と衛宮士郎が戦っている現場を見たことがある。衛宮家の中庭で相対するアーチャーとセイバー。

そして背中を大きく裂かれて地に倒れた衛宮士郎。——そしてキャスターと三人のサーヴァントがあそこにいた。

遠坂凛は手加減をした様子はなかったが、本気で倒そうとしたわけではないと言っていた。だから、案外そこまで仲が悪い訳ではないのかもしれないと、少々樂觀視していたのだが……結果はこれである。

「んー。なんかバーサーカーのマスターと話をつけるとか、またなんか言いだしてる。——まあ、聖杯戦争なんてやってる場合じゃないし、味方になれば確かに大きな戦力だから間違っちゃいないんだけどね。アンタを襲った例の金髪がそこまで強敵なら、バーサーカーの力は捨てがたいし……」

あの影のこともあるか、と凛は屋上の光景を思い出した。

桜はあの時倒れ伏していたから見ていないだろうけど、影が真っ直ぐその腕を伸ばした先には……。

「……あの、他には？」

目の前のこの娘がいたように思う。

マスターが一箇所に固まっていたから三人纏めて襲われたように見えるが、本当は誰か一人だけが目的だったのだと、遠坂凛の直感が告げている。

衛宮士郎の機転で自分は助かり、彼は僅かに接触した影の瘴気で倒れた——が、そんな状態でも、再び狙おうと思えばそれもできたはずだ。

それなのにあっさり消えた——それは、ライダーが桜を連れ去ったからだろうかと自問する。

第一、現れたタイミングも変だ。キャスターの宝具は契約している全ての契約を解除するというもの。

その強力な力は過去に執行された誓約にまで及び、令呪の力すら覆す——つまりは契約しているサーヴァントすら解除してしまうことにある。

あの時影が現れたのは、桜の枷が解き放たれた後。

何かを求めるように伸ばした先には、間桐桜——。

「ダメね。全然情報が足りない」

「……はあ。そうですか」

「あ、ああ……ごめんごめん」

相槌があつて、桜から聞かれたことに答えていたのだと思ひ出した。

「行く気満々だったから今ごろアインツベルンの森の中じゃないかしらねー。……案内、バーサーカーとやりあつていたりして」

気軽に言つたが反応は劇的だった。

「え、えええええっ!? そ、そんなの大丈夫なんで……あつ、いたたたたた」

「ば——ばか! 何いきなり無茶してんのよ全く……」

傷を抑えてベッドにうずくまる。

既に外見はくつついているはずだが、中身はそうそう都合よくいかないだろう。言峰の使う心霊医術というのは切られた細胞単位を魔力で繋ぎ合わせる神秘だが、縫合よりも早く正確に繋げるだけであつて、負ったダメージまで解消するわけではない。

派手に切られ、出血死すら危ぶまれた桜は、今も全身に重い鈍痛を抱えているはずだった。一度『切られた』ことを覚えた細胞は完全に治癒するまで、自然の摂理に乗っ取り痛みを訴えつつけるだろう。しかし、それでも一晩で意識を取り戻せるほど回復させるのだから、神秘の術はたいしたものだと感心する。

ゆっくりと寝かせて、断ってパジャマの前を開ける。自分よりもふくよかで形のいい胸元は痛々しい包帯に包まれ、その下には体内の血の流れを整えるための薬草と聖符が張られているはずだ。

この包帯にしても、抵抗力の弱った身体に雑霊が入らないようにと、聖水で清められた物を使用している。

だが、それらが生み出す清浄な気と清潔な白が際立つほど、ほぼ上半身をぐるぐる巻きにされた姿は痛々しい。

「……傷は開いていないようだけど……この辺りは流石は綺礼か。——まったく、瀕死の重体だったんだから無茶するんじゃないの」

手早くパジャマのボタンをしめて、毛布をかける。

桜はそれを口元まで引き上げるようにして目を覗かせる。

「あはは……ごめんなさい。ちょっと驚いちゃって……でも、衛宮先輩がバーサーカーと戦ってるって……」

「そんなのデタラメに決まってるじゃない。アイツだって何の策もなしに行くわけない。少しくらい勝算はあるんじゃないの？」

彼の無茶を思うと、そんなの欠片も無い可能性も否定できないが、もちろんそんなこと言える訳がない。

表情にはおくびにも出さず、凛は続けた。

「だから、桜も気にせずゆっくり休みなさい。……その、私がここに居てあげるから」

「……遠坂先輩は、行かないんですか？」

「え——？ ええ……私はこれがベストだと思ったの。動かざること山の如しってね」

動揺が出なかつたかと一瞬思ったが、そのまま続けた。

——もちろん、イリヤスフィールと手を組む、もしくは彼女に何らかのアプローチをすることは既に考えていた。

アーチャーから彼らがアインツベルンの森に行くつもりだと聞いてなければ、今ごろ桜を寝かせたままにして森の中を進んでいたはずである。

この家には大昔——遠坂家とアインツベルンが手を結んでいた頃の地図があり、そこに彼らの隠れ家が記載されている。

道程はここから大体半日くらいだろうか。その間は桜が無防備になるがそれをおしてでも行く価値はあると思っていたことは否定できない。

「……うそです。顔に書いてありますよ。行くかどうか迷ってるって」

「……え」

ほらと言って桜は笑った。

言葉に詰まったのが失敗だったと思わず額を抑える。その仕草こそが桜の言葉を肯定しているのだが……生真面目な姿に、桜は笑みをうかべる。

そうして目の前の彼女から勇気を貰う。意を決して言葉に乗せた。

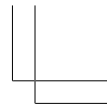
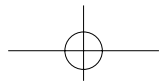
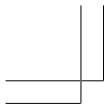
「遠坂先ば……ええと、その「なによ」

半分だけ毛布に隠れていた桜の顔が全部引籠もってしまう。そのまま顔を出さずに彼女は一気に言った。

「ね……姉さんは……自分で考えている以上にわかりやすいから。だから自分のやりたいようにやってください。……それがきっと一番正しいことなんだって、私思いますから……」

「桜……あなた……」

桜が潜り込んだままの自分のベッドをみて、溜息をつく。



——もう、姉とも妹とも呼び合わない間柄のはずなのに、不意に言われた言葉が暖かい。

「……馬鹿ね。可愛い妹ほっぼりだしていけるわけない……でも」

そのまま毛布の上から抱きしめた。

ハタから見ると布団に包まったミノムシを抱いてるようにしかみえない。それがはらりと解けて、真っ赤になった桜が現れる。

「きゃっ——わ、その——」

「これから暫く、あなた一人になるけど……それでもいい？」

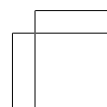
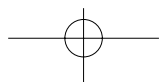
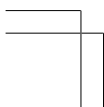
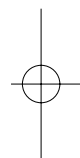
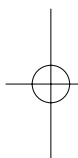
「はい。構いません。私も魔術師ですから最良と思った道を選ぶだけです」

返事は短く、それで決まった。

「行くわよアーチャー。準備して」

§

森の中での休憩を終え、移動を開始する。一人だと森は危険な場所だ。野犬やどんな



生き物がいるのか分からない——ただ動物は人間以上に遥かに敏感なのか、三人の道程だとあまり危険を感じることはなかった。
 彼らは知っているのだろう——俺が連れている二人こそ、自分たちなどより遥かに強い存在であることを。

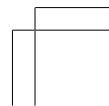
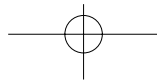
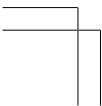
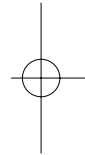
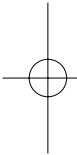
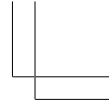
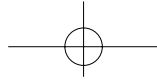
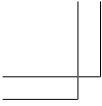
休憩を取った広間から歩くこと一時間。

唐突に森が終わりを告げる。建物を中心に円形にすっぱりと切り開かれ、空には満点の星が煌いていた。

城を中心とした円形の空間は、森を抜けた所からすり鉢状に傾斜し、中心に向かって下っている。

そのためか、今立っている位置と城の二階部分の高さはほとんど同じ。——なるほど。外部から城が見つかからないようにするための知恵だろう。

いかなる広大な森とはいえ、森から離れてしまえばそれより高い城の尖塔はどうしても目立つ。が、こうして地面より低い所に建てられた城は、森の木々を隠蔽にして外から姿を隠し尽くす。



「ここが……アインツベルンの城……」

城の尖塔は天に突き刺すほど高い。

四階……いや、五階建てだろうか。あまりにも荘厳な石造りの城は、闇夜の中でも圧力にも似た重厚な佇まいをしている。

ごくりと知らず溜まっていた唾を飲み下し、坂を降りる。

知らずに気が逸っている。足が速くなっているのは、なにも坂のせいではないはずだ。

見た目以上に広大な敷地を抜けると、城壁にたどり着く。

高さは城の四階相当にも辺り、よじ登ったの侵入は不可能に見える——けど、今はそんなことする必要ない。

巨大な城門は常に開け放たれ、来る者を拒まず開かれていた。

二人と視線を交わし、それをくぐる。

城壁の内側には左右に花壇が広がり石畳が城まで続いている。大して長い距離ではないが、外側の無機質さと裏腹に、中は意外に生活感があった。

「……誰が手入れしてるんだ。これ」

イリヤがやっているととは思えない——当然彼女の下僕も論外だ。
首を傾げつつ、先に進む。

「シロウ。あれを」

目の前——城の正門の前に白い影がある。

「イリヤ……？ いや——」

記憶の中の少女とシルエットが違う。

イリヤは白い髪に小柄な女の子だ。——目の前の彼女は、全身を白い服で包み、背もイリヤより遥かに高い。

髪の毛もすっぽりと昔の看護服を思わせるようなメイド服に押し込まれ、イリヤと姿が全然違う——なのに、何故一瞬でも間違えたのだろうか。

「……お嬢様の命によりお出迎えにあがりました——。エミヤシロウ様」

そういって彼女は深々と頭を下げた。

「シローウツッ！」

中に入ると元気な声と共に腹部に衝撃が走る。

「な——」

「あはっ。やっぱり会いに来てくれたんだ！ セラ出迎えおつかれさま。部屋の用意お願いね」

「……はい」

なんだか微妙に嫌そうな顔したメイドさんが、奥に消える。

それを呆然と見送った後、胸元に顔を押し付け、ぐりぐりとするイリヤを引き剥がした。

「久しぶり……といってもまだ数日か。元気だったか」

「うん！ シロウも会いに来てくれたしね。——本当によかった。来なかったら、こっちから行こうと思ってたくらいなもの」

——はは、笑えない。

そう思わせるほど、表情の落差が激しい。

うちに直接来ると言ったイリヤの表情は、それまでの無邪気で人懐っこい少女から一転

して、獲物を品定めする狩人の目をしていた。

でもそれも一瞬で消える。裏表がない少女は、その実、表情の変化もめまぐるしい。

「それでシロウどうしたの？」

「あ、ああ……実は……」

——と後ろのセイバー、キャスターと視線を交わす。

「そうだった、アナタ達もいたんだっけ。——へちよつと面白いね」

「違うんだイリヤ。俺たちは話し合いに……」

「なーんてねっ！ ね、ねっ！ シロウ、今日は泊まっていくんですよ？ 今部屋の用意

させてるから、もう少し待っててね。ダイナーもそのうち出来るから——」

表情がころころと変わる。

魔術師の顔と少女の顔——どちらがイリヤなのかさっぱり分からない。それくらい急に変化をみせ、幼い少女かと思うと一転して大人びた表情を浮かべる。——が、それもすぐさまなりを潜め最終的には少女の顔でとんでもないお願いをしてきた。

「し、しかし、泊まるって言っても、その——」

「あはは。照れちゃって可愛いんだ。でも、この時間じゃもう帰れないよ？ 森の中は夜

になるといろんなのが出てくるし……ま、そっちの二人が頑張るからシロウなら大丈夫か」
「そんな、帰るつもりなんてない。イリヤにどうしてもしたい話があるんだ」

——言った途端、また彼女は飛びついてきた。
今度はちゃんと反応して受け止めた。

「なにになに？　どんなお話？　楽しいこと？　面白いこと？」

「い——いや、それはどうだろう……？　面白くはないかもしれないけど、俺にとっては
すごく大事で真面目な話なんだ」

出来るだけ誠心誠意心を籠めて言った積もりなのだが……。

「……なあんだ。なら後回しね」

そうしてイリヤはあっさり離れる。

そのまま背を向け、すたすたとロビー中央の階段に向っていった。

「シロウもきて！　この前ゴチソウになったお礼をしてあげる。受けた恩はちゃんと返す
のがアインツベルンの習わしだもの、借りは作らないわ。……それに、シロウの方から自
分で来てくれたからね、今日は本当に特別なの——だから、こんな素晴らしい日なんだか
ら、そっちの二人も馬鹿みたいなカカシのように突っ立ってないでさっさときなさい」

「カ」

「かかし……っ!？」

ビシ——ツと空間にヒビの入る音がする。

背後からくるプレッシャーに思わず冷や汗が流れる。

「あ、の、イリヤ……さん？」

「さっ、お兄ちゃん行こう！ レッツゴーっ」

爆弾を投げ込んだ当の本人は、我関せずで俺の腕にしがみつくど、そのままずるずると引き摺っていく。

「さて、これは違うんだセイバー！」

「……ッ！」

めちやくちや殺気の籠った視線で睨まれた。

「キヤスターなら話通じるよな！ 理性派だよな？」

殺気よりも底冷えするくらい、薄っすらとした笑みを浮かべている。

「——シロウ、私は理性で動いていないとでも……？」

ついでに墓穴まで掘ったらしい。

「俺の味方は居ないのか……ッ！」

「あははっ。なーに言ってるのシロウ。おつかしいんだ。わたしがずーっと面倒みて可愛がってあげる」

その言葉に最後の氣力を奪われる。

長い時間歩きつづけ、緊張で張り詰めていた神経が最後の一押しを喰らう。

それから暫くしても、火に油を注ぐようなイリヤの楽しそうな声が広いホールに木霊していた。

そのままずるずると引き摺られて、階段を昇る。暫く突き進んだ辺りでさっきのメイドさんがやってきて、何ともイヤな目で見られた後に奥の部屋に連れて行かれた。

イリヤは『おめかししなくちゃ！』なんて叫んで、さらに上の階まで階段を昇っていた。

「……予想以上の歓迎っぷりなんだけど……」

まだぷりと怒っているセイバーに小声で話し掛ける。

「いきなり戦闘にならなかったのは、シロウの望み通りではないのですか？」

「この私が、案山子扱い……」

若干一名が今もショックを受けているようだ。

言動はタフっぽいんだけど、なんだかお姫様体質だからなあ……この人。

暗い顔で額を抑えている人はほつといて、セイバーと話を続ける。

「でも、この調子なら話も聞いてくれそうだし、いい方向に向いている……と思う」

正直あそこまで喜んでくれるなら、もっと早く顔を出せばよかった。

「でも意外です。あの時仕掛けてきたイリヤスフィールは好戦的な人物に思えました。

シロウには申し訳ないのですが、正直人割ほどバーサーカーを相手にする覚悟をしていました」

「この私が……あんな木偶と……」

まだ立ち直っていない人の意見も聞きたかったが……後回しだ。小声でセイバーに返す。

「俺が街中で出会ったイリヤは、終始今みたいな感じだったよ。……こっちが本当のイリヤなんじゃないかな」

「実際に交戦を果たして殺されかかっているのですから、我々としてはどちらが本物でも変わらないように思うのですが……」

——まあ、それを言われてしまうと確かにそうだけど。

「でも、こうなった以上なんとしてもイリヤに話をつけないと。今後の対策も検討しないといけない訳だし——」

——と、目の前のメイドさんの足が止まっている。

「エミヤシロウ……様。少々よろしいでしょうか」

「あ、ああ……構わないよ。ええと……」

「セラです。そのようにお呼びください」

「わかった」

そうしてぐるりと振り返る。その表情は厳しく、どこか怒りを湛えているようにも見える。

「……エミヤキリツグの息子など、どうしてお嬢様が歓迎なさるのか、私どもには分かりません。ですがこれだけは覚えておいて戴きたいのです。今ご案内している部屋は、普段使われることはありません」

「親父を知ってるのか……？」
「アインツベルンの者で知らぬ者などいないでしょう。——さてエミヤ様。先ほどのがどういう意味かおわかりになりますか？　そして、何故私が貴方様の名前をご存知なのかを——いや、それはアインツベルンは切嗣を知っていて——だからその息子の俺も——と当り前のように返そうとして、思い出した。」

『名前』

『は？』

『お兄ちゃんの名前教えて。わたし自己紹介したけど、そっちはまだ聞いてない』

——イリヤは俺の名を知らなかったのだ。
だって当然だ。切嗣は親父で、俺は衛宮の性を名乗っているが——血の繋がりなんてない。

彼が聖杯戦争で戦い巻き込んだ子供が俺なのだから、冬木市に来て直接調べる以外に俺と切嗣が直接繋がる線なんてない。

だから、イリヤは俺の存在は知っていても名前までは分からなかった。それをこのメイドさんが知っている理由は――。

「その顔はおわかりになりましたか？ 私どもはいつもお嬢様から貴方様のことを聞かされます。……それはもう楽しそうに。あんな幸せそうなお嬢様を見たのは初めてです」

——というセラは、それを喜びつつも憎むような曖昧な表情だ。

「先日城に戻られたお嬢様は、命令を私どもに下しました。――つまりは、お客様がいらっしやるかも知れないから、最上級の客間を用意しておくこと――ですから、突然のご訪問にも関わらず、こうしてご案内することができます」

『シロウはわたしの家に興味あるの？』

『え？ ああ……そりゃあるぞ。イリヤは神出鬼没だし、最近この辺りでよく会うから近くかなとは思っているけど、実際の場所は知らないから……居場所くらい知らない』

もしもの時困る』

もし怪我をして助けを呼ばれても、場所が分からないのでは駆けつけることもままならない。

『せめて住所を教えてもらえたら、いざという時に守ることもできるんだけど。』
『ん——いいわ、シロウは特別に教えてあげる』

そう言って彼女は幸せそうに笑った。

——それで教えてもらったから、今こうしてここにいる。

「そっか……じゃああれからイリヤは、ずっと……」

口約束だけの俺を待っていたのか。

「……あなた方とお嬢様は戦い、命を奪い合う間柄ではありません。……どうかお嬢様のお気持ちを知って、そしてそれを覚えておいていただけたらと……そう思います」

そして最後に街中で会ったイリヤは、もうこんなお遊びの関係はやめると——次出会ったら必ず殺すとそう宣言した。

だから、ここに来るまでバーサーカーとやりあう覚悟をしていたのは間違いない。でも、それが覆っているのは嬉しい。すごく嬉しいのだが……。

「明日にはこの城は戦いの場になるかもしれないかもしれません。——ですが、どうか今晚はお嬢様の歓待を受けていただけませんか。……正直、私はあなたのような人間に頭を下げるのは嫌ですが、そこをおして……こうしてお願い申し上げます」

「……わかった」

こちらも一つ、頭を下げる。

それで満足したのかセラは向き直ると通路の先へと先導していった。

「あのメイド……」

キャスターが彼女のうしろ姿を眺めている。

「……ん？」

「さて、どこもかしこも様々な事情があるようね」
どこか自嘲を籠めて呟いた。

「……うあ」

セラに案内された部屋は、俺のような庶民が一生かかってもお目にかかれないような、豪勢極まりない所だった。

天蓋付きで両手両足を伸ばし、さらに転がっても問題なさそうな広さのベッドに、質のいいアンティークのソファ。センスのいい絵画が飾られ、ベランダの照らすからは森を一望できる造りになっている。

貧困な俺の語彙じゃ、どんなにすごい部屋かを伝えることすら出来はしない。

思わず尻込みし、絨毯を踏むのすら躊躇う俺はじりじりと扉の方に後退してしまう。

後ろのセラに確認した時は、なんとも上ずった情けない声になっていた。

「い、いいのか……？ こんな部屋」

「どうぞお入りくださいませ。……そちらにお召し物が用意されております。ディナーまでにお着替えください」

「——は？」

「ですから、どうぞお着替えくださいと申しました」

「着替え……？ なんて……？」

俺の間拔けな返事に、メイドさんがびくりと青筋を立てた。
ちなみにキャスターはすぐさま馴染んでソファでくつろぎ、セイバーはなにやら溜息な
んてついている。

セラは俺の姿を上から下までじっと眺め、数度往復して溜息混じりに言い放った。
「……エミヤ様は、そのようなお姿でお嬢様のダイナーに参加なさるつもりですか？」
言われて自分の姿を見下ろす。

森を抜けるために動きやすさ最優先でそろえたトレーナーとジーンズ。——殆どスポー
ツウェアと変わらない。

食料と水が入ったザックにいざと言う時の武器になる木刀をいれた竹刀袋……。

「うあ……」

小市民すぎてお城のダイナーなんてとんでもない。

いや、そもそもこんな状況を想像すらしなかったし、仮に家に戻った所でただの学生の
俺にスーツやフォーマルなんて用意してあるワケがない。

「ですので、こちらで〇用意させていただきました。……どうか今晚だけはよろしくお願
いします」

そう頭を下げて、セラはこちらの返事も聞かずにドアを閉める。
ボタン——と重厚な扉が想像通りの音を立てて閉まった。それでも音は重く静かに響き渡り、全てが高級なのだと訴えている。

こうして立っている足元の絨毯の感触からして、柔らかすぎて申し訳ない気分になる。

——ここで転がったらきもちいいだろうな。

なんて考えてしまうあたりが救えない。

へタすると、普段使ってる布団よりもこの床の方が寝心地良さそうだ。

「……どうする？」

室内に向き直る。キャスターがクローゼットを開けて中の服を見ていた。

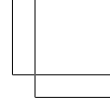
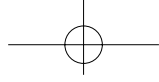
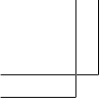
「そこそと何かを探しながら、返事が返って来た。」

「郷に入っては郷に従えというのが、この国のことわざではなくて？」

「よく知ってるな」

国籍どころか人種も不明なのに。

「私としては迷う理由がわからない。坊やは対話による交渉を臨んでいて、相手がそれに応じた——ならば、面倒な手段を新たに模索したり、状況に困惑するより相手に乗るのが



一番ではないのかしら」

人間が数人は入れそうなクローゼットに頭を突っ込んで、服を漁っている。

俺のジーパンに包まれた形のいいお尻が左右に揺れているのが目の毒だ。……育ち良さそうなのになあ。この人。

……もちろん、そんなこと考えて思考を誤魔化そうとしているのも、痛い所突かれたからに他ならないわけだが。

「セイバーはどう思う……？」

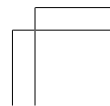
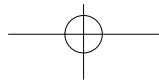
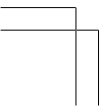
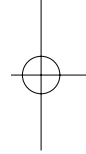
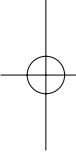
悠然とソファに座っているもう一人の同行人に話し掛けた。

こちらは慌てた様子もなければ、何かをする気配もなくじっと座っている。その慣れた様子は風格すら感じられる。

「私は別に。このような雰囲気は久方ぶりで困惑しているというのが正しいでしょうか。ただ——今の我が身を思うと、こんな場合ではないという思いも確かにあります」

「だよなあ」

でも、今からイリヤを襲撃してバーサーカーを倒す！なんてことはできないしやりたくもない。



来るまでにさんざん二人と議論し、もし仕掛けられた場合は戦うのもやむなしと気を張ってきた分、毒気を抜かれてしまっている。
「だから覚悟を決めなさいな。——戦闘の覚悟も今も、ことに望むのは同じなはず。尻込みしているのは単に慣れの問題にしかすぎません」
ばさつと目の前に何かが投げつけられた。

「キヤスター……これ」

「貴方はあちら。もし……覗いたらこれ以上ない程に残酷な方法でぶち殺しますわ」
心底楽しそうにやりと笑う。

何とも堂に入った姿で親指で示した所は、広い窓とそこから出るテラスだった。

「……まじか」

さあさあと背中を押される。

「ち、ちなみに残酷な方法って例えば……？」

「まず爪を剥いで、そこに肉を喰らうアリのような生物」

「やっぱり何でもない。いやいい、言わないでもいいから！ ……はあ。でも何で俺がこの寒いのにそんな所に。そんなに見られるの嫌ならキヤスターこそ、自分の部屋で着替えれ

ばいいじゃないか……俺は覗きなんて真似しない——つて——」
言って気がついた。

セラに部屋に案内された。けど、それはここだけで別室があるなんて話は聞いていない。そしてイリヤは泊まっていけと言っていた。

「最後に錆びてボロボロになった鉄串で」

「その話はどうも……っ！」

金輪際、キヤスターに好奇心から聞き返すのはやめようと誓った。

でも——しかしあの様子だとこの部屋を一つを使えつて意味なんだろうと思う。周囲を見渡すと確かにここは広い。ベッドも三人どころかもつと寝ても平気そうで、そんなのもう寝所なんて呼べるもんじゃない。

——もちろん、そんなことがしたい訳がなく、穏やかで平和な部屋が欲しいのだが……。

「——どうするんだよ……これから」

頭痛を感じて額を抑える。

「別に構わないのではないですか？ イリヤスフィールの歓待を受けたとはいえ、あくまでここは敵の城。戦力の分散をするのは得策ではありません」

「そうね……坊やに警戒されないために、あちらも最も広い部屋を用意したのでしようし。それだけ自信があるのか、はたまた本当に喜んでいただけなのか……あの様子を見る限り、両方という可能性が一番高いですけど」

二人して当然のように頷いている。

「く——なんだそれ」

がりがりと頭をかきむしる俺に、キャスターが言う。

「ですから、いい加減に決めなさい。——坊やは自分で言うほど、覚悟が決まっていないうように見えます」

「まったくです。シロウには常在戦場の心得がありません」

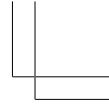
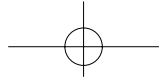
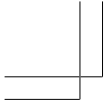
二人して当然のように言い切ってくる。

——ああもう、くそ。実際その通りなんだから、何を言っても今は言い訳にしかならず、悔しくて仕方がない。

「二人はそれでいいのか？」

結局のところ何も思いつかず、こんな無様な返事しかできなかった。

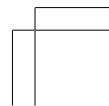
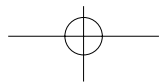
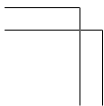
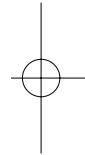
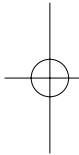
「問題ありません。近いほうが護衛はしやすいですから」



「坊やが変な気を起こしたら、さんざん蹴った後に豚に変えるわ」
——こうもきっぱり言われると、一人で気をもんでいるのが馬鹿みたいになってくる。
「……わかった着替えてくるから、そっちも終わったら呼んでくれよ」
「ええ。分かったわ」
キャスターが心底楽しそうな笑みを浮かべた。

§

「さ、寒い……」
ネクタイを締めるのに手間取ったが、男の着替えなんて正装であつてもあつさり終わる。
着慣れないタキシードに首元を締める立衿のシャツと蝶ネクタイが息ぐるしい。
しかし——これなら廊下に出た方がまだマシだった。
さっきのメイドさんに見つかったらこっぴどく怒られるだろうけど、それにしてもこん



な寒空の下で、肩を抱いて凍えているより遥かにいい。

「おーい。まだかー？」

コンコンコンとガラスをノックする。カーテンで仕切られた室内は見えない。

— 拍置いて返事がきた。

「今いい所なのでですから、もう少し待ってなさい。女の着替えを急かすようでは紳士にはなれませんよ」

そんなものにならないでいい。俺がなりたいのは魔術師だ。

「……キヤスター。その、いい加減にして欲しい。何度着替えれば気が済むのだ」

「貴女には似合っているからいいのです。あつ、次はこちらのドレスにしましょう」

「……そろそろ、シロウを中に入れてあげよう。着替えなど見られたところで私は気にしない。それより寒さで体調を崩したら大変だ」

— なんて事を言うんだセイバーは！

「い——いや、それは俺の方がダメだ……！俺は全然平気だから、気が済むまでやってもらって大丈夫……っ！」

せめて廊下側に通させてもらえばよかった。

ああ。俺って本当に馬鹿だ。馬鹿だ。馬鹿だ……。

「坊やもそう言ってることだし、お言葉に甘えて次はこちらを——」

「はあ……。本当にいい加減にして欲しい」

なんだか楽しそうなのはキャスターばかりだ。

俺だってセイバーが着飾ったら綺麗だと思っし、見てみたいのに……。

「いかんいかん」

中は気にするな。心頭滅却すれば寒さも大丈夫……！

それにしても、キャスターもすっかり馴染んでると実感する。出会った頃はとうだったか——なんて指折り数えて、まだ一週間くらいしか経っていない事実におどろかさされる。

アレは何時だっただろう？

今日が二月十日だ。学校に行かないとすぐ曜日を失念してしまうが、確か日曜日。柳洞寺の様子がおかしいと遠坂から聞いたのは……そう、聖杯戦争が始まってすぐの学校の屋上だ。

あの時は休み明けでどこか気だるいムードがあった。

「じゃあ月曜日か……本当にまだ少ししか経ってないんだな」

僅か六日。明日になればそれで一週間……。その言葉はどこか現実味が無い。もう一ヶ月以上もこうしているような気がする。

それだけ密度が濃い生活をしてることなんだろうけど……。

「はは」

最初にうちに来た頃はキャスターも怪我が酷く元気がなくて、なんだか儂い夢の中の人という雰囲気を感じさせた。それが少しずつ回復してきて、元気になってくれてよかった

——なんて無邪気に喜んでいたので、今じゃもう考えられない。

今では彼女が俺たちを振り回して、一番楽しんでいるような印象すらある。

それは構わないし——賑やかなのは喜ばしいことでもある。

——朝、キャスターが言った言葉を思い出す。

「……一つでも違っていたら築けなかった関係か」

ガラスにもたれて空を見上げる。

すっかり日が落ちて、空には星が瞬いている。ここは深い森の中——冬木市はけっして都会ではないが、それでも人口の明りが星の光を遮っていたのだと実感した。

「ここは、こんなにも空が綺麗だ——。」

「お迎えに上がりました。……エミヤ様はどちらに？」

「——と、中からメイドさんの声でした。」「ああ……時間切れね。ですが何で楽しい一時だったのでしょうか。大祖母様に感謝の祈りを」

「……私はもう……できれば遠慮したい」

カーテンで遮られた向こうからは、声に艶までのもつてるキャスターと心底疲れきったセイバーの様子が伝わってくる。

「……入るぞ？」

おそろおそろテラスから室内に戻った。

そこに——。

「——」

美しい華が咲いていた。

「……まったく。キャスターを何とかしてください。彼女にあのような嗜好があったとは驚かされました……シロウ？」

「あ、ああ……」

ぼかんとだらしなく口を開いたままセイバーに見惚れている——それが分かってても視線が外せない。

金糸のような彼女の髪は黒いリボンで整えられ、黒を基調としたドレスがゴシックな雰囲気を漂わせている。

「どうかしたのですかシロウ」

「い、いや。その……」

軽く空いた胸元から目を逸らし、ぶつぶつと誤魔化す。

先ほどまで見ていたときは何でもなかったのに、意識すると途端に恥かしさがこみ上げてくる。

「坊やがここまで見惚れるのなら、私の見立ても間違っていないということね」

「——あ、その」

反対側に視線をずらすと、そちらには裾の長いイブニングドレスを纏ったキャスターがいた。

紫色のドレスはどことなくいつものローブを彷彿とさせるが、流石に見た目の艶やかさ

は段違いだ。

髪型はそのままだが、白い髪飾りでアクセントをつけている。大きくスリットの入ったドレスが大胆で、ヒールを履いた白い素足が艶かしい。

しかも、

「どっどっどっど」

なんて言ってくるりと回るのだから目のやり場に困る。

大きく開いた背中がただひたすら心臓に悪い。

「あ、ああ、に、似合ってると思う……すごく」

もはやガクガクと頷くことしか出来ない。

「エミヤ様、どうぞ」

メイドさんの言葉に従い、なんとか廊下まで出る。

「——なんてことだ……まったく」

外にでて、今まで息をするのも忘れていたことによく気がついた。

「黄昏ている場合ではありませんよ。参りましょう」

——と後ろから腕を取られる。

「な、——なな」

「こういう場合、殿方がエスコートするのが紳士の嗜み。さあセイバーも」

「……はあ。このようなことをしている場合では……」

なんだかんだと両腕をとられる。

困ったような顔をしたセラの後に続いて、引き摺られるようにロビーへと降りていった。

§

「シロウ……ありがとう」

ディナーも終わり、イリヤはそういつて優雅に頭を下げた。

二人のメイドさんが給仕してくれた夕食はとても豪勢で、小市民の俺としてはなんだか申し訳ない気分になるほどだったが、全然物怖じしていないセイバーとキャスターに習って、なんとか口の中に押し込めた。

しかし味に舌鼓をうつよりも、どうすればこの味が出るのかと真っ先に考えてしまっているのだから救えない。

その後はキヤスターは自室に、セイバーは少し離れた所に立っている。

「どうしたんだ？ 改まって」

「わたしは本当にシロウが来てくれるとは思ってなかった。……だってわたしはシロウを殺さなくちゃいけないから。それがアインツベルンのマスターだから……」

視界の端でセイバーの空気が変わる。

「……俺は、出来ればそんなことになって欲しくないけどな」

「偽らざる本音だが、本気で聖杯戦争を戦おうとしているイリヤが受け入れがたい言葉なのも分かっている。」

「うん……」

力なく少女が項垂れる。

「——参った。こんな顔はして欲しくないのに……」

「言つたら？ イリヤに何かあつたら助けにくるって。だから……」
ええい、言いよどむな！

こういう場合の経験値が足りない自分を叱咤する。どういえばイリヤを元気付けられる？ ——くそ、考えるまでもないだろう。俺が思ったとおり正直に言う……まずはそれからのはずだ。

「だから、イリヤは気にしないでいいんだ。俺がやりたいようにやってるんだし……」

「でも、わたしそんな困ってない……それなのに来てもらう資格なんてない」

それ以上言わせたくなくて、ポンつと彼女の頭に手を載せた。

「どちらかというと、今困ってるのは俺の方なんだ。でも放っておいたら絶対にイリヤにまで手が伸びる……だから、イリヤも俺を助けて欲しい……って言いたいこと分かる？」

「う——うん。……でもそんなことでいいの？ わたし、いつかはシロウと——」

「イリヤ前に言つたら？ 気が向いたら最後まで戦わないでいてくれるって。あれどうかな」

確かそんなことを聞いた覚えがある。

あれは——そう、彼女と街中で初めて出会ったときのこと。切嗣を殺すためにやってき

たと言う彼女は確かにそう言っていた。

——その時のことをよく覚えている。

だって、ずっとそうならいいと心のどこかで思っていた。ただ先送りにするだけだとしても、彼女ともう戦いたくないって思っていたから……。

「うん——そう……そうだね。そうしよつか！」

みるみるうちにイリヤが明るくなる。

「やっぱりお兄ちゃん大好きっ！」

「……」

俺に抱きついて頬擦りしてくる。——こっちも嬉しくなって、そのままイリヤを抱き返した。

「……こんなことになっちゃったんだけど、いいか？」

後ろのセイバーに聞いてみる。

すると——。

「はい。もう何も言いません……それより、確かにバーサーカーよりあちらの方が今は問題だ」

なんて頷いてくれた。

——が、その空気を吹き飛ばすお子様の声が割り込んだ。

「ちよつと、なに言ってるの!? わたしのバーサーカーよりすごいなんていないもん！
セイバーだってやりあったらちよちよいのちよいだもん！ あつ！ そうだ。シロウも
わたしのサーヴァントにしてあげよつか？」

「——な、なな」

セイバーがぶるぶると震える。脳髓の辺りからヤバイシグナルが点滅する。

「ちよつとまでセイバー……!! 落ち着け、落ち着くんのだ！」

「シロウ……!! 止めないでください。こ、この私が……」

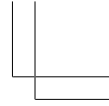
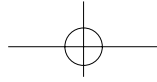
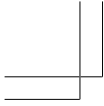
「ふーんだ。本当は自分でもわかってるくせに。バーサーカーに勝てるわけないもんねー」

「だからイリヤも火に油を注ぐんじゃない……っ！」

なまじ今の状態じゃその通りなだけに、反論のしようもない。それが一層セイバーを怒らせているらしい。

「あははっ。だからシロウはわたしがちゃんんと守ってあげる！ よかったねシロウ」

「嬉しいような……どうしたらいいような……」



「いいの。シロウはわたしが面倒みてあげるから。あーあ、手のかかる子ねー」
なんてびよんびよんと手を伸ばして俺の頭をぐりぐりと撫でる。

「はは……ま、いっか」

「いいとは何事ですか！ シロウ——！」

——こんな関係もいい。殺伐としたものを覚悟していただけに、本当にありがたい。

まだきやーきやーとやりあっている二人を見て、そんな感慨を抱いていた。

「……………あっ！」

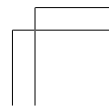
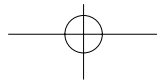
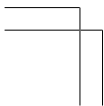
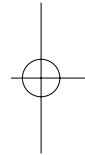
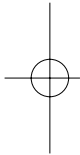
ふとイリヤが足を止める。何かに驚いたように声をあげた。

「どうしたんだ……？」

「ううん、なんでもない。……今日は千客万来ね。一体どうしたのかしら」

「……………」

何てことを楽しそうに言っていた。



中庭の様子を見下ろし、キャスターは溜息をついた。
「バーサーカー……ヘラクレス。」

彼女が魔女メディアであった頃の、旧知の間柄である。

今の彼はバーサーカーとして召喚されたため、理性をなくしているが……それでも生前の記憶は忘れがたく、複雑な感情が胸によぎる。

思えば、かの少年に深入りしすぎているのではないだろうか——？

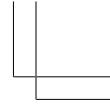
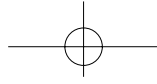
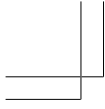
「まさか、そんな……」

言葉に力がない。自分が一番良く分かっている。

主を亡くし仮初の生にすら意味は失われたというのに……こうしていることを、よもや楽しいと思っているのではないだろうか？

「それは……あの坊やが、あの人の教え子だったから……」

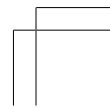
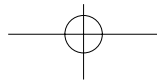
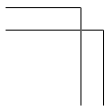
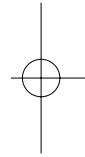
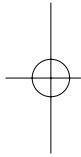
だが、それを額面通り自分が信じて行動しているわけではない。自らの気性など知り尽くしている。



だとしたら、なぜ――。

身を翻して室内に戻る。

既に英霊となった身はいつもと変わらない。肉体的な疲労や病とは無縁のはず――だけ
どこの時、身体を重く包む倦怠感が付きまどっていた。



Interlude / 13 森の中で

「あぎやぎやぎやぎやーっ!!」

ぶすぶすと煙を上げて、遠坂凜は崩れ落ちた。

「あー……その、大丈夫かね」

「あ、あ、あああ」

漆黒の闇の中——周囲に微妙に焦げた匂いが漂っている。今もびくびくと痙攣する主の様子を見て、アーチャーは額に手をあてた。

「その……やはり、なにもこんな時刻に来なくても良かったのではないかね？ 明け方まで待ったとしても、何も彼女も文句は言うまい」

「う、うううる……さい、わ、ね……」

満足に喋れないのかどこか呂律がおかしくなっている。

アインツベルンの結界には先ほどより気がついてきた。アーチャーを先行させても目立ったトラップの類はなかったので安心していただけだが……。

「ぶっ殺してやるわあのくそがきやあああ!!」

「……やれやれ。優雅さの欠片もないな」

そんな彼女達の様子に、少女がけらけらと笑う声が聞こえた。

「どーせ見てるんでしょ!? イリヤスフィール! お姉さんがきついお仕置きしてあげるわ……!!」

闇に向ってきーきーと怒鳴る背中、哀愁すら漂っている。

やれやれとアーチャーは半ば諦めた。

「それでどうするのだね、凜。今からなら出直すのも手だろう……正直なところ、夜間行軍は感心しない。あの様子ならば、アインツベルンのマスターも話くらいは聞いてくれそうだ。——ならば、時を見るのも手だと思うが」

「うるさいわね……今さら戻れるわけないじゃない。あんな大見得切って出てきたのに」「またそれか。彼女は今ごろ眠っているだろう。戻っても見咎められたりしないはずだが」

何故こんな時刻にいるのかというところ——間桐桜の前でいい所を見せようとした手前、引っ込みがつかなくなっただけなのであるが、遠坂凜はそれを認めようとしていない。

結果、アーチャーは引き摺られるようにしぶしぶといった様子でついてきていた。

「いいのよ。こういうのは早ければ早い方がいいでしょ？ 朝まで様子見なんかして、それで臓硯に先越されたら一体どうするつもりよ。万が一、バーサーカーがアサシンなんか倒されるとは思えないけど、アイツが真つ当な手段を使うはずもない。それにアサシンが正面切つてバーサーカーとやりあうなんてありえないから、狙うならマスターの方じゃない。……なら、今ここでイリヤスフィールの無事が確認できたんだから、さつさと用件を終わらせる方がいいわよ」

「それも一理あるが」

「一理じゃなくて、十全の理論でしょ？ 兵は神速を尊ぶ——戦争において迅速な行動こそが最も大事。今なら無茶できるけど、それすら出来なくなつてからじゃ後悔しても意味が無い。だからさつさと行くわよアーチャー！ あの小娘にきつついお仕置きをくれてやるためにも！」

「やれやれ」

こうなつた以上、主は戻ることなど考えまい。今までの付き合いで——それはもうこれ以上無いほどによく知っている。

「……わかつた。私が先行しよう」

「よろしくね。確かにアンタの言う通り何が潜んでるかわからないから、ちょっと表に出てもらうことになるけど」

「承知の上だ」

言って、歩き出す。

「——あ、ちよつと！ 道は知ってるの？」

「先ほど地図を見せたのは凜だろう。それで覚えた」

「ほんと？ あんな一度で？」

アーチャーは振り返って肩をすくめる。

「私を誰だと思っている。地図すら読みとれずして遊撃兵は勤まらない」

「ああ、そう……」

こつも自信満々に断言されては、後に続くしかない。

その言葉の通り、彼はまるで既に知った道であるかのように、闇の中を歩き出した。

森の動物はサーヴァントの気配を感じ近寄っては来ないだろうが、万が一の闇夜の暗殺者を警戒することだろう——その手には短剣が既に握られている。

「本当に、アンタの特技って——」

ワケわかないわねと呟いて、その背を追った。

星の光すら届かない森は漆黒に包まれ、足元すら定かではない。本来なら進むことはおろか、戻ることすら立ち行かなくなるはずなのに、進んでいく彼らによどみはなかった。「驚いた。あんた夜目まで利くんた」

魔術で視力を上げ、微かな光源を頼りにしている凛は、それでも僅かに足元を失う。だがアーチャーにそれは見られない。

「キミが持っている光源があるだ。私の目がいいのは知ってるはずだが」

「……こんなもので？」

手にもった小瓶を差し出す。中には草の葉が入っており、それに張り付いて夜光虫が光っていた。

「私が見通すには星明り程の光があれば問題ない。夜目が利かなくてはアーチャーとはとても呼ばれんからな」

「ふうん……なんだか鷹の目というより、梟の目ね」

それまで規則正しく動いていた足がびたりと止まる。
「……マスター。一度はつきりさせておきたいのだが、キミは私を何だと思っているのかね」

「なんで？ いいじゃないフクロウ。かつこいいわよ」

「そういう問題ではないし、そもそもあまり格好がいいとも思えんのだが」

「細かいこと気にするのねー。それでこのまま真っ直ぐであつてるの？」

もはや何を言っても無駄だろうとアーチャーは嘆息した。

「ああ。キミの足なら三時間という計算だろう。見通しの悪さを加えてさらにもう少しか。駆け抜ければもっと早いだろうが……」

「それは流石に却下ね。こんな夜の森で全力疾走なんて、雪で凍った道を走ると何も変わらないわ」

「同感だ。好んでやりたいことではない」

彼からすれば、このような闇夜に敵地に赴くのも変わらないのだが。

しばし森の中を進み足を止める。辿ってきた道行きは振り返っても目の前の漆黒と何も変わらない。——だがそれを見る者がいるならば、アーチャーが辿った道は昼間、衛宮士

郎が通った道を正確にトレースしていることに気がついただろう。

「——今後の方策を決めておこう。このまま深夜に城に押しかけるつもりかね」

「流石にそれは出来ないわね。体力も戻しておきたいし、安全が確認できた以上、必要以上で慌てることもない。——様子がわかる所で休息を行って、夜明けを待つて移動かしら」

「上等だ。なら丁度良さそうな場所がある」

「ホント？ そんなのいつみつけたのよ」

「今しがただ」

森の奥を指差す。

「何もないわよ」

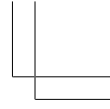
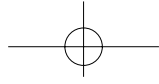
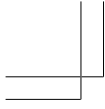
「キミの目ではまだ見えないか。少し開けた場所があるその先に、どうやら建物らしき影がみえるな」

「……とことん目がいいのね、あなた」

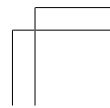
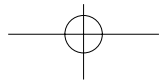
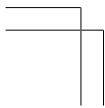
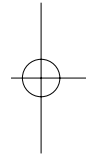
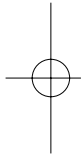
「だからそう言ってる……ほらいくぞ」

「わかったわ」

頷きを一つ、それで足を向ける。



たどり着いた先は石造りの廢屋だった。



／ 2

—— また、こうして夢を見ている。

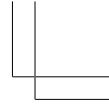
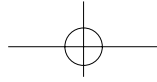
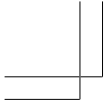
いつもみていた剣の夢に、いつか見た少女の夢が交じり合う。
本来異なる時、異なる場所の二人の道行きが交差することはなく、夢が織り成す荒唐無稽な世界に埋没している。

暗闇に剣のイメージがある。

柄は黄金。白刃が輝き魂の底に鮮烈なイメージが突き刺さる。

—— ああ、これは。

—— 半身なのだ ——

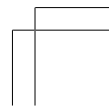
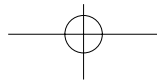
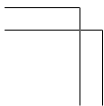
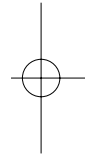
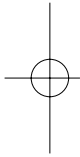


心の奥底——魂の深いところで理解している。
剣は常に少女と共にある。
幾たびの戦場を共に駆け、
如何なる時も共に戦い、
常に彼女の傍らに在る。

それが本来の理想形——。
だというのに、夢の中の少女にそれはない。変わりに握られた剣は金色。暁の輝きを放ち、見るものを圧倒する彼女の象徴。

それは——。
あの時みた、黄金の輝き。

中庭でアーチャーへ暴風を纏って解き放った。



刻み込まれた光景は、致死の風となって吹き荒ぶ剣風ではなく、彼女が握った光に目を奪われる。

その時に分かってしまった。

放たれた烈風こそが彼女の鞘で、黄金の輝きこそが真の剣なのだ——。

剣は昔から焦がれていた。

それはいつからだだろう——もう思い出せないほど遠い昔から焦がれている。

分かれた半身。全ては自分の深い所が知っているのだと。

彼女の歩んだ道。彼女の道行き。

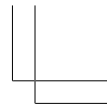
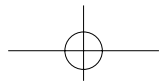
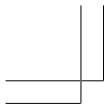
そう——。

彼女は……………。

アルトリア。

成人を終えた彼女は、その日からそう呼ばれることになった。

戦乱の時代——異教徒たちが国土を蹂躪し、民は嘆き、国は乱れ、乱れた人の心は内乱



の形であらわれた。

王の世継として生まれ、戦乱の時代に生きた少女の物語。

——戦うと誓った。

傍らに友の姿は無く、肩を並べる者もない。

——戦い抜くと、誓った。

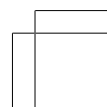
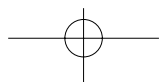
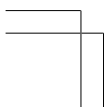
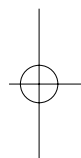
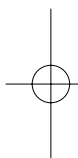
誰からも理解されず、誰から疎まれようとも、

剣を手に取り、少女は戦場を駆け抜ける。

それが彼女の孤独。

彼女が望んだ、手にした剣。

そして——。



——力なんかいらなかった。

そう泣いた少女がいた。

神話の時代。神と人が共に在った時代に彼女は生まれた。

国民の全てから愛され、未来を祝福された少女——。

世界の全てを愛し、全てから祝福を受けた魔法の弟子。

メディア。

穏やかに——平和に一生を終える彼女の運命は、ある日転機を迎える。

これは神話の時代。

神と人が寄り添い、英雄と怪物が争い、そうして人同士すら分かり合えない——そんな欺瞞に満ちた時代だった。

山と森と海に囲まれた国——コルキス。

そこには二人の子供が生まれた。

長子は男子ではないため国の後を継ぐことができない。そうして山間にある魔術の女神へと預けられた。

次子は男子。利発で温厚。家族と平和を最も愛する王子は国民からも、そして姉からも愛されていた。

王宮に生まれた少女には魔術の才があった。

誰から受け継いだものでもなく、彼女自身の才覚として発露されたそれに女神は喜ぶ。

——この娘ならば、あるいは。

全ての魔術の神と崇められる彼女には、一つだけ悩みがある。

神と人が最も近いこの時代、半神半人が多く生まれるこの時代にしてなお——彼女には後継者が居なかった。

「さて、あたしはアンタにおめでとうと言わなくてはならない」

——ある日、女神は少女にそう告げた。

「この国でもうアンタに並ぶ魔女はいない」
少女は微笑んで否定した。

自分などまだ未熟である。テイレニアの海には敬愛する大叔母が住んでいます——と。王女として生まれ、才覚にも恵まれてなおそこには片のかけりもない。真っ直ぐに見つめる眼差し。

——もしかしたら、
自分が本当に気に入ったのは、少女が持つ才能などではなく——。

少女は魔術に励んでいた。

女神が願うまでもなく、その姿は彼女の後継者たらんとしているかのよう。

——でも違った。

少女は一度として自らに地位など求めたことはない。

心優しい少女である。彼女はただ自らが愛する国を——この細い両の腕に抱きとめられる世界を守るために自らに厳しく鞭打っていた。

いつしか時は流れ——生まれ落ちて十と数年が経ったある日——少女は学び、育ち、国

を背負う魔術師として成長していた。

「さて、アンタに告げることがある」

少女を呼び出した女神はそう前置きをした。

「これからある術を授けようと思う」

首を傾げた。——だって、彼女は一度としてそんなこと言ったことがなかった。

女神は当然のように行い、教え、少女はそれを学び取った。

「だけど、アンタはこれを使ってはいけない。その身が朽ち、魂が薄れゆくまで秘匿し、神秘を守り通さなくてはならない——わかるかな」

いいえ分かりません——少女は首をふる。

魔術とは神秘のことだ。

自らの力を持つて世界に訴え、塗り替え、作り変えてしまう——力。

だから、自らが持つ本質的な術を他者に教える事はない。

それは師である女神のみならず、少女自身にもいえる魔術師としての大前提——。
女神は笑った。

「だからこそ、アンタに教える。——あたしの後継として、少しでも力になるよう」
首を振る。いやだ——と、生まれて初めて心の底から否定の言葉をぶつけていた。
だってそんなのあんまりだ。

これでは……。

これでは、まるで遺言のようではないか——。

「アンタがこれから行く道に、大いなる転機が訪れる。それがなんなのかあたしにはわからない」

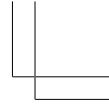
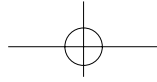
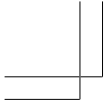
そんなのありえない。——だって彼女は女神だから。全ての知識と魔術を司る神なのに。
女神は笑って否定する——それでも、万能など無いのだと。

「この力が助けになるかもしれない——ならないかもしれない——だから選びなさい。自ら力が使う時を間違えぬよう。望むように使えるよう」

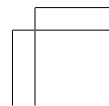
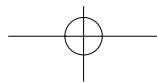
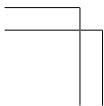
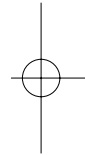
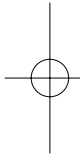
その言葉

親より深い女神の言葉を

少女は真っ直ぐ受け止めた。



その日から、彼女は魔女と呼ばれるようになった。
魔術の女神より全てを受け継いだ——生粋の魔女。
姿を一目見ようと、
術を一度利用しようと、
この日より、コルキスに大勢の人間が訪れる。
しかし力を揮う事なく優しく微笑む少女は、全てを穏やかに受け止めた。
人々は口々に噂する。
——黒海を海路を用いて東の岸。
——世界の果てにコルキスあり。
——ヘカテの住まう魔女の国。
そこには善き、東の魔女在り——。



多くの英雄がコルキスを目指して旅立った。
英雄船アルゴーが訪れたのは、それから暫くのことである――。

見えるのは少女が迎える破滅の光景。

遙か遠く雨に映る蜃気楼のような、その光景を幻視した。

夢の中で微笑んでいた少女が泣いている。

表情は虚ろのまま、ただ空を見上げていた。

彼女の衣は血に染まり、人々の怨嗟が渦巻いている。

――どうして、このようなことになったのか。

その魂は今はどこにあるのか。

彼女の進む空は曇天。道行く人々からは怨嗟の念と飛礫が舞う。

その姿に、魂を鷲掴みにされる。

だって彼女は悪くない。

彼女が何かをしたことなんてしなかのに。

少女に一言の慰めもなく、

彼女に一片の感謝もない。

——だというのに怨念は膨れ上がり、一身に抱えた女は遠く離れた大陸を一人彷徨う。

花よ蝶よと愛されていた王女は、既に無垢な少女ではなくなっていた。

胸の奥が痛い。

——だってこんな許せない。

彼女の行いは間違っていたのかもしれないが、一つとして自分の為になんてやらなかった。彼女を汚し、彼女に罪を被せ幾たびも破滅の音を繰り返す。

……それなのに、そこまでして、ただの一度として報われたことがないなんていうのは

救われない。

虚ろな顔は泣き方すら忘れたかのよう――。

見ているだけで頭にくる。

夢の中、手足が無いのがもどかしい。

何もないんじゃない、石を払ってやることすらできはしない。肩を抱いて励ましてやることも不可能だ。

そして願わくばもう一度だけでも―― なんとか笑わせてやろうと思うのに……。

§

記憶に無い―― 誰とも知らない遠い夢を垣間見た。

彼女のことは何一つ分からない……だというのに、鮮明に見た少女の姿が忘れられない。穏やかな少女だった頃と、血に染まった魔女の光景――。

心の底でずきりと一つ、胸が痛んだ。

夢から覚めると、自分がどこにいるのか分からなかった。

不自然な大勢で寝ていたためか、体のあちこちがギシギシと痛む。

窓から差し込む光は暗かったが、空が薄っすらと白みはじめているのが分かった。薄ぼんやりとした頭ではよく覚えていないが、今日は確かゆつくり寝ていても大丈夫だったはず……それなのに生活習慣のたまもので、いつもと同じ時刻に目が覚めたのだろうかとう理解した。

「あ——れ——」

なれた布団の感触ではない。——しかし、どこかのベッドというには堅すぎる。

現実感がつかめず呆然と室内を見渡す——豪華な部屋。洋風のそれは馴染みが薄い。壁に掛かった絵画は素人目にも値打ち物だ。花瓶には花が活けられている——うちだとそんな洒落たものは居間に桜が活けてくれるくらい。

——ああ、そうだ。ここはアインツベルンの城。

「イリヤに会いにきたんだっけ」

そうして昨夜のことを思い出す。僅かながら話しましたが……あの豪華なディナーの雰囲気におされ、結局肝心なことは何一つ話せなかった。

聖杯戦争を一時忘れ、喜んでる少女に冷や水を浴びせるような行為ができなかったというのがあるが……。

「……本当はそんなこと言ってる場合じゃないっていうのに」
溜息をつく。

喜んでるイリヤの顔があまりにも幸せそうだったから、俺は目先のそつちを優先させてしまった。——一度彼女に殺されかかったにも関わらず、なんて甘い——。

内心で毒づきながら、顔に違和感を覚えて手を当てた。

既に寝る前に元の服装に戻っている——高価そうなタキシードのまま眠ってしまう愚を犯さなかっただけよしとしよう。

顔の違和感はまだかこつこつとした感覚を与えてきていた。

「……あれ、俺どこで寝てたっけ」

改めて体を起こす——絨毯の上に座り、寝ていたはずのソファにもたれ、改めて室内を見渡した。

ベッドの上には金髪がみえる——そっか。セイバー達に譲って俺はソファに寝ていたんだった。

「俺って案外寝相悪かったんだな」

ソファといっても、うちのような庶民が見るようなものではない。殆ど座りごこちといい、沈み具合といい殆どソファベッドと変わらない——それも一級品クラスだ。そんな所から寝ぼけて落ちるなんて、一体どんな動きをしたのだろうか？

それは絨毯も同じだったが、いくらふかふかだからって、何時までも床の上にいるのはまずい——。毛布をソファの上に残したまま落っこちるなんて寝相が悪いにも程がある。普段はそんなことないはずなんだが、やはり慣れない所で寝苦しかったんだろうか……？ 立ち上がりつつ、ソファの毛布に手をかける。

むにゅ。

「……は？」

慌てて剥ぎ取る。

至近距離でソレが飛び込んできた。

オーケー。

今見ているこれ自体に異変はない。

ならば問題は一つ。何故彼女がこんな所にいるのか。

紫色のローブはいつもの姿。俺の服では寝苦しいと判断したのか、サーヴァントの姿になってるのはまだ分かる。

重苦しいフードもなく、どこか幸せな顔で寝こけている。

——それはまだいい。

「……あ……う」

彼女の口から漏れる何とも艶かしい吐息。ごろんと寝返りをうつと、大きくまくれ上がった裾から白い足が――。

「うあ……っ」

悲鳴にまでは至っていないはず——それを慌てて噛み殺したがギリギリ遅い。

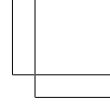
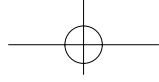
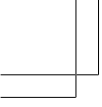
手を離して慌てて飛びすさろうとするが――。

「あ——ら——」

薄っすらと目を開ける。

切れ長の綺麗な目。形のいい眉がびくびくと動いている。長い睫毛が気たるげに動き、周囲を見渡し——俺と視線があった。

朝が弱いのか、眉を寄せてジ―つと見ている。せつかくの美人顔が台無しになるくらい



凶悪な眼つきで、皺の寄った額をつつきたい衝動にかられる。
——でもやらない。そんなことしたら行き着く未来は一つしかない。

「お……おはよう」

「……つつつつ!」

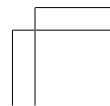
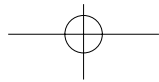
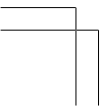
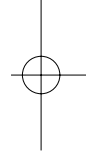
声にならない悲鳴と、城中に響き渡るほど盛大な音が炸裂した。

§

「理不尽だ」

「現実はいつも辛く、厳しい物ね。翻弄され流されるだけなら誰にもできるわ——だから、逃げずに立ち向かいなさい。あなたを取り巻く状況は何もせず好転してくれるほど優しくはないはずよ」

そんな物語に出てきそうなカッコイイ台詞を、さも優雅に言われても困る。



ひっぱたかれた痛みは、例の治癒能力で治まってくれたけど……今も頬には派手なモミジがくっついてるはずだった。

無然としたままキャスターを睨むが、当然彼女はどこ吹く風だ。

夜中にセイバーを抱き枕にしようとして蹴り落とされたなんて、気持ちはわからないでもないけど止めて欲しい。普段の行動から考えられないくらいお茶目すぎるが、それを俺を巻き込むのは勘弁だ。

「それでシロウ。これからどうするのですか？」

「ああ、そうだな……」

昨日は結局、聖杯戦争の話をする雰囲気じゃなかった。

それでああいう結末になって、仮にとはいえイリヤと休戦協定を結んだってコトなら、大きな前進だ。だから一日潰した価値があったといえるし、その効果は極めて高いと思う。となると、今、気がかりなことは……。

「イリヤが知ってる聖杯戦争のことを教えてもらおうと思う。彼女は聖杯を作り出したアインツベルンの魔術師だ。きっと俺たちが知らないことを知ってるんじゃないかな」
「昨日と変わらずですか」

そういうセイバーはどこか不満そうだ。

「何か気がかりでもあるのか？」

水を向けてみると、態度に出ていることに気がついたのだろうか。少し気まずそうに視線を逸らした。

「いえ——そういう訳ではないのですが……私は騎士ですから、剣を握って相手を倒す方が向いています。このような立ち回りは——」

——と、ソファに座って腕組みをしているキャスターに視線を向けた。

「むしろ彼女の本分ではないでしょうか。——もちろん私にも、今の聖杯戦争がどこかおかしいのはわかっています。間桐臓硯にしてもそうですし、あの黒い影……前回のアーチャーらしきサーヴァントなど、異常や不安要素を上げればキリがない。誰かしら、手をまわして都合よく事態を動かそうとしている意志を感じます」

「そっか……」

セイバーが言っているのはあくまで懸念要素だ。これを無視して聖杯戦争を続行するという考えも確かにある。けど、俺の勘と言っているのかどうか、魔術師としての直感らしきものが、アレは無視してはいけないと訴えている。

——思えば、同様の忠告を今まで幾度もされている。

『アレが出てきた以上、聖杯戦争など続けている場合ではない』
『だから直感に従え——』

アーチャーはセイバーにそう警告を残した。
そして……

『仮説ならあるが、それはお前にもあるはずだ。見覚えと言った方が正しいか？』
『もう十年前では忘れてしまったか……』

言峰綺礼の言葉が甦る。

十年前の記憶……最も印象が強いのは炎の中だ。あの中で俺がみたもの……？
「……断片ばかり出てきていて、肝心の部分が揃ってない。なんだか中途半端なパズルをやってる気分になる」

「ですね……」

微妙に組み合わさらないパズルはもどかしい。それを繋ぐ欠片をイリヤが持っているといいのだが……そうでないなら、あの夜——慎二がライダーで人を襲わせていて、初めてマスターとして戦った夜——以来姿を見ていない、間桐臓硯をなんとしても締め上げなくつちやならなくなる。

……アイツが黒幕なら、目の前にいたのにみすみす逃がしたことになる。

そしてその後の慎二の暴走で、学校で多くの人が傷ついた。でも——あの時、臓硯や慎二に追撃をかけていたら、あの慎二の犠牲になった見知らぬ人は死んでいたという。

その後の結果も加味してしまうと、正しい選択肢なんて存在しないのはわかっている。

——でも、もっと上手いやり方があったんじゃないかという思いは止められない。

「……本当にそうかしら？」

「……え？」

思考に割り込まれたようなキャスターの言葉に、瞬間止まる。

考えを読まれた？　なんてことを思ってしまうくらい、その言葉はぐるぐると回りつづける俺に割り込み、びたりと止めていた。

「本当に、あなた達が言うように断片しかないのかしらね。案外、見方を変えるところ以上なくらい簡単な話かも知れませんよ」

セイバーがキャスターを見据えた。

ともすれば殺気交じりになりそうなほど、その視線は鋭い。

「……キャスター、何を知っている？」

「特に何も」

「いい加減傍観者を気取るのはやめろ！ サーフアントとして召喚された以上、貴様も当事者だろう……！」

セイバーが激昂する。剣を抜いてもおかしくないほど緊張が張り詰める。

「やめろって」

「いいえ、シロウこそ今は黙っていてください。戯言を弄して我々を誑かす、キャスターの態度は気に入りません。一度きつちり話をつけなくてはならないと思っていました」

「……まったく、騎士様というのは本当に頭が固いのね」

「貴様が言えた義理か……！」

セイバーを前に、キャスターはやれやれと頭を振って溜息をついた。

「では一つだけ。セイバー、本当に聖杯で願いが叶うと思っているの？」
「——何がしたい。願いが叶える程の力を持つからこそ、我らはこの地に召喚されたのだろう」

確か遠坂や言峰も言っていた。過去の英雄をこの地に召喚し、サーヴァントという枠組みの中だけだとしても、肉体を与えて魂を甦らせる程の力は人間には不可能だと。

その世界の理さえ塗り替えられる強大な力こそ、聖杯が本物の力ある器とされている理由であり、ゆるぎない真実だと。

だから、サーヴァントは報酬として与えられる聖杯の存在を疑うことはない。聖杯が偽者なら、そもそも召喚自体されないからだ。

「その通り。力があるから、英霊に受肉させるなんて真似が出来ている。そして、それほどの力があるなら個人が望む願いなど——それが例え世界を作り変える物だとしても——叶えるには容易いこと」

しかし、キャスターの口調はそれを全然信じていないようにすら取れる。
「……それが偽りだともっ？」

「偽りではないでしょう。事実、私たちはここにいます。——世界の狭間でみる胡蝶の夢に

しては、現実感が勝りすぎているわね。……だからこう考えなさい。召喚という過程が正しくても、結果に何らかの意志が入り込まないコトなどありえない」

意志……誰の？

「何かが聖杯に介入してると言いたいのか……？」

「さて——詳しいことは私にも分からないわ。知ろうともしていないもの。……ただ、私はもはや聖杯を必要としていない——それは嘘偽りのない真実よ」

「願いがあるから、貴様も召喚に応じたのではないのか……？」

そうね……と彼女はしばし、沈黙する。

「私にだって生前果たせない願いがあり、叶えたい想いがあった……けど、それを叶えることが出来ない物に召喚されたら知ってしまったら、貴女ならどうするかしらね」

つまり、それは……。

「聖杯は願いをかなえる物ではない……？」

セイバーが自失する。

それは俺も同じだ。ならこの聖杯の意味は一体……。

「——いいえ、願いはかなえられる……はず。ただ、私はそれを知る前にやめてしまった。

それまでの私は天を掴み、地を統べるために全力を傾けていたから、空がどのように雲を運ぶのか知らうとしなかった。……それでも、もしあの日のことが起こらず聖杯戦争を続けていたのなら、きつと今ごろは知りえていたのよね。天を掴むとはそういうことなのだから」

キャスターの言い回しはどこか抽象的だ。

「だから、あなた達も考えなさい。断片を組み合わせる鍵はきつと見えているはず。私は魔術師だから答えを持って他者を導く者ではないわ。何かを行うのは全て自らのため」

……だから、真実など、聖杯戦争などどうでもいいと言っていたのか。

「そのためにも、イリヤに知っててることを教えてもらわないとならないな……」

どうしても情報が足りていないのだ。結局はそこに戻るしかない。

セイバーも殺気立った気配を鎮め、何かを考えている。

「……あの時、切嗣が聖杯を破壊したことを、私は裏切りと思っていました」

「親父が……？」

「はい。私の宝具で聖杯を壊すようにと、令呪を使い命じました。だけど……そこに破壊をするための理由があると考えたことはありませんでした……」

確かにそれでは聖杯まで後一步の所で邪魔をされた……とセイバーは思うだろう。ただ、俺の知る切嗣は意味もなく誰かの妨害をすることを楽しむ人間ではなかった。何かの理由があるのだと思うし、それはきつと俺たちが求める情報の一つのはずだ。「……それも含めてイリヤに聞いてみないと。……そろそろ行こうか。朝食の支度するつて昨夜言ってた——?!」

ドーンツッ! と、遠くから震動が響いてきた。

「なんだ……っ?!」

窓から外を見る。

ビリビリとガラスが揺れ異常を伝えてきた。すぐさまテラスに出て、確認する。

握りしめた手すりからも震えが伝わってきた。

「地震……? こんな時に?」

「——! 違います、アレを——」

セイバーが指し示す先——四階のここは城壁より僅かに高い。そこから見える先にちらりと何かが映った。

そして一拍遅れて響き渡る震動——違う。壁をぶつ壊そうとしている衝撃が伝わってきた。

てるのか……!!

「誰かが城の結界ごと、城壁を壊そうとしているようね」

「そんな——」

「これだけの高さの壁を破壊するなんて、どれだけの攻城兵器を持ち出さないといけないのか。」

「シロウ、外に！」

指差す先——中庭に白い少女が立っていた。

「イリヤ——くそ、ここからじゃ間に合わない」

今は四階だ。全力で走っても若干のロスは免れない。

「先行します。シロウを頼む」

「……やれやれ。頼まりました」

——と、セイバーが手すりを乗り越えた。

「まで——」

と止めるヒマもなく、空中で武装するとそのまま二十メートル近い距離を落下して降り立つ。

さすがはサーヴァントだと胸を撫で下ろした。何らダメージを負った様子もなくこちらを見上げていく。

「私たちも降りますよ」

——と、キャスターに腕を掴まれた。

「どうやって……？」と問い返す間もなく、

「う、うわああああああああああああ」

そのまま地面目掛けて放り出された。

浮遊感は一瞬。内臓が持ち上がるような気味の悪さと、ともすれば快感に変わりそうな風に乗る感覚と——後はめまぐるしく落ちる急降下だけが残っていた。

「、、」

風の音が強すぎて、隣を落下するキャスターの声も聞こえない。

ぶつかる——と覚悟した瞬間、ふわっと何かに支えられるように浮き上がった。

着地は静かで、音も無かった。

「……し、死ぬかと思った」

「治療能力だけはいしたものですから、それでも良かったかも知れませんね」

「冗談でもやめてくれ……全然笑えない
それより——。」

「イリヤ！」

走り出した背中を呼び止める。

「……敵がくる」

「敵——？ 間桐臓硯か……？」

「違う……あんなの全然問題にならない——」

イリヤには不安が張り付いて離れない。

「この城の中にいれば安全なのに、それなのに」

キツ——と目の前の城壁を睨みつける。

今もコレを破壊する音は響いている。ここまで一方的に攻められて今もお守りを維持

しているのは、さすがアインツベルンの城か——。

「イリヤ、それって黒い影か……？」

「わからない……でも、バーサーカーがここから逃げろって——」

——どくん、と悪夢を一つ思い出す。

屋上に現れた影。その後に見た悪夢。——アレは、サーヴァントで勝てる相手ではない。ならばバーサーカーがそう判断してもおかしくない。

あの狂戦士は理性を消されてなお、少女に忠実だ。

「シロウ……私たちも」

「……そうね。この気配は……」

結界と城壁がいつまで持つのか分からない。乗り込んできた相手にはそれしか手段がないのか、あくまで物理的に破ろうとしている。

決断するなら今のうちだろう。

このまま樹海に籠っていたらダメだ。ここまで攻め込める敵を相手にして、守りに徹するのはまずい。

「イリヤ、森の中に少し開けたところあるの分かるか？ この城から出口方向に歩いて一時間ほどの場所なんだけど」

「う——うん。この森でわたしに分からないことなんてない」

「じゃあそこで合流だ。バーサーカーに先に連れてってもらえ」

こちらは人数が多い。そうするのがベストだと判断する。

「ダメ——ダメ、シロウを置いてなんていけない——」

「けど彼は、それが正しいと判断したのだろう。」

「イリヤの側に実体化すると、彼女をその腕に抱え上げた。」

「ダメだよバーサーカー！ まって——」

「いいから行け！ 大丈夫。俺たちもすぐ行くから——！」

「返事なんか期待していなかったが——それでも褐色の巨人は地を駆けた。」

「それが返事なのだと理解して走り出す。セイバーとキャスターも着いてくるが、流石に身軽なバーサーカーの方が遥かに早い。見る間に背中が遠くなる。」

「シロウ、これは」

「最悪の予感の中だな……だけど——」

「イリヤを敵が狙ってくるなんて、昨日のうちから考えていた。だから急いでここに来た。」

「——その判断が正解だったことを今は喜ばないと……！」

「二気に出ると気付かれる。こっちは反対側から出て少し森を迂回して合流しよう。アレ以外の敵が出てもバーサーカーなら大丈夫だろうし」

「中庭から城を回り込むようにして反対側に周り、そちら側の城門を抜ける。こっちには」

敵の手が回っていないらしい。今も震動は響いてきているが、急がなくてはいずれ城がもぬけの殻になったのを悟られてしまうはずだ。

「……あのメイドさん、大丈夫かな」

きつい表情の——でもイリヤのことを本気で心配していた彼女を思い出す。アインツベルンの人だから大丈夫だろうとは思うが……。

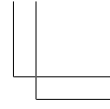
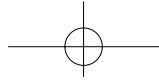
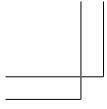
「——！」
セイバーが息を呑む。

冷静な彼女が驚いている。それはセイバーだけではなくキャスターも同様だった。目の前のものが信じられないとばかりに、目を見開いている。

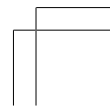
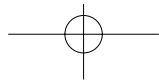
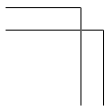
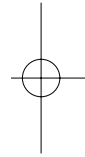
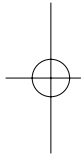
思わず振り返った俺が見たもの——それは、はりぶすまのようにして切り刻まれ、崩れ去る城壁と——それと、

「冗談……だろ……」

それにも匹敵するほど超巨大なハンマーが、城に横殴りに叩きつけられた光景だった。



193



Interlude / 14 魔術師

森の中を巨人が駆ける。
アインツベルンの深い森は木々が立ち並び、背の高い草が生え足取りが悪いはずなのに、その速度は何らよどみがない。
それどころか、僅かでも通行を妨げるモノは手にした斧剣で薙ぎ払い、さらに速度を増していく。

「……シロウ」

巨人に抱えられた少女が振り向く。

少しも足を緩めないバーサーカーの速度は早い。時速数十キロにも達する勢いで城から離れた今、振り返っても衛宮士郎を確認する術はない。

——何故バーサーカーが逃げると言ったのか理由は分からない。

ただ、彼女は自分のサーヴァントが正しいのだと、魔術師の勘で理解していた。

「いこう。バーサーカー」

唇をかんで下僕に命じる。

大丈夫——と言った彼を信じなければ。

まだ空は薄暗く、僅かに見える木々の隙間から月が見える。

遠くに上り始めた太陽が薄っすらと空を照らしていくが、朝というには程遠い——朝靄で霞む森を巨人は疾走る。

本来守りにおいて堅牢強固な城を捨てるなど、愚の骨頂である。

特にアインツベルンの城は聖杯戦争が開始してより二百年にわたり、他のマスターを退けた場所だ。

その力は場内に置いては神殿にすら等しいだろう。

けどアレは違う。

城に攻め込んできた何者かは論外だ。

アレに勝てるサーヴァントはおらず、純粋な力関係によって自らのバーサーカーは敗れ

去ることをイリヤスフィール・フォン・アインツベルンは理解した。

だから、己の巨人が伝えなくても少女にはそれしか手段がないと知っていた。

——だが、

「お兄ちゃん……」

些細な約束を守って自分を守りにきた少年がいた。

敵同士であり、自らが殺しに行くと言言しているにも関わらず、彼は自分の意志でやってきた。

——それは現実を知らず楽観視されたものではない。

勝てないと知りつつ少女の巨人と戦う覚悟でもって、彼女を守りに来たのだと知っている。

衛宮士郎にはセイバーとキャスターという二体のサーヴァントがいる。本来、それはたった七騎しか居ない聖杯戦争において極めて有利であるはずだが、少年の未熟さゆえにその利を生かせない。

だから、彼の持つ戦力は自分のバーサーカー以下であると、冷静に分析している。それでも彼は少女を守ろうとしていた。

二騎のサーヴァントの力があるからではない。
少年がそうしたいと思う、自発ゆえに――。

「大丈夫だよね……」

己を抱えて走る巨人に問い掛ける。

理性を剥奪された存在であるバーサーカーは、それに答える術を持たない。

ただ、彼は己の主ほどセイバーの戦闘力を過小評価していなかった。

――しかし、それでも城を襲った何者かには勝てないだろうと判断を下す。それだけは主と変わらぬ共通見解だった。

城を出て数分――徒歩では一時間の距離にあっても、バーサーカーの速度の前にはそう遠い距離ではない。

そこに人影を見つけて、瞬間少女の顔が綻んだ。

「ほうほう。感心よな。敵わぬと知って自ら出てきおったわ」

目の前には枯木のような老魔術師。

その傍らに白い髑髏をつけた暗殺者のサーヴァント。

間桐臓硯——故郷を出る時に聞かされた魔術師の名前の一人。

アインツベルンの盟友である、マキリの始祖であることはひと目で分かった。

「マトウジウケン……聖杯にも選ばれていない者がマスターの真似事をしているのね」

黒い巨人が足を止める。暗殺者の前にも関わらず、少女は悠然と降り立った。

老人を見据える目に恐怖は無い——城を襲った謎の存在に比べれば、目の前の暗殺者は

老人ともども脅威になりえない。

「ほ、ほ。聖杯に選ばれるとはこれまた異なことを言う。聖杯はマスターなど選ばぬ。

意志をもたぬ受け皿にしか過ぎぬものが、どうしてマスターなど選べようぞ。——アイン

ツベルンまで教会の戯言を信じ込むようになったか」

「……………」

愉快げに嗤う老人を冷めた目で睨みつける。

彼の言う通り、聖杯は選ぶものではない。聖杯に選ばれマスターがサーヴァントを召喚

する——これが偽りのルールであることを少女は知っている。
聖杯とはただ力を注ぎ込むだけのものであり、そしてサーヴァントとはそれに注ぎ込まれる——。

「……貴方こそ、脳が腐ったんじゃないかしら。ゾウケン。聖杯は意志をもたなくても、その大元の大聖杯には意志がある——ここに原型があったからこそ、貴方たちは聖杯戦争を作り上げた……当事者の貴方がそれを忘れてるくらいだから、マキリの衰退もしかたないわね」

「いやいや、マキリの衰退もここまでよ。今回はどうやらワシの勝ちのようじゃ。ならば大聖杯も手にいれようぞ」

「なら勝手にすれはいい。わたしは貴方なんて興味がない。いろいろと小細工をして回っていたようにけれど、結局、異なる器を作ることでもできなかったじゃない。——なら今さら貴方に出来ることなんて何も無い。さっさと地の底に戻りなさい」

その明確な嘲りを正面から受け止める。
かくしゃくとして笑う姿からは腐臭が漂う。

「これは手厳しいのう——まったく孝行の出来ぬ不詳の孫よな。いやいやお恥ずかしい。

この老いさらばえた身に日光は厳しいのでな、ワシも早く古巣に戻りたい所よ。——さて、ならばこそおぬしの協力が必要じゃ。我が悲願のために聖杯を抑えておきたいと思うての」
老人の目に鬼火のような灯火が宿る。
立ち上る鬼気に、白い髑髏が立ち上がった。

バーサーカーが一步前に出た。

——見ればわかる。あの髑髏はバーサーカーに圧されている。どうあっても自分では勝てないことを理解し、攻め込めば一太刀で切り殺されると理解している。

そう確信しているがために、動けない。

——当然だ。アサシンの最大の利点はその隠密性にある。

ならば、老人が少女に勝つには、まだ存在を気取られる前に遠距離から一撃で暗殺するより他に手がなかった。

それを捨て、正面より立ち向かうなど愚劣極まりない思考。

老人は正気を失っているようにしか見ない。大言を吐いたクセに戦力の分析が少しも出
来ない。

——そうと知りつつけし掛けるのが老人なら、

——切り殺されると知って動けぬ暗殺者もまた同じ。

「主に似てずいぶん臆病なサーヴアントね。貴方たちがバーサーカーに勝てる理由なんて
万に一つも存在しない。——それを知って尻込みするなら最初から戦わなければいい。自
分の命がそんなに大事なら聖杯戦争に首なんて突っ込むものじゃないわ」

「罫より返事は返ってこない。」

——代わりに、老人の方が哄笑を上げた。

「カ、カカカカカ……！ ああ、大事だとも。お主らのような人形には分からぬだろう。こ
の身が腐り、腐臭を放つ忌まわしさを！ ワシの蓄えた知識が脳髄と共に腐り失う悲し
みを！ ならばこそ、ワシは不老不死を手に入れる。そしてコヤツも永劫に刻まれる自らの
名を持つのが悲願でな。我らは共通の目的のためにこうして邁進しておる次第よ」

「……虫として過(す)うちに、ヒトの正気を失ったようね。マトウゾウケン」
少女の目が嫌悪に細まる。

今まであつた無関心が急速になりを潜めていく。目の前の虫を、叩き潰すべき障害と認識していた。

——それは老人に歓喜を呼び起こす。

その罵倒、嘲り、視線こそが待ち望んでいたというように、咽が割れんばかりに森に響く。

「当然じゃ。人形には分からぬこの痛み！ 苦しみ！ それこそが我が悲願を後押しする。腐りゆく肉体。腐汁は骨をも溶かし、時間共に肉体の劣化も早まるばかりよ。数年に一度交換していた肉体も、今では半年と持たぬわ」

「そんな人間なんだから当然よ。痛くて苦しいなら死ねばいい。人は数百年の時を重ねるようには出来ていない。貴方の肉体が腐り落ちる？ ——いいえ違うわ。腐っているのは魂の方よ。肉体の定義は魂に拠る物——不老不死を望んだ所で、腐った貴方に与えられるのは永遠の苦痛。——馬鹿な話ね。夢ばかりみて現実がまったく見えていない。人形とわたしを罵る貴方こそが、既に夢に囚われた人形にしか過ぎないのに」

「カカカカカ……！ 言うべきことはそれだけか？ アインツベルンの娘よ。おぬしらはやはり人形よ。語る中身が千年経っても何も変わらん。人に似せて作られた自動人形——やはり、外見を似せた所でヒトには成れなんだ！」

そう痛烈な嘲りをもともせず、心底おかしそうに笑った。

「……なんですって」

「このたわけめが。おぬしは何も知らぬから、奇麗事を吐けるのだ。肉を苗床にして蛆が育つ苦痛を知るまい。滴り落ちる腐汁を舐め取る辛酸を知るまい。人間は生きてこそ為せる事があるのだ。——しかしそれも全ては生き長らえてこそ話よ。脳漿が腐り落ち、それを喰らい膿を啜ろうとも死という無と比べること等出来はしない。苦しいから死ねなどというお主こそ人形の証よ。そのような児童にも似た逃避を語る短命の生き物——僅か数年しか稼働できぬ急造な人形に、人の何がわかるのか。人間の煩惱を知らぬ下等な玩具が、偉ぶった口をきくでない……！」

少女にぶつけられる老人の妄執。

距離を空いているはずなのに、ここまで濃密に腐った臭いが漂ってくる。

彼女が顔をしかめたのは言葉の中身を受け止め、我が身を省みたからでは決してない。

——ただ単に、臭かったのだ。

「全然理解できないし、したくもないわ。——そんな腐った身体を抱えて人間を語るのは止めなさい。人の煩惱を語り、わたしを人形と貶める貴方は自らをヒトという高みに置くけど……」

少女はそこで言葉を止める。

次に浮かべた笑みは酷薄なものだった。

「いい事を教えてあげる。——人はね、腐ったまま何百年も生きたりしないのよ。そういう生物をね、人間はこう呼ぶのよ……この化け物ってね」

「……小娘が」

老人の目に殺気が宿る。

「ねえ貴方、そんなに死にたくないの？ そうまでしてしがみついた生に意味はあるの？ 化け物になってまで死にたくないなんて、理解できない」

「死にたくないかだと？ ああ、無論よ。ワシは死ぬわけにはゆかぬ。永劫不滅の器、決して腐り落ちぬ肉体を手にいれなければならぬ——そのために」

「そのために、聖杯が必要だっていうの？ 死ぬのが怖いから聖杯を使うの？」

「カカカ、カ——。死を恐れぬ人間などおるものか。いかな真理を究め、いかな聖人であろうとも自らの終焉を超える人間などおりはしない。人形よ、最期に知っておくがいい。——目の前の死から逃れるためには、他者を踏みにじり平気で世界を犠牲に出来るのが人間よ……！」

馬鹿馬鹿しい。

そしてその言葉は少女に一人の少年を思い出させた。……彼は違った。人の身、人の存在でありながら、ただ己の命を差し出して仮初にしか過ぎない一人の少女を救っていた。「じゃあ、貴方は自分が生きるために他人を犠牲にするっていうのね」

「当然よ。それで我が望みが叶うなら、今も人を殺して回っておるわ。もし一人殺せば一年寿命が延びると知るなら、その日より殺して殺して殺し尽くすわ。」

——それが人間の持つ強欲よ。人間の持つ性よ。おぬしだっただらどうするよ？ 人を一人殺し、木々の一本を払い、鳥一羽の命で延命できると知れば、お主とて瞬く間に喰らい尽くし殺し尽くすわ。その行為によって世界が減じようとも知ったことではなかつた。

それが人の営みよ。そのように奪い、殺し、人より優れ、人より永らえることこそが生きる義務。ならばワシがそれを為したところで、誰にも異論を唱えさせる物ではないわ

……！」

老人は嬉々として語る。

少女はそれを魂のそこから呆れた後――。

「本当に呆れたわ。ねえマキリ。貴方はそこまで見失ってしまったの……？」

と、少女とは違う声で言った。

「……ぬ」

「それはわたしたちが思い描いた悲願ではない。わたしたちが作り上げた奇跡に至る悲願がどこからきたのか。あの時の願いを思い出しなさい。――なぜ、わたしたちが人の身で、人にあらざる地点を目指したのか思い出しなさい」

老人はどこか遠くを見つめる。
しかし、

「……ふん。ワシは何も変わっておらぬ。流石は人形よな。先祖の真似事も出来るように

仕込まれたか」

そう皺の寄った顔を歪めて嘲った。

「もうよい。我らの間にもとより通じることなど何もない。——アインツベルンの娘よ。おぬしの心臓、ワシが貰い受ける」

老人の影より湧き出した虫が瞬く間に広がっていく。

黒衣の暗殺者が地を滑る。

咆哮——。

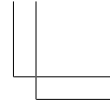
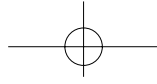
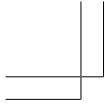
少女の命令をまたずして、彼女の下僕が飛び出した。

「——！」

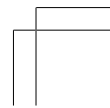
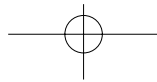
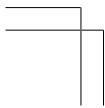
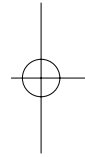
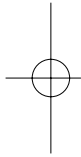
バーサーカーはアサシンを前に正面から対峙する。

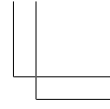
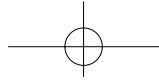
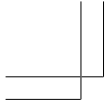
——彼は闇夜に住まう暗殺者。バーサーカーに勝てる道理は決していない。だというのに、

正面から絶対的な自信で仕掛ける老人が不気味だ。

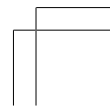
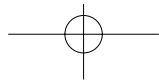
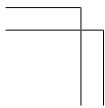
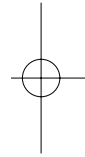
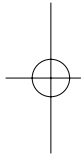


暗殺者より走った銀光をバーサーカーが払い落とす。
それが戦闘開始の合図だった――。





209



11 / Deep Forest Roller coaster
1

強化の魔術を叩き込んだ足で、地をかける。目の前には迫り来る樹木。それをてのひらで叩いてパスして後ろに流し一直線に前をめざす。

セイバーも既に武装しサーヴァントの姿になっている。

地を駆けるセイバーと、中空を飛ぶキャスターの速度は早い。

木々の間を走り抜けるのは危険極まりなく、振り返って走ろうものなら正面からぶつかってしまうだろう。

——しかし、後ろを振り返りたいという衝動は強く俺を誘惑する。

「この先を百メートル進んで左。後は北に向かって真っ直ぐ進みなさい」
キャスターの指示する通りに進んでいく。

背後から圧力を伴った何かを追いかけてくるのが分かる。それは城を襲撃していた

何者かだが、未だ正体がつかめない。

「攻撃されてないのは助かるけど……」

人間の出せる限界以上の速さで駆けているはずなのに、一向に引き剥がせた様子がない。——ともあれ、あのようなことが出来るのは人間のはずがない。相手もサーヴァントとみて間違いない。

となると、この沈黙が不気味だった。

「……………」

普段なら逃げることをよしとしないセイバーですら、一心不乱に駆けていく。

彼女ももう気付いているはずだ。背後から迫り来るそれには敵わないと。

それだけの力、存在感を伴わない迫るそれは、もはや質量に近い。

——ならばこれは映画でよく見るような光景と変わらない。

背後からは巨大な鉄球で、押しつぶされないために一目散に走っている——！

「そこ。曲がりなさい」

キャスターの指示に獣道に飛び込む。

大型の動物が使っているのか、道無き道を進むより段違いに早い。

「……さすが」

稀代の策略家。魔術師のサーヴァントだと感心する。
これで少し速度が稼げる。

「は、っ、……あ」

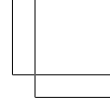
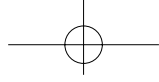
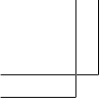
どれほどの速度で駆けているのか——強化を叩き込んだ両足が焼け付きそうだ。
肺は酸素を求めてふいごのように暴れまわり、心臓は血液を流すために暴れまわる。倒れこみたいほどの疲労を支えているのは、追いつかれたら死ぬという絶対的な予感だけだった。

「見えた」

城を出てから十数分。歩きで一時間も掛かった道は遠回りをしてなおこんなに近い。
イリヤと合流し、彼女等の力も借りられれば逃走なり反撃の糸口も見つかるだろう——。
そう信じて最期の道を駆け抜ける。

「!!」

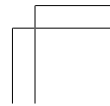
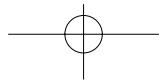
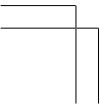
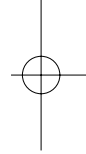
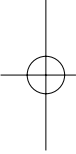
爆音がひしめく。それは前方に開けた空間からだ。



「……交戦してる……ッ!?」
後ろから迫り来るのは一体のはず。なのに前方に敵がいる矛盾――。
「間桐臓硯か……!」
その空間に飛び込んだ。

§

バーサーカーが斧剣を薙ぎ払う。
力任せの一撃に、地面にびっしりと張り付いた虫どもが纏めて塵となって吹き荒ぶ。
離れた所にはアサシンがおり、右肩を抑え血の流れを止めている。
「あなたのアサシンではわたしのバーサーカーに敵わない。それははじめる前から分かっ
ていたはずよ」
「……………」
臓硯は動かない。ただついと動かした指に従い、地より湧き出た虫どもが一斉にバー
サーカーに襲い掛かる。



それを――

かの巨人は一撃の元に薙ぎ払った。

「イリヤ……!!」

広場に入る。暴れまわるバーサーカーはさながら暴風だ。決して狭くはなかった空間が周囲の木々をなぎ倒されて広場になっている。

「シロウー！」

巨人に抱きかかえられた少女が明るくなる。

こちらの無事を安堵するかのように、それまでの表情から一転、華が咲いたように笑った。

「セイバー頼む」

「承知」

剣を構えて老人に向き合った。

「あの時は見逃したが、今度は逃げ場はなく、逃がすつもりもない……観念しろ魔術師」
「ほ、ほ。切り伏せればいいだけの老人を前にわざわざ口上を述べるとは、流石は騎士の

サーヴァント。礼儀正しいことじゃ」

「……」

セイバーは無言で剣を一閃し、足元に這い拠った虫どもを薙ぎ払う。それは俺たちにまで押し寄せ、強化した木刀で払うが切りがない。

しかし——こんなの何匹払った所で終わらない。地面を覆い尽くすほどの虫は俺の足に喰らい着こうと飛びついてくる。

いい加減キリがなくなってきたキヤスターに問うた。

「……これ何とかならないか……？」

「少しお待ちなさいな」

そう言って彼女は杖を振り上げて空間に魔方陣を描き出す。

「――」

そして神言を一つ唱え、地面に叩きつけるように杖を振り下ろした。

バン——と大地が爆ぜる。強力な電流を流したように、地面に生えた背の低い草一瞬波打ち、続いて内側の圧力に負けて爆ぜた。

消耗戦はそれで終わった。

後にはぶすぶすと焦げる音と匂い。そして地を埋め尽くすほどに焼けこげた、幾千の虫どもの死骸が残される。

「……の、れ……」

これだけの威力、これだけの範囲を誇っているのに、俺たちには何の効果もない。攻撃しつつ器用に避けている辺り実力の程が良く分かる。

——が、無事ですまなかったのが臓硯とアサシンだ。

とっさに臓硯を抱えて跳び退っていたが、僅かな距離では地を這う電流を避けきれなかったらしく、アサシンは膝をつき、臓硯は額を抑え手の間からどす黒い液体が滴り落ちている。

「……すげいな」

相性の問題からセイバーを相手にして完全に無効化されたキャスターの魔術だが、今さらながら彼女の実力が良く分かった。

本当に、敵に回さないでよかったと実感する。

もし——彼女の策でセイバーと分断されて戦うなんてことになったら、俺など一撃で骨すら残るまい。

しかも発動が早い。

一言しか使わない魔術——俺の未熟な強化や投影と同じシングルアクションの動作しかしていないのに、いつか見た遠坂の大魔術にすら匹敵している。

魔術師は自己から魔術を引き出すために、内面に訴えかける呪文を使う。その詠唱に使う文言が多ければ多いほど発動した時の力は強く、正確になる。

それをたった一言で済ませてしまう魔術なんてきいたこともない——。

「なんですか、その目は」

「いや、アンタ本当にすごいんだな。……感心した」

「そ、そう……？」

照れたようにそっぽを向く姿に苦笑する。——前から思っていたが、この人はどうも褒められるのに慣れてないらしい。

「き、さま……小僧……」

ただの一撃とはいえ、サーヴァントの魔術は人間には強烈すぎる。

身動きできなくなつた臓硯にセイバーが向う。——俺はそれを止めようとは思わない。桜に虫を放ち、聖杯戦争の裏で暗躍を続けた魔術師——今ここで倒さなければならぬ。

そして、他にも急ぐ理由がある。

——俺たちがここで合流したのは、ここを戦場に選んだからじゃない。

思い出した途端嫌な予感がぶり返す。

——振り返る。走ってきた獣道——その薄暗い道の奥に、とてつもなく嫌な気配が漂っている。

「セイバー……ッ！」

「っ！」

俺の声にセイバーが剣を振り下ろす。

今すぐ臓硯を倒さなければ——という一撃は、ガギンという金属音に弾かれる。

「……魔術師殿、今は撤退を」

アサシンが左手で放った短剣を弾く。返す刃でセイバーが切り込むが、それは肌を薄く裂くに留まった。——その動きは負傷してなお以前とは比べ物にならないほど速い。

以前に見たときは奇様な擦り合わせるような声を出していた黒衣のサーヴァントからは、どこか落ち着いた深みのある声が出ていた。

しかし地を滑る蜘蛛のような歩法は健在で、短剣を弾いたセイバーの隙をついて臍硯を
浚う。

「バーサーカー!!」

「!!」

イリヤの指示に巨体が跳ねる。大上段から振り下ろされる斧剣をアサシンは必死でかわ
す——が、当然のように避けきれない。

もとより掠めただけで、俺の身体をほぼ真つ二つに切り裂いた斬撃だ。人ひとり抱えた
まま避けられるはずがない。

事実、吹っ飛んでかわしながらもアサシンからは片足が失われていた。

「まずい……」

嫌な予感はこちらにきてピークに達した。

「!!」

そして逃がさぬと振りかぶったバーサーカーの腕に、ぞぶりと一本の槍が突き刺さって
いた。

「な」

セイバーが振り返る。

その赤い槍に見覚えがある。

「ランサーの……ゲイボルグ……？」

でも——言峰と契約していたかの騎士は死んだはず。事実、彼に突き立った槍は非常に良く似たまったく別の物だ。

飛んできた方向である小道の奥は今も薄暗い闇に包まれている。——奥でちらりと一瞬光った。

「シロウ……！！」

セイバーが俺の前に出て盾になる。素早い動きは霞むよう——事実、俺は反応しきることができなかった。

ドンツッ！ ドンツッ！ ドンツッ！——と砲弾を並べたような音が響き渡る。そして飛来する金属の雨を纏めて薙ぎ払うセイバーと——。

「……、あつ！」

彼女が捌ききれなかったうちの何本かが俺に突き刺さった。

「シロウ……！！」

肩と太ももに剣が突き刺さった。

「坊やは私が。セイバーは正面を」

彼女は剣を構えて前にでる。離れた所にイリヤを下ろしたバーサーカーが立っている。

——既に腕を貫いた槍は抜けている。

そういう能力なのかイリヤが治したのか、巨人の傷はあっさり塞がっていた。

「シロウ……」

イリヤが駆け寄ってくる。その前になんとか突き刺さった剣を引き抜いた。

傷が開いたことで血の流れが増す。

急速に出血が増え目の前が一瞬暗くなるが、俺の例の治癒能力ならすぐ治ってくれるはず……。二人に肩を借りて、なんとか身体を起こした。

——少し離れた先、剣を構えたセイバーの前に黄金色の輝きがある。

「久しいな、セイバー」

「……アーチャー……！」

そこに、金色のサーヴァントが立っていた。

「知らない……わたしの知らないサーヴァント……？」
俺の手を握ったまま、イリヤが目を見開いている。

「アー……チャァ……？ アイツが……十年前の……？」

「シロウ……それどういうこと……？」

俺を覗き込むイリヤに、セイバーから聞いたことを伝える。十年前に対峙した正体不明のサーヴァント。それが現代に生き残っていること。ライダーを消滅させたいこと。

「……あれが……」

黒いジャケツトに金髪を風に流し、朝霧の中を悠然と立っている。

ここにはセイバーを初め、キャスター、バーサーカーという三人ものサーヴァントがいるというのに、彼は余裕の表情を崩さない。
だけど――。

「死んだんじゃ……ないのか……？」

「そうだ教会でした話を思い出す。」

「彼がライダーに、そして桜に止めを刺さなかった理由。単に見逃したただけなのか、それとも彼自身に何かがあったのか——という仮説。」

「そこまでの戦力を持つライダーを追い詰められる存在が、危機に陥るなんて一つしかない。」

「しかし——彼はここにいます。じゃあ答えは……。」

「……わざと見逃したってのか……？ 桜も、ライダーも……？」

「金髪の彼の目が細まる。」

「俺を見据え。」

「——目障りだ。消えろ」

「そうしてあげた左手を振り下ろした。」

「！！」

「背後の空間に何かみえる。柄を向けた数々の刀身——。」

悲鳴を出すヒマもない。それらは一斉に俺へと叩きつけられる。

「シロウ……！」

セイバーが割ってはいる——が数が多すぎる。

十や二十じゃ効かない。如何なる宝具を所持しているのか、雨のように降りかかる。

「バ……バーサーカー……ッ！」

イリヤの悲鳴に巨人が飛び込む。揮う斧剣の威力は健在。掠めただけの巨木が一撃で倒され、碎け散り、形を失い粉塵に変わる。

薙ぎ払われた宝具も碎け、ただの金属片と化して消えていく。

しかし、それでも追いつかない。

セイバーとバーサーカー。二人の強大な英雄をして攻撃の第一陣を薙ぎ払うのがせいぜいだ。

「なんて——馬鹿げた——」

一度でもサーヴァントの武器を投影したからわかる。

彼が放ったものは模造品ではなく——全てが本物。二つとして同じ物はなく、数々の派生した神話の英雄が持つ一を有している。

傷を抑えて立ち上がった。こいつの前で隙を見せることは出来ない——イリヤを背後に庇う。

「みるとキャスターの顔が蒼白になっていた。」

「ずいぶん手ひどくやられたな。老人」

「……ぬう」

間桐臓硯を見るその目は侮蔑の色を宿している。——コイツら協力してるんじゃないのか……？」

「こやつらは我がなんとかしよう。貴様はさっさとその人形を連れてゆけ」

俺の後ろでイリヤが身を竦ませる。

それを感じ取ったのか——。

巨人が吼える。

大地を揺らし、大気を奮わせる彼は轟音一閃で剣を振るう。圧倒的な威力を誇る斬撃は

健在。巨体に似つかわしくないスピードで青年に迫ると、粉塵を巻き上げて剣を振るう。

「ダメ！ バーサーカー——！」

そこに、数十の刃が振り下ろされた。

理性を失った彼をして、身を守るために剣を振るう。

一撃ごとに剣の軌跡ごと刃が碎けて消えていく。——しかし、それを上回るほどの宝具が全身に降り注ぐ——！

そこに——。

背後の空間から倍化した宝具が降り注いだ。

返す刃で斧剣を振るう技量と速度は健在——しかし、十の剣を弾いてなお、残った二十の種別問わず様々な武器が彼を抉った。

肉を絶ち、骨を穿ち、心臓を貫き、頭部を粉碎し、腕をもぎ取り、足を叩き潰し、——あの夜にセイバーを翻弄し完全に叩き伏せていた無敵の巨人が瞬時に死に体となる。

恐ろしいまでの切れ味——あの宝具はどれもこれも一流のものだ。いかな堅牢を誇るバーサーカーの肉体であっても容易く貫く。

「あ、ああ……」

イリヤが震える。

無敵を誇った巨人が崩れ落ちる様を蒼白になって見つめていた。

「そんな……」

そして、それは俺たちも同じだ。バーサーカーは絶対的な暴力の象徴だった。理性を失ってなお奮う剣技は健在。威力は計り知れず掠めただけで死に至る。

それほどまでに圧倒的な——戦闘力。規格外といってもいい。

——それを蹂躪した青年こそ不気味。十年前のアーチャーを正体不明だとセイバーが言い切るのも良く分かる。

「おまえ、は……」

キャスターが血の気を失い、紫の唇で言う。

「お前は……あつ!!」

杖を構える。彼女の前方に大小あわせて三つ。それから彼女の後方——真っ直ぐ伸ばした杖の直線状に、加速器のように十の小型魔方陣が現れる。

「キャスター……!」?

光が収束する。解き放たれた光は瞬時にして森を染め上げ、朝靄を消し飛ばし、進路上の木々を蒸発させる。

光に飲まれる直前にセイバーが飛び退る。バーサーカーだった肉塊は元より離れている。そして——青年は動かない。直撃を食らうことを何ら恐れることなく、正面から膨大な熱量に飲まれた。

「——うっ！」

とつさにイリヤを抱きかかえて地面に伏せる。

地を焼き尽くすかのような光と熱——あまりの眩しさに目の奥が痛い。

目を閉じてなお目蓋を突き刺す光が徐々に収まる——。そして、目に飛び込んできたのは、反撃として放たれた宝具の煌き——約二十の、投射された宝具の数々——！

「う、うああああああああ……ッ」

イリヤを背後に庇い、跳ね起きる。

ただ死にたくないという一心で頭の中の撃鉄を降ろした。両手に投影した千将莫耶の短剣なんかじゃまだ足りない、目の前に迫りくる剣と槍と払ったそれだけで碎けている。

こんなの全然足りはしない——間に合わない——目の前の剣刃を何とかしないと——

という一心で、同じモノを作り出してぶつけ合う。

フル回転する魔術回路が、ギチギチと体内から締め上げる。

——でも、それでも、

俺が壊れる前に一本でも叩き落さないと——。

それが最後の思考。

気がつけば、幾つモノ刃が身体を突き抜け、勢いのままふっとばされていた。

「シロウ……」

肉を突き刺す音から一拍置いて、倒れ伏す音がした。

「……ぐ、は」

全身から激痛が走っている。血が抜けてふらふらとする頭を振って、起き上がろうとして失敗した。

何とか歯を食いしばって立ち上がると周囲の光景は一変していた。

キヤスターが光を放った先——見える範囲は木々がなぎ倒され、光の直線にあったものは一切が消滅している。

立ち込める霧と木々だったモノが粉煙となって辺りを覆っている。

「……っ！ キャスター……?!」

彼女は杖を構えた先から遙か後方に倒れていた。

その肩には一本の剣が突き刺さっていた。

思わず駆け寄ろうとして無様によるけ、距離を詰めていたアサシンに殴り飛ばされた。

「シロウ——!」

「カ、カカカ……流石よなギルガメッシュ。古代メソポタミアの英雄王よ」

「しまっ——」

がごんつと視界を揺らす一撃——殴られたと理解するより先に倒れこむ。

アゴの骨が砕けた感触がある。アサシンは強引に俺をイリヤから引き剥がした。

臓腑の声に振り向くと、そこには身体を抱きかかえられたイリヤの姿があった。

「ギルガメッシュ……?」

この世全ての財を集めたという、半神半人の王——ならば彼の宝具の異常性も分かる。

——アレは武器なんかじゃない。蔵……それも、神話の通りこの世界全てのオリジナルとなった武器を集めた貯蔵庫こそが彼の宝具……!!

ならばバーサーカーが倒され、セイバーが勝てなかったのも無理はない。英雄には力を

持つが故に弱点が存在している。それを突ける全ての宝具を使いこなす彼ならば、どの英雄であっても勝てる理由は存在しない。

「なんで……そんな奴が臓硯と……」

呆然と呟く。それほどの力を持つなら、間桐臓硯に下る理由が存在しない。

「——く」

キャスターが身体を起こした。忌々しげに剣を抜くと、自らが大魔術を撃ちこんだ先を見据えた。

「……外見の名などに用はありません。その者に果食うお前……お前は……!!」

「——なっ」

思考はここにきて停止する。

彼は——そうだ。

いかな古代の英雄王であっても、結局は一人のサーヴァントに過ぎない。それをそのままで——あの屋上に現れた黒い影と同一の空気を纏うなどありえない。

例え古代の英雄王ギルガメッシュであってもアレと同格にはなりはしない。だが——。目の前で銀を重ねたような巨大な円盤がある。

鱗状に並んだそれは、空間から突き出た宝具の刃だ。そのうち一箇所が欠けているのは、キヤスターに投げつけたからだろう。

幾十、幾百もの宝具を組み合わせ、展開して盾にする——使い方まで無茶苦茶だ。それが空間に引き込んでいく。その先に立った青年は当然のように無傷だった。だが——。

その身体を黒い鎧が覆っている。

金色の髪はそのままに。

赤い瞳は輝いて。

黄金の空気を従えたまま、漆黒の甲冑を身に着けている。

「……我に鎧を纏わせるとはな。女狐如きが」

そういつて脱ぎ捨てた鎧が大気に溶ける——後には、先ほどと同じ黒いジャケットを身に付けていた。

「アレ——に——」

知らず、膝が震える。

ガクガクと力を失うそれを叱咤する。

「飲まれた——のか——」

あの日の屋上——セイバー、アーチャー、キャスター、アサシン、ライダーと五人のサーヴァントがいて、それら全てを上回った黒い影——絶望を伴った不吉な空気は、いまや目の前の青年から発せられていた。

「勘違いするなよ雑種」

彼が俺に視線を向ける。

——ただそれだけで死にかけた。

赤い瞳で見据えられたことで、魂の底まで鷲掴みにされる。

「そう……だ、おま——え、教会にいた……！」

そうして一つ繋がった。

前に教会に赴いて、黒い影の話をしたことがあった。そこで礼拝堂にいた一人の青年

——あの時も確か正面から赤い瞳に見据えられ、これで死んだのだと覚悟を覚えた。

——錯覚だと思っていたそれが、今、実体を伴なって存在している。

ギルガメッシュはニヤリと歪め——。

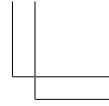
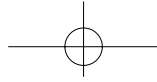
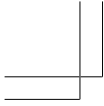
「取り込まれたのではない——。我が、取り込んだのだ」

凶悪な、
不吉を纏った笑みだった。

§

一人の少女がいた。
虚無という闇に通じる特性を持った彼女にとって、深い暗黒であるソレはひどく馴染み深い物だった。
自らの潜在意識を具現化し、暗黒に通じる魔術を使う少女は——その実、脆く、正反対の気質を持っていた。

——それに目を付けた蟲がいた。
少女の特異な体質は同じ属性のモノを強くひきつけ、内なる繋がりでもって影より現世



に引き入れる。

—— 相手を平面の影に落としこむ術を使う少女は、
影を通じて異界を呼び込むのに最適だった。

—— 本来は実験にしか過ぎない少女の出来栄は予想以上で、蟲はこれ以上なく喜んだ。
—— そうして、少女は更なる地獄に突き落とされる。

彼女に用意された枷は三つ。

一つは蟲の命に背けぬ服従という名の呪い

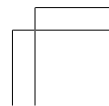
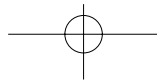
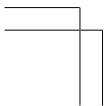
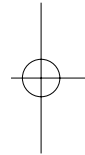
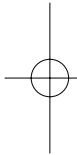
一つは戦いから逃れられないよう内側から食む虫

そしてもう一つは、現世に執着するための少年という鎖

これらは予想以上に上手くいき、蟲は更にほくそえむ。

そして彼女は罅の入った器である。

罅より漏れ出でた影という名の塊は、枷に従い蟲の掌中に――。



§

「バーサーカー……！」

アサシンに捉えられたままのイリヤが叫ぶ。

心臓を抉られ、頭部を吹き飛ばされたかの巨人は既にこれ以上無いほど死に体だ。それが今——呼びかけに答えるように立ち上がる。

「……これが狂人の宝具——」

黒衣の暗殺者の驚愕が聞こえる。

吹き飛ばされた頭部は健在。潰された心臓の穴はもう見えない。砕けた手足も、抉られた胴体も、引きずり出された内臓も全ては元のままに——。黒い巨人は元の姿のまま復元していた。

「自動蘇生。命のストックか」

ギルガメッシュに向き合ったまま、視線を飛ばしたセイバーが驚愕に震える。

アレほどの戦闘力を持つてなお、教度の命を持った巨人——それはあまりにも——。

完壁に死んでいたはずのバーサーカーの前に、間桐臓硯が忌々しく唸る。ギルガメッシュの攻撃ならば再び巨人を倒すのは造作もないだろう——だがしかし、死んでも蘇生する巨人の前に、彼らが逃げるには遅すぎる。

バーサーカーが吼える。

斧剣を構え、アサシン目掛けて走り出した。

二メートル以上の巨体が迫る——暴走する列車の前に徒手空拳にも等しいだろう。白い髑髏で見えないが、暗殺者が恐怖に震えていたとして仕方のないこと。

そこに——。

爆音と共に宝具が降り注いだ。

こちらに飛んできたものをセイバーが払うが手が足りない。再び槍がすまとなつてバーサーカーの全身に剣が突き刺さる——しかし巨人は泊まらない。

何度の死を超えようとも、主である少女を捨て置けぬと突進を果す。

「小娘の心臓を抉り出せアサシン——」
臓硯の命令が響く。

かの老人はそれを最期に、斧剣の前に両断された。

「ぬ、きき、ま——」

それでもこの奇怪な老人は生きている。

腹から下が無くなった老人は、内臓と血と、それから本来人にあるべきではない器官を
零しながらも、ずるずると地を這いずり回る。

生きている。

両手だけで身体を動かし、それでも圧倒的な破壊をもたらす暴君より離れようとう地を
這っている。

巨人の返す刃が暗殺者を襲う——だが、倒れ伏す主を目前にしてなお、黒衣のアサシン
は冷静だった。

素早く開いた距離は二間にも及び、振り上げた手を遮る物は何もない。

「イリヤ……っ！」

反応の遅さが恨めしい。
俺に今から打てる起死回生の一手が無い――。

だから、何も考えずに駆け寄った。
傷はもうとつくに癒えている。治ってるんだから大丈夫……！ そう誤魔化して走り抜ける。

なんだか地面に赤い道筋ができたが、そんなの俺には関係無いって――！
転んだのか飛び込んだのかは覚えていない。でも落下する彼女を受け止めることはできていた。

そう――。

投擲短剣をイリヤに振りかざしたその瞬間、

「真打ち登場って感じかしらね」

「……君はもう少し緊張感を持ちたまえ」

飛んできた赤い魔弾が、残るアサシンの左腕を吹き飛ばしていた。

「イリヤ……!!」

「シロウ」

アサシンから離れ落ちたイリヤを抱きとめる。そのまま地面を転がって勢いを殺した。

両手片足を切り落とされたアサシンだが、何も動揺が見られない——肘までしかない腕で臓硯の残骸を抱えと——。

「……撤退する。貴公に任せる……」

そう言い残し、影に消えた。

「バーサーカー……!!」

傷ついた巨人にイリヤが駆け寄る。

いかな無敵じみた神話の巨人でも、こうも傷ついては……。そう思わせるくらい、その姿は死に体だった。

首は半分まで切れかかり、大きく開いた胸元からは肋骨が見えている。腹には切り裂かれた跡があり、両の手足は繋がっているのが不思議なほど。

——ただ、それでも斧剣を構え、真っ直ぐギルガメッシュに向き合う巨人は、これ以上

無いほど戦士だった。

「……雑魚共が。雁首そろえて死にきたか」

アーチャーと遠坂を加え、この場には四人のサーヴァントと三人のマスターがいる。対するはギルガメッシュただ一人――。圧倒的に有利なはずが、それでも彼を前にしてはまだ足りない。

先ほどのキャスターの一撃は上級宝具にも匹敵するほどの大魔術だった。

それを受けて平然としている様子は、難攻不落の城砦をも思わせる。

彼の背後に剣が浮かび上がる。数は五十に届き、一斉に放たれば天を埋め尽くすほどの嵐となって襲い来る。

「……ちよつと、何いきなりワケわかんないのとやりあつてるのよ……」

横に並んだ遠坂の声は、緊張で堅い。

登場した時の軽口は自らを鼓舞するのも兼ねてたのだろう。

「……。こいつだ」

「何がよ」

「コイツが、桜を切った……っ！」

一瞬目を見開き、ギルガメッシュと俺を見やる。

そして――。

「……そう」

必殺の気を込めて、目の前のサーヴァントを睨みつけた。

――[Arfang]

両の腕に宝石を握る――だが、キャスターの術が通じなかった以上、それは螻蛄の斧にも等しい。

「ダメだ速坂……！」

その腕を掴む。

――それはダメだ。目の前の相手は戦ってどうにかなるサーヴァントではない。

倒れ伏していたキャスターが身体を起こさず。セイバーは健在だが疲労のためか息が荒い。

卓越した治癒能力を持つ彼女にして、鎧は所々碎け、全身に細かな傷がある。

そして――ダメージというならば、ギルガメッシュの攻撃を一身に浴びつづけたバー

サーカーこそだろう。

自らの肉体を盾としてイリヤを守り通した彼は、今度こそ肉塊にしか見えなかった。

——しかし全身を針の塊にして、それでも主を守るために敵を倒さんと剣を持つ。

だがそれがどこまで通じるのか——。ギルガメッシュの背後に浮かぶ刀身は無限と思しき程に広がりつつける。

既に百を越えた武器は、そのどれもが必殺の宝具だ。

目の前のコイツと何故戦うのか。影に飲まれたとっていたのがどうして生きていたのか——そんな理屈は俺には分からない。

ただ、今は殺すか殺されるか——そして逃げ延びるかのどれかしかない。

「ははっ」

咽が渴く。

頭は急速に冷め、変わりに体内の奥深くに熱が籠る。

——逃げるだって？ どうやって。

目の前には百を超える宝具を構えたサーヴァントがいる。例えここから背を向けて全方

で疾走したところで、そのうちの一つでも追いつけば人間なんて簡単に死ぬ。

そしてバーサーカーすら手玉に取る相手を前に、俺が満足に出来ることなど何も無い。目の前では今もセイバーが必死にせまり来る宝具を払っている。全身は血にまみれ、傷ついていない所などないだろうに、幾度も崩れ落ちながら立ち上がり、訪れないかもしれないチャンスは今も諦めずに待っている。

その背中——この後ろには通さぬと圧倒的な物量差に立ち向かうその背中を焼き付ける。

「キヤスター」

「な……に、坊や……」

声は苦痛に震えているが、既に冷静さを取り戻したらしい。

「魔術で転移って、確か柳洞寺でやってたよな。今もできるか？」

「私を誰だと……。ただ人数が多い。全員は無理ね」

そうか。

確かにこの場にはマスターが三人にサーヴァントが四人もいる。それだけの人数を一度に飛ばすなんて、いかなキヤスターといえど負傷した身では荷が重いか……。
「わかった。遠坂とイリヤを頼む」

そう言って立ちあがるが肩を押されて尻餅をついた。

「——違うな。お前もた小僧」

「アーチャー……」

そうして弓を手に前に出た。

「勘違いするな。私はセイバーと違い霊体化が出来るし、バーサーカーには令呪も残っている。お前達が撤退したら、それで私たちも戦線を離脱すれば済むこと。——しかし、この場に生身の人間が居ては足手纏いだ。傷ついたセイバーもろともさっさと消える」

その背中には迷いが無い。

こいつ——盾になって死ぬ——つもりなのか——？

「ば——無茶言わないでよ……!! あんなの相手に何が出来るといいうのよ。アンタこそさっさと逃げなさいよ。……まったくもう、どうしてどいつもこいつも……!!」

「ふむ……だがどうするね。君たちが残った所で殺されるだけ。——あのサーヴァントは黒化している。外見こそ元のままだがマトモな話し合いなど臨むべくもないだろうよ」

「黒化って……？ アーチャー……アンタ、何を言って」

まあ見ていろと前に出たアーチャーに、ギルガメッシュも攻撃の手を止めている。訝し

げに観察している様子だ。

「は——、あ——」

その傍らでセイバーが膝をついた。

「セイバー……！」

血の流れが酷い。マスターとして自分のサーヴァントを癒すことすらできない未熟が嫌になる。

「貴様は……」

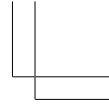
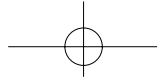
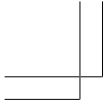
ギルガメッシュの目が細まる。

その黄金に向けて、かの弓兵は無言で弓を引くと——。

「フルンデイング
赤原狼犬」

真名を持って宝具を解放した——。

ゴウツ——と赤い鎌が風を切る。本来はどこまでも追いかけて敵を仕留めるといふ鉾の



宝具を矢として放った。
五十メートル離れたギルガメッシュまでの着弾まで僅か一秒。いかな英雄といえどもこの速度で交わしきれる者などいない――。

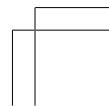
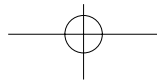
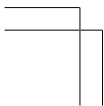
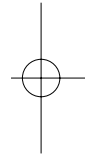
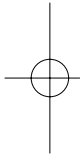
「……、……！」

初めてギルガメッシュが飛び退る。
周囲の空間から突き出した刀身は無数――その無限のツルギで構成された盾こそが彼の守り。そのどれもが一流の宝具である堅牢な守りは、いかな音速の赤弾といえどもはじき返す。

「……、……！」

大気を共鳴させるほどの澄み切った音を立て、アーチャーの鍔が弾かれる。ギルガメッシュは当然の結果に何の感情も見せず、左手を上げ――振り下ろすより先に飛び退った。それは一度放たればどこまでも喰らいつき、弾かれれば軌道を修正して襲い掛かる魔弾だ。

いかに堅牢な宝具の守りといえども、守りを解いたが最期、隙間を縫って襲ってくる。



幾たびもの金属音を重ね、ギルガメッシュは徐々に後退を余儀なくされる。
「……キャスター。魔力が足りなければ凜の石を使え。——それで問題無いはずだ」

「ギリ——と砕け散りそうなほど齒軋りをして、遠坂はキャスターにぼいぼいつと石を数個放った。」

——確か、遠坂が使うのは寶石魔術と言っていた。自らの余剰の魔力を石に溜め込み、それを緊急時のカートリッジとして使用する。

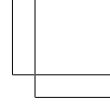
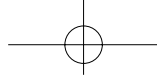
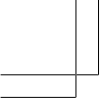
石という媒介に籠められた魔力は指向性を失い、純然たる力の塊になる。それなら同じ魔術師なら足りない魔力を補うコトもできるだろう。

「アーチャー……！」

俺の声に向き直る。

ギルガメッシュを襲いつづける矢は健在。だがそれを、彼より放たれた白い流星——神話に聞く神に叛する者を狙い澄まし、どこまでも追いかけて貫く矢——が激突する——。

赤い鍔が軌道を変える度に、白い流星がそれを弾く。二つの光はぶつかり合い、ジグザグの光となり上空へと昇って行く。



「貴様……」

そうして今度こそ宝具が放たれる。

怒りのためか赤黒く光る目が俺たちを真っ直ぐ睨みつける。放たれた宝具は五十を越え、どれも必殺の一撃として降りかかる。それを――。

「――I am the bone of my sword.」

どこか耳に馴染む、よく分からない呪文で迎撃した。

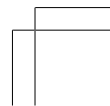
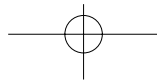
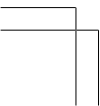
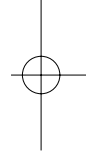
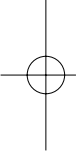
「アーチャー……貴方……」

遠坂が自失する。

ギルガメッシュを鏡合わせにしたように左手を振り、空間から放たれた宝具は彼が放つ物とまったく同じ。

全く同じ軌道、同じ外見を持って二つの剣群がぶつかり合う。

「……………」



だがその表情は苦痛に歪み、必ずしも優勢を物語る物ではない。
「キャスター……！」

身体を起こすキャスターを支える。血を失いふらつく頭を振って精神を集中させている。
——本来ワンアクションで発動する魔術が遅い。それでも彼女は僅か数秒で組み立てて行く。

倒れたセイバーを抱え上げ、イリヤを強く抱きしめた。

「……いいわ」

「アーチャー——！」

彼に向き直る。——が、

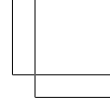
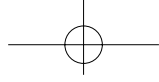
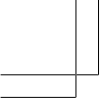
「——足止めはしよう。先にいけ」

そう気楽に言い放った。

「この贗作者が……ッ——！」

数十メートル先に大気が渦巻いている。

余裕と言う仮面を叩き割られたギルガメッシュは、その相貌に憤怒を貼り付けている。手には魔力を伴ない大気に咆哮を上げる螺旋剣。



「なん……だ、アレ——」

読めない。

剣であるのならなんだって分かったのに、あの剣だけは理解できない。

「纏めて吹き飛ばす雑種どもが……ッ！」

強烈な怒りが大気を震わし刃が咆哮に酔いしれる。

——まずい。

あの剣は本当にまずい……！！

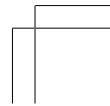
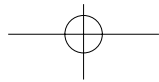
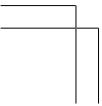
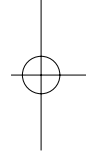
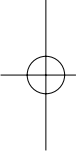
アレに比べると、今までの宝具全てが三流になってしまうほど、ケタ違いの幻想がそこにある。

「さっさと逃げ……！！ このたわけが……！！」

——“熾天覆う七つの円環”

彼の呼びかけに答え、更なる宝具が展開される。

眼前にひしめいた花弁は七つ。迫り来る攻撃を防がんと視界全てを覆い尽くし展開する。



だがこれでは足りない。

全力で放たれたアレを防ぐことなど出来はしない。

それはアーチャーも百も承知だ。そして、それを知つてなお彼は動こうとしない。足りない防御を魔力で少しでも補おうというのか、全精力を目の前の盾に集中している。

「ダメ……！！ 戻ってバーサーカー……！！」

イリヤの悲鳴が木霊した。

唸りをあげて迫り来る三軸の渦——世界すら切り裂く衝撃の前に、

「!？」

バーサーカーが振るつた手で、アーチャーが背後に放り出される。その襟首を無理やり掴んで引寄せた。

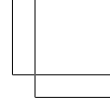
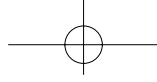
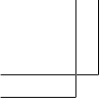
「戻って……！！ 戻りなさいっ！ わたしの言う事を聞きなさいバーサーカー……！！」

斧剣を構え、盾と一丸になって黒い巨人が立ちはだかった。

「キヤスター……飛べっ！」

衝撃が到達する。

盾として構えた斧剣が砕けた。伸ばした手から肉体を粉々にされながらも、命が在る



限り、バーサーカーはひるまず、退かず次の瞬間には再生し、ただ前へと突き進む。
激流に立ち向かう巖のような背中に、イリヤの悲鳴が突き刺さる。

「バーサーカー……！」

理性がないはずの彼が、振り向いた気がした。

——その届かないはずの背中にイリヤが真っ直ぐ手を伸ばす。

「ダメだ……！」

それを横から抱きかかえ——ばさりと布が翻るように、周囲の景色が一変していた。

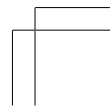
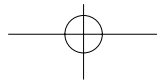
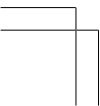
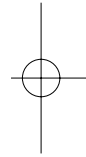
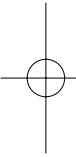
§

「……っ」

どさりとキヤスターが倒れる。

急な移動に認識が追いつかない。土の上に倒れて——そこがよく見慣れた場所であることに気がついた。

古い作りの武家屋敷。庭の隅には土蔵と道場が並んでいる。母屋と離れを渡り廊下で繋



がれたこの家は何とも見覚えがありすぎる。

「うち……？」

ごろりと仰向けになった。

まだ午前中の空は青々と晴れ渡り、澄み切った空気を柔らかく照らす。

何とか身体を起こしてみんなの様子を見て回った。

まず、最も近いキャスターを見る——苦しそうな表情をしているが、立て続けの大魔術の行使で体力が尽きたのだろう。肩の傷以外に目立った外傷はなく、少し安心した。

周囲を見渡す。

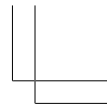
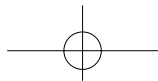
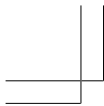
魔力を使い果たし片膝をつくアーチャーと寄り添う遠坂。全身が傷だらけで倒れ伏すセイバー。

そして——。

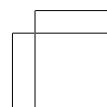
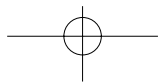
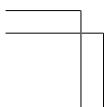
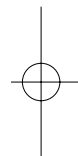
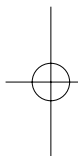
イリヤが立っている。

俯かず、空を見上げ、何かを隠すように背を向けて。

「バーサーカー……！」



彼女から力がほとばしり——そして消える。マスターとして行使された呪いは完遂している——しかしそれでもあの巨体はあらわれない。
令呪をもって命じても、現れ出でない黒い巨人……それが意味する所は一つだった。
「イリヤ……」
その小さな肩が震えている。少女とはどれほどの絆があったのか、黒い巨人を亡くした彼女は、双肩を震わせ耐えていた。
ギシリと奥歯を噛み締める。砕けよとばかりに力をいれた。
たった一体のサーヴァントを前に。
俺たちは、完膚なきまでに敗北していた。



Interlude / 15 Bloodness

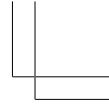
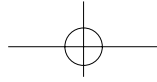
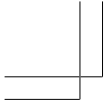
白い——女がいた。
荒い息。熱い吐息。滂沱と涙を流しつつ、半開きになった口からぞろりと何かが入り込んだ。

ゴリ——ボリ——ゴキ——。
漆黒の闇に音がひしめいている。

ふいごのように、筋肉の動きに合わせて肺が押され、漏れ出した空気が微かに声帯を奮わせる。

床に広がる鮮血すら飲み干さんと、幾百もの蟲が石室の中を蠢いている。

——あは、あはははははははははは……。



音にならない笑い声がひしめいている。
何も考えられない頭で彼女は笑う。

——ただ街を歩いていただけだった。

通っていた学園が休校になり、休んでいる間に大規模なガス漏れがあったという。結果、彼女は事件に遭遇せず、棚からぼたもちで休校という事実だけが転がり込んだ。

だから、当り前のように家を出て束の間の休日を楽しんでいた。
まだ日が昇る午前中——中天にたどり着く前に家を出た。

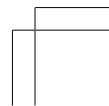
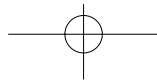
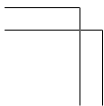
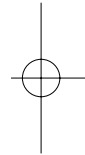
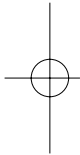
——それから先の記憶が無い。

——は、はははは……はは……

声を上げる器官は既がない。

涙で濡れた視線の先——手首が既に失われた。

新しく買った指輪が石の上に転がっている。手を伸ばそうとして、反対側の腕も無いこ



とに気がついた。

—— あはは——い——いたい——いたい——いたい——いたい——あ——あ——あ——あ。

痛いのか可笑しいのかわからない。

だって良く分からないモノが傷口から中に入ってくる。

ごきゅりばきんぼりぐりぐちや——。

もう耳も聞こえないはずなのに、体の中の音は消えてくれない。

最期の悲鳴は既に思考にすらならなかった。

脳まで食まれた女は消え、そこに新たな人物が一人立っていた。

「ハ、——ア——」
断続的に聞こえる呼吸音——それとは別に、荒い息をつく巨大な蟲が一匹いた。

黒衣のサーヴァント、アサシンである。

失った両の腕と足はそのままに、達磨の姿で倒れ伏す。——彼に傷を治す術は無い。だからこうして命を失う前に、主の復活を待ちわびる。

「おうおう。待たせたのうアサシン。すまんんだ」

暗闇に老人の声が響いた。

倒れ伏す女の身体は骨をも残さず消えている。

治癒を受けたアサシンは——それでも魔力が戻りきらず、石室の隅に潜んでいる。

白い髑髏の面が闇夜に浮かぶ。

死の淵より黄泉返った彼は、得心したように面を揺らした。

「——器用なものだ……今までの身体も、借り物だったというわけか」

「ほ、ほ、ほ。その通りよ。ワシの体などどうの昔に滅び去っておる。こうして他人の肉を借りるだけの出来ない作りでな。他の者のように長い間日の元に出ることすらかなわぬわ」

嗤う姿は、既に女のものではない。

皺枯れた声は老人のものになっている。

女を喰らい、その肉を我が物とするのに僅か数分——その速度はいかに中世より生き延びた魔術師といえども、神速の域に値する。

「……元の姿などどうでもよく、ただ魔術師殿を作り上げる肉があればいいのだな。そうして得た姿を抛り合わせ形を作り上げた所で中身は蟲という訳か。人間を再構成したのではない。……人間としての機能は蟲が果す擬態としての姿……」

アサンシンは得心して頷いた。

アインツベルンの森で白い娘が腐れた魂と言いつつ放った言葉の意味を理解する。仮に擬態ならば、このように醜い老人の姿をとりつづける必要は無い。

奴らの目を謀るためにも、元の女の方が都合がいい。

——だが、老人にそれは出来ない。

何度肉を編み上げ、身体を作り上げた所で出来上がるのはこの姿。醜く皺の刻まれた腐りゆく老人の姿にほかならない。

「——しかし、それでも不死には違いないのではないか？ あの狂人に両断されてなお再生し、人の身を越えて寿命を保つ魔術師殿は既にその領域に踏み入れている。もはや人間の規格ではなからうよ」

「——カン」

哄笑が爆ぜる。

歓喜による笑いではない、下僕と自らにぶつける怒りのためだ。
肩を震わせ笑いつづける。

彼は好き好んで老人の姿にしているのではない。——先ほど奇しくも白い娘が放った言葉は、老人が自ら苛む忌むべき言葉だ。

彼の奮う魔術は、彼自身の本体となる魂に束縛されるものである。

——ゆえに、この姿となる。

はるか昔——永遠を求めて彼は肉体を捨ててヒトではないモノへと変貌した。肉を集めて人に“成る”ことで束の間の永遠を得たその魔術に、思わぬほころびが生じていた。

——老人が化けた姿は、老人の魂に影響される。

ヒトとしての殻を捨てたところで、彼の本質は変わらない。ヒトでないモノになった所で、年を経て変わりゆくのは同じであり、色褪せ錆びつき腐り爛れ落ちるのが自然の理。理論では永久に姿を、理念を、魂を保つはずであった。

——しかし、部品は使い年を経るごとに劣化する。それは老人の魂も同じであった。

「ワシは不死ではないぞアサシン。ワシの身体は腐りおちる。——何度新しい物に変えようとも、腐りゆく。初めは数十年の年月を持った——しかし、次はそれより短い。そうしてワシは常に腐る。この新しい肉体とて既に腐敗が始まっておる——生きたまま腐り堕ちる屈辱——これこそがワシが不死を求める理由よ」

「ふむ……蟲では肉体を維持できぬのか。蟲を捨て、腐らぬ肉体に宿すのが魔術師殿の目的というわけだ」

アサシンの言葉を否定する。

「いいや違うぞアサシン。蟲どもは活きがよい。肉体面では問題などありはしない。——それこそあの娘が囁いた通りよ。忌々しいことよな」

「魂……か。まさかそのような物が本当にあるとでも」

「おぬしら英雄こそ、そのようなモノであろう。何時までも劣化しない記憶、能力、肉体を保持する英霊こそ、ワシの理想に最も近い。」

——だがそれでは世界の奴隷となるだけだ。

ワシはワシとして、ヒトの世で生きるための永遠を欲しておる。人間として留まれない意味がない。そのためにこの延命法を選んだのだ」

「まずまず分からぬな。魂の定義とやらが曖昧ではないか。それに何故腐る？ 新たな肉人形を作り上げ、そこに記憶を宿せばそれ即ち魔術師殿であろう。魔術師どのが行っているのは肉を粘土として泥人形を作り上げているに過ぎぬ。ならば外見など思いのままになりえるだろうに」

その言葉に老人は頷く。いよいよ下僕の理解が迫いついてきたのだ。

「まず問うが、ワシの力で肉体を復元するとしよう」

「外傷のようなものか」

「例えとしては妥当じゃな。ではその場合、肉体を元の形に戻す物はなんじゃ？」

「——肉体は己の姿を記録している。肌が削げ、肉を切り裂いたとして、形が元に戻るの
は、肉体に遺伝子があるからだ」

その通りと頷いた。

「遺伝子に記録された細胞の構成図じゃな。お主の外見から遺伝子という言葉を知くと不思議にすら思うが——」

それは老人とて同じ事。

世界の知識を刻まれるサーヴァントより、皺枯れた老人が語る遺伝子こそが疑わしい。

「だが、ワシの場合は違う。この肉は他人のモノであるが故に、ワシの設計図は失われておる。この場合——ワシの自己を覚え、元通りの形にして居るのはなんだと思う？」

「それが、老人の言う魂か。」

記憶は魂と共に在るものだ。肉体に拠る物質の法則ではなく、魂という幽玄の概念の記録。世界を構成する物質そのものともいえよう。

……そう。だからこそ魂が健在ならば、肉体や遺伝子を再構築し、細胞を集め、魂に刻まれた自分自身を復元するなど容易いこと。

「そのための素体は使わぬのか？ 魔術師ならば何も肉に頼る必要はあるまい」

「そこがワシの度し難い所だな。人形など当てにならぬ。魂を入れた所で変わらぬのであれば、生きた人を使うことで僅かでも人間の世、人の肌のぬくもり、偽りではない人の血肉に触れていたいのかもしれぬな」

「なるほど」

もつともその言葉は信じがたい。

老人は女を食んでいた時こそ、もつとも愉しげな気を放っていた。

——元より彼は、人を喰う蟲なのだ。

「得心した。それが魔術師殿の術か。肉体が数百年の時をこす不死ではない。魂こそその不死を魔術師殿は求めているのだな。——そして、魂が魔術師殿固有であるがゆえに、その姿以外は作れない」

「応よ。ワシとて好き好んで腐りゆく老人の体など作っておるのではない。ワシにはこれしか作れない。腐り落ち、傷つき倒れば替えるしかない出来ないモノ。以前の肉は数十年は稼動したが、今では数ヶ月しか持たぬ。

そのあまりに矮小な存在。腐敗しながら生き永らえる苦しみなど、不死とは呼べぬ」
怒りに、苛立ちが含まれる。

「なるほど。それが魂が腐るといふことか」

「その通りよ。だからワシは人間どもが恨めしい。ワシは生きていたい。存在していたい。……この身が朽ちようとも魂がなくなるなど考えるだに恐ろしい……！」

しかし、ワシは腐る。どれほど長く生きようとも——この腐敗からは逃れられぬ。そのために肉を喰らい、髄液を啜ろうとも一向に構わぬ。分かるかアサシンよ。ワシは腐りゆく自分自身が恨めしい。ワシだけが腐ることが我慢ならぬ。——ワシが腐りゆくのに、正し

「い肉体を持つ人間どもに我慢がならぬのだ……!!」

なるほどアサシンは傷ついた身体を縮め、老人の正体を反芻する。
間桐臓硯という二百年の時を生きる魔術師——詰まりそれは、

狂っているのだ。

正しい肉体が欲しい、恨めしいとはよく言えたものだ。

彼にも元は在ったはず。それを捨てて寿命を永らえさせた結果が今の腐敗。この魔術師の苦しみは——つまるところ、自業自得に他ならない。

生きている限り肌を溶かし、膿を吐き出す腐敗の呪いは、自分自身にかけてのもの。
——だから冬の娘は言うのだろう。
腐るのが嫌ならば、死ねと。

しかしここまで妄執を集めた老人には看過できぬ言葉だ。彼は二百年の時をただ生きることにみに費やしてきた。生きることは、即ち彼の願いそのもの。

今さら、それを手放すことなど出来はしない。

狂っているが故に老人は腐敗した肉体を抱えて生きていける。このような地獄、普通の人間には耐えられまい。

生きながら腐り、肉体を交換してなお腐りゆくなど、などどれほどの罪を侵した先の煉獄か。

——そうして、彼は死ねなくなった。仮に死ねるのだとしたら……。

アサシンは考える。

老人と自分は似ている。——アサシンには名が無く、群である自分から個を求めた。その結果が今であり、群として有象無象に埋没するなど出来はしない。

個として、固有の名を勝ち得たその時こそ、アサシンという現象から解き放たれて自由になるのだと思っている。
その妄執——老人と一体何が違う。
その言葉はこう現せる。

——死にたくない。

——死にたくない。

——ヒトに埋没したくない。

——現象に埋没したくない。

——永遠に保つ個を。

——永遠から解き放たれる個を。

それはどこか、慟哭にも似ていた。

「さて、連中はどうしたのだ」

「——ギルガメッシュより何ら連絡は受けていない。あの者、信じられるとは思えぬ」
老人は頷く。彼とて英雄王の力は不気味に思う。
しかし、聖杯の中身に蝕まれた今の彼は、老人の制御下にあつてしかるべき物。
サーヴァントとして呼び出された以上、聖杯という因果に逆らうことなど出来はしない。
それこそが大聖杯であり、悪徳を為す不浄の泥なのだから。

§

「魔術師殿」

先に気付いたのはアサシンだった。
黒衣の暗殺者は闇夜に髑髏を浮かべ、立ち上がる。
老人は彼の声音から警戒を嗅ぎ取り杖を手に僕の蝨へ呼びかける。
コツ……コツ……コツ……と遠い石室より音が響く。

この部屋を嗅ぎ取られた気配はない。ここはマキリの真なる工房にして、老人が長年暮す部屋である。

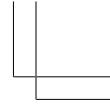
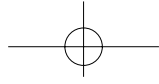
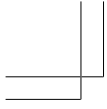
日光に弱い彼の為に作られた、真なる影に覆われた部屋。

ここを知る者は無く、代々のマキリの魔術師にすら秘匿されている。——ゆえに、此度の探索者も何も見つけられず失敗に終わる——。

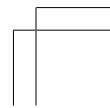
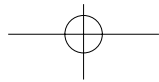
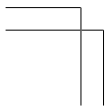
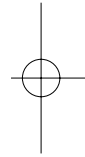
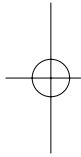
そうと知ってなお、戦闘の爪痕が彼らに警戒を促した。

だが、意に反して石室が空いた。

僅かに差し込まれた明りに照らされ、中に踏み入った人物は——。



271



- Next Prologue Episode -

部屋に戻り、布団の上に倒れこんだ。

俺だけじゃない。セイバーもキャスターも何も言う事もなく自室に戻って休んでいるはず。

イリヤには離れの部屋を用意し、一人体力が残っている遠坂はそこそこ元気に返っていった。

——さて、本格的に休戦しましょうか。今回は完全にキャスターに作った借りね。いずれ返すとしてもまずはあの金色どうにかしないと話にならない。

そう言っていたが、桜の仇ともいえるアイツを前に、やる気になっていないわけがない。——しかしそうは言っても、圧倒的な物量と超一流ともいえる宝具を持った化け物を相手

に簡単に對抗策は出てこないだろう。

あの時アインツベルンの森にいたサーヴァントを思い出す。

セイバー、キャスター、バーサーカー、アーチャー。

聖杯戦争で召喚されるのが七人だから半数以上の戦力で挑み、そしてたった一人に完膚なきまでに叩き潰された。

「……………」

ボロボロの傷は例の現象で治ってくれたが、傷ついた心はまだ痛みを上げている。

……くそ、しっかりしろ衛宮士郎。

あの絶望的な力……いやな記憶を思い出させる。

それは今から十年前のこと。

歩いても歩いても、周囲は炎に包まれていた。

どこまで行っても炎と、倒れ伏した人だったものと、そして瓦礫で覆われていた。

熱で焼けた空気は吸い込むだけで肺を破り、希薄な空気は酸欠となって襲いかかる。地面は焼け焦げ、歩くだけで足が張り付いては剥がれていった。

それは——一辺の慈悲もない、地獄の光景。
全てを奪い尽くす火炎が爆ぜ、人々の呻き声が木霊する。

——ギルガメッシュの哄笑が脳裏をよぎっている。

あの暴虐の限りを尽くした白刃の雨が、身体を次々と貫いていく。
金色の全身から放たれる——不吉な気配。

……あれは、嫌だ。

人が死ぬ気配——火事の時の空気だ。

天から降り注ぐ涙雨を覚えている。

俺を覗き込んだ、切嗣の顔を覚えている。

——そう。それがあまりにも幸せそうだったから——。

だから目指した。

あの地獄と再び立ち向かって、勝てるように。

次は誰かを見捨てたりせず、負けないように。
理不尽な災害に泣く人を、無くせるように。

——でもダメだった。

激昂し魔術を放つキャスターの姿を覚えている。
バーサーカーを失い、涙を堪えたイリヤがいる。
あれから十年経って——俺はまた、目の前で泣いてる人を救えなかった。

「……くそ」

自分の未熟っぷりが嫌になる。

傷ついたセイバーを癒すことすら出来はしない。俺の体なんてどんなに死にかけても勝
手に治るのに、何でこれを他人に使うことができないのか……。

「……シロウ、いい？」
イリヤ……？

疲れきった身体を引き摺り、家に戻ってきた後イリヤがいった。

——今日、森に居た人はみんな疲れてるから、まずはゆっくり休みましょう。

その言葉に誰も異論はなく、個々に解散となって今に至る。

だから、イリヤに使える部屋を用意したら、俺もすぐに自室で寝ていたのだが……。

「あ——ちよつとまってくれ」

返事して、辺りを見渡す。

布団は……出しっぱなししておくのも気が引けるので、軽く畳んで壁に寄せた。

襖を開けると、そこにはちよこんと佇む少女の姿があった。

「何もない所だけど入ってくれ」

うん、と頷いたが彼女は動かない。

「……まずはお礼を申し上げます。騎士と魔術師を統べるマスター。敵であるわたしに掛けてくださったご温情は忘れることはありません」

スカートの端を摘んで、優雅にお辞儀をした。

「あ——いや」

頬が熱くなつてろくな返事が思いつかない。

「前に、イリヤに約束したからな。危なくなつたら助けにいくから、家を教えてくれて。……その前にごちそうにまでなつちやつたからおあいこだよ」

「う、うん——それでも、来てくれるって思わなかったから。わたしがキリツグを殺しに来たのは本当。だからシロウがセイバーを呼び出したらすぐに会いにいったし……それで、倒しちゃっても仕方ないかなって思ってた。だから、そんな事があったのに本当に来てくれるって思わなかった」

「そっか……でもいいんだ。イリヤがこうしてここに居てよかったって思ってる。……あんな大見得切つて約束して、間に合わなかったなんて嫌だしな。それもこれも全部イリヤのおかげだ」

「わたしの……？」

——と彼女は不思議そうに見上げた。

「ああ。だってイリヤが教えてくれなかったら城に行つてみるなんて発想思いつかなかった。うちに招待するって約束は果せなかったけど……」

「——そんなことはない。それはシロウだからだよ。わたしがどうかしたかなんて関係ないの。シロウがシロウだったから、わたしは今ここにいられるの」

だから、ありがとうと再び頭を下げた。

「そっか……」

そうしてぼんつと頭に手を置く。

そのまま繰り返し撫でていた。

「えへへ……お兄ちゃんだーいすきっ!!」

「うわ」

そうして、いつかのようにとどかーつと飛び込んできた。

体力を無くした身体はあっさり倒れる。畳に仰向けになって、ぼつぼつと話をしていた。

「……でも俺もイリヤにお礼がいたい。バーサーカーのおかげで助かった。……あの時盾になつてくれなかったらきつとダメだった」

アーチャーが張った盾は堅牢なものだったけど、それでもアイツの宝具は次元違いだ。

空間ごと捻じ切るような一撃に、あの盾が耐えられたとは思えない。

アイツもそれを覚悟して、体ごと盾になるつもりであそこに立っていた。——そこに

バーサーカーが割り込んだ。

自動で修復される体。生半な攻撃をすべて無効化してしまう堅牢な鋼の肉体——狂戦士として召喚され、理性を奪われてなお彼は自分の能力をこれ以上無いほど知り尽くしていた。

「うん……バーサーカーもきつと喜んでも思う」「そっか」

それから起き上がり、しばらく他愛ない話をした。

今日はまだ疲れてるだろうから、明日になったら案内してあげるなんて約束した。

小さな約束でも指切りをせがむ姿が、どこか遠く胸に響く。

「シロウもゆっくり休んでね。傷は治っても、身体に魔力が全然残っていないんだから」「……そっか、確かに無理したしな。一晩寝たらかなり強い反動がきそっか」
などといった笑う。

イリヤも、少しだが笑ってくれた。

「——あ、そうだ」

そうして、立ち去り際の彼女を呼び止めた。

「なあに？」

「実はイリヤに会いに行ったのには他にも理由があるんだ。それを話す前に、アイツに襲われてしまったわけだけど……」

「うん——わかってる」

真面目な顔で頷く。

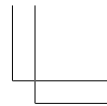
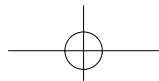
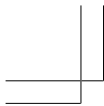
どうみても年下の少女が、俺より遥か大人の魔術師に見えていた。

「なあそれって——」

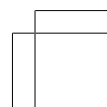
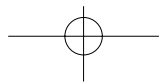
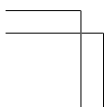
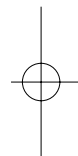
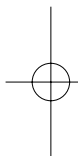
そうして、口元に指を当てられた。

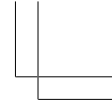
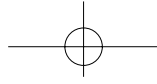
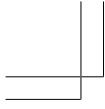
「明日、みんながいる時に話しましょう。——アインツベルンの呼び出した最大の禁忌。大聖杯に巣食うサーヴァントの話を」

「大聖杯……と、サーヴァント……？」

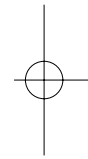
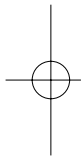


「そう」
ゆっくり息を吸い込む。何かを反芻するかのように、遠い目をする。
「ことは第三回の聖杯戦争に遡るわ——その時アインツベルンが呼び出した、最弱にして最凶のサーヴァント……アヴェンジャーのクラス。反英雄アンリマユ——」

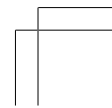
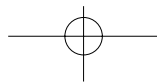
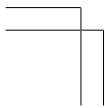


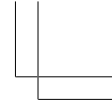
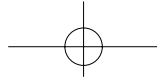
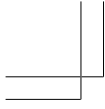


282

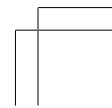
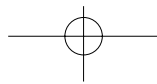
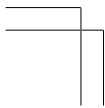
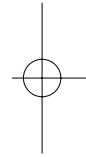
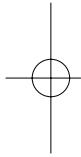


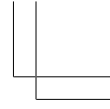
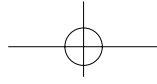
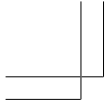
closed ← 「EternityLineIII」



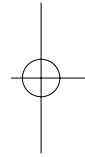
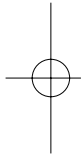


283

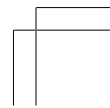
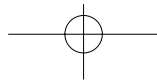
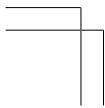


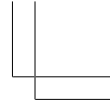
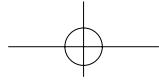
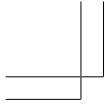


284



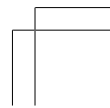
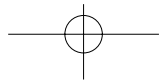
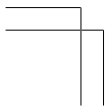
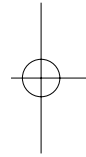
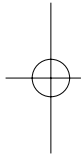
continue → NextEpisode 「EternityLineIV」
2006/winter





285

あとがき



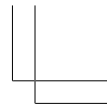
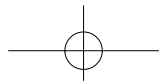
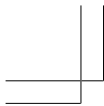
こんにちは桐月です。

まず、2巻から待ってくださっていた皆様。本当に申し訳ありませんでした。
この巻で完結させる予定……と散々ぶちあげておいて、この体たらく……なんとも
お詫びのしようありません。

予定は未定といいますが、度重なる見通しの甘さに我が身を呪うばかりです。

分冊か纏めてかは最後まで迷っていましたが、結局分冊という手段になりました。
搬入スペースの制限や印刷費などの生々問題から、时期的なものまで様々とあり、
なんだか今年に入って盆と正月が纏めてやってきたような忙しさです。

その近況について以下に項目別に。



・仕事

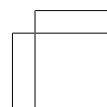
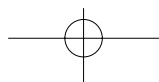
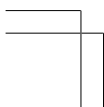
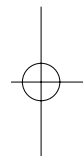
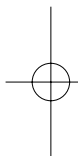
まず、今回分冊になった最大の理由ですが、今年頭よりゲームのお仕事をさせてもらっています。不慣れなので結構長めにスケジュールを取ってもらっており、これを書いている7月半ばは忙しき絶好調で、外に出ることすらままなりません。

修羅場という言葉の意味を久々に噛み締めている昨今で、**弔**の更新が止まっているのもこれが主原因です。

秋ぐらいに発表になる予定（スムーズにいけば）なので、正式発表された際には、皆様どうかよろしくお願ひします。

結構いろいろと口を出させてもらって、何とも自分らしい作品になっているように思います。

流行とか萌えとかはさっぱり分からないですが、何とも「らしい」ゲームになっているといいんですが。



・同人

前述の仕事のこともあり、今年は活動回数が昨年比べて大幅ダウンになっています。

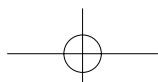
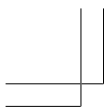
いろいろとやりたいこともあるのですが、そこらは時間が出来てから（冬辺りはなんどかできるといいんですが）になりそうです。

特に Erentiylime の一巻は問い合わせも多いので、いずれ時間があつたら赤字覚悟でも再販しようかと。

一巻の時は PageMaker のトラップを受けてしまい、本分のレイアウトも意図したものと違ってしまいましたし……。

こちらはペイラインの部数が問題になるため、気軽に再販できないのが何とも申し訳ないです。

さて、この3巻ですが、相変わらずバムーチョさんの表紙が光っています。



毎度毎度、指定に無理難題を言っていますが、それをきっちりこなしてくれる仕事人っぷりに万歳。

クールな視線のイリヤとバーサーカー。それと一卷、二巻と並べると色合いの合う黒い表紙が何ともいい感じですよ。

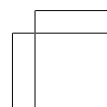
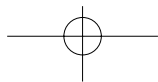
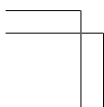
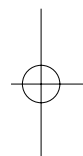
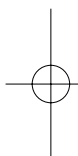
そして一卷ではりまくったイリヤの伏線もようやく回収できました。

二巻時点でアインツベルンの城辺りまでやりたかったのが、結果はご存知の通りです……。

次回こそ最終巻としておわってけるといいのですが、もう毎回自分の予想が当てにならないので、次で終わる予定……程度にしておきます。

・同人の悩み所

印刷費とか締め切りとかそういう部分はおいとして、実は小説本を作るときにかな



り困った問題が発生することがあります。

それはページ数。

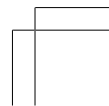
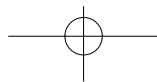
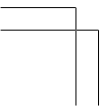
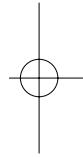
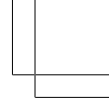
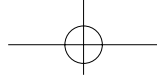
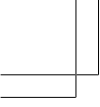
うちの本はページ数の問題で商業印刷形式で刷ってもらっているのですが、この手の場合、綴じが8枚の紙を二つ降りした、16ページで1単位になっています。

これは富士見や電撃なども同じで、全ページ数から必ず16で割れるようになっていきます。

うちの本の場合、表紙も数に慣れて+2してスタートしていますので、巻末の番号から2を引いた数を割ると、丁度16で割り切れるようになっていきます。

出版社によって開始ページが違ったり、口絵のカウント形式が変わったりしていますが、概ねこの通りです。中には16単位+8ページであわせという形式もあるみたいですけど。

で、この16ページ単位という縛りがなかなか厄介で、EternityLineIIなんかは死に物狂いで自分のページ数を合わせていたのですが、この巻の場合、数ページ使って丸々10ページ近く余剰が出来てしまったという典型的なパターンに陥ってしま



ました。

商業の小説で後書きのスペースが無い、もしくは、後書きが沢山あったり、巻末の広告スペースがかなり多い、等の配分をみる必要があると思います。その場合、間違い無くこの一台(16ページ単位)縛りに引っかかっているとみて間違いありません。

「ページ数少ないほうが、安上がりなんじゃないの？」という疑問もあると思いますが、元々16ページセットになっているものを組み合わせただけのものと、ある程度組み合わせた後から、余分に加工して付け加えるのでは手間が増えるためと思ってもらって間違いないようです。

そんなこんなで、今回は後書きの分量が多めだったり、巻末にEternitylineの時系列表などを入れる余裕ができたので、それはそれで使い所あって丁度よかったですね。次はきっちり収まるように、なんとか構成を考えたい物です。

・ゲーム

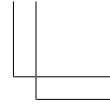
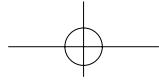
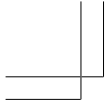
リネ2関連のページも更新する時間もなく、それ目当ての人にも申し訳なく思っています。

後、最近ゲームでアリスソフト系のゲーム(特にランスシリーズ)をつらつらと再プレイしています。年末にランス7こと戦国ランスが出るらしいので、これが今年一番の楽しみ。

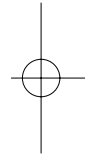
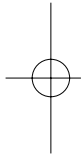
コンシューマゲームなどは停滞中。

極大魔界村のΩが素晴らしすぎるので、元魔界村住人としてはこれは興味あるんですけど……買っても積んでしまいそうで、ここ最近コンシューマは手をだしていません。

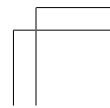
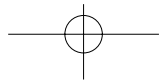
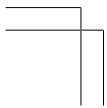
さて、このようにとりとめもなく書いてしまい、誌面も尽きてきました。また、次の巻でお会いしましょう。

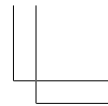
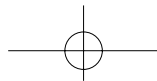
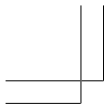


293



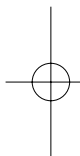
2
0
0
6
年
7
月
桐
月





EternityLine 時系列表

「一巻が手に入らないので、あらすじだけでも欲しい」
「日付を整理してくれると助かる」
という声があるので、巻末に掲載します。
あらすじは簡単に、巻頭にいれました。
時系列はプロローグから章ごとに並んでおり、「その日何があったか」を中心に記載しています。

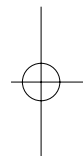


■時系列

ELI

2月4日（月）

ELI プロローグ キャスターの語り



■一章 星空の下

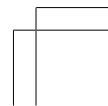
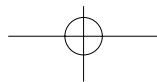
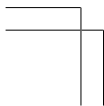
2月3日（日）

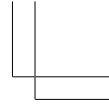
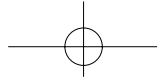
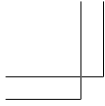
VS ライダー
教会での言峰

■二章 魔術師の邂逅

2月4日（月）

起床：セイバー、桜
昼：凛と協定
夕方：イリヤと初遭遇





295

□幕間1 Silent ASSASIN

佐々木小次郎の死
真アサシン誕生

■三章 魔女

2月4日夜
柳洞寺に赴く
VS キャスターと戦闘の強制停止

□幕間2 Black Light

誰も居ないお堂に咽ひ泣く影

□幕間3

2月5日(火)
衛宮邸でのキャスターと、彼女の目覚め。

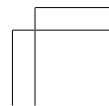
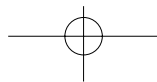
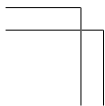
三章続き

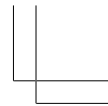
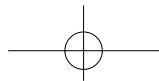
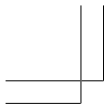
キャスターの独白
休戦協定→衛宮家保護

■四章 いつか、彼女と——

□幕間4 despair

キャスターの回想。
2月6日(水)
道場のセイバー。街で出会うイリヤその2





四章続き

遠坂凛&アーチャーの衛宮家襲撃

VS アーチャー

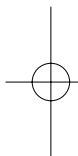
間桐桜、キャスターの途中介入により戦闘終了

2月7日（木）

道場のセイバー。

イリヤとの邂逅その3

□幕間5 black servant
ライダーと慎二の再契約

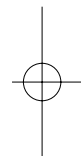


ELI Next Prologue Episode

2月8日（金）

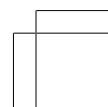
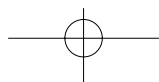
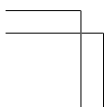
慎二による呼び出し

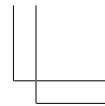
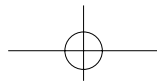
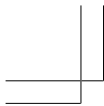
キャスターの協力要請



□幕間6 英雄王
言峰とギルの語り

EternityLineI END





-EternityLineII-

ELII プロローグ

2月8日(金)

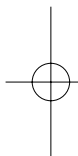
学校で慎二に拘束される桜 蠢く影

■五章 鮮血神殿 I

自宅：キャスター、セイバー作戦会議

学校：VS ライダー 1

VS ライダーその 2

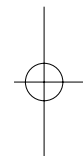


■六章 鮮血神殿 II

学校：VS ライダー

□幕間 7 Silent ASSASIN II

セイバー VS 真アサシン



六章続き

VS アサシン

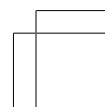
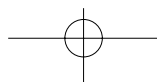
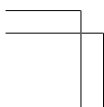
キャスターのルールブレイカー使用

黒い影登場

夜：悪夢からの目覚め

□幕間 8 ある場所で

身を隠すライダー、桜





□幕間9 Lancer

ランサーVS真アサシン&影
ランサー消滅

■七章 その真実

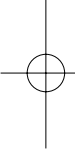
2月9日(土)

朝：土蔵→投影魔術について

居間：今後の方針(アサシンと臓硯の警戒)

キャスターについて(大人しくしてるならいいや)

サーヴァントについて(バーサーカーこわっ)



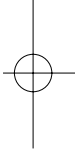
昼：道場で鍛錬

キャスターについて2(葛木の復讐するのかな?)

教会に移動：

聖杯について、ランサーについて、

臓硯に対する注意



■八章 Black Embryo

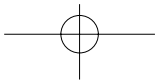
跳梁跋扈する影

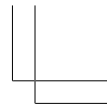
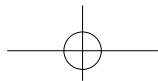
夢→過去のコルキス

□幕間10 英雄王II

ギルの出陣。

ギルガメッシュの出陣





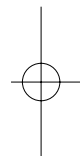
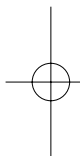
299

□幕間11 悪夢、そして…
ライダーVSギルガメッシュ
ライダーの敗北
背後から影に吞まれるギルガメッシュ
瀕死で逃走するライダー

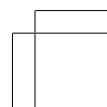
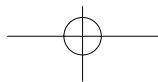
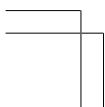
ELII Next Prologue Episode
重体の桜の救助

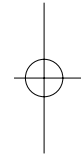
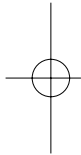
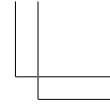
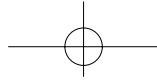
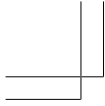
士郎→イリヤの様子がきになる…。

Eternity LineII END



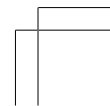
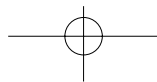
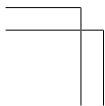
-Start Eternity LineIII-
(本誌)

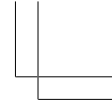
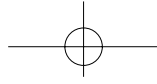
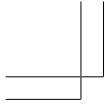




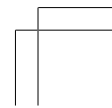
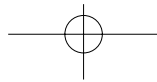
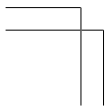
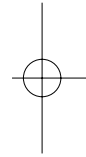
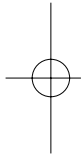
この作品はTYPE-MOON製作のPCゲーム「Fate/stay night」
の設定、世界観を使用した二次創作作品です。

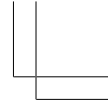
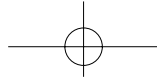
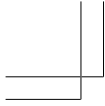
名称、団体などは全て原作ゲームに基づく物であり、実在
の団体などとは一切関わりありません。





301





302

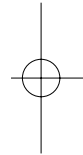
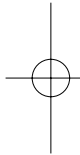
Eternity LineIII

初出：2006/8/13

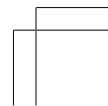
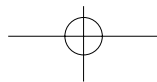
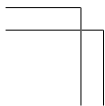
発行元：桐文堂
発行者：桐月

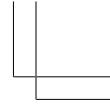
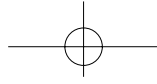
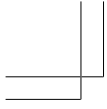
印刷：パワープリント

私立桐月図書館
<http://misawahanei.cool.ne.jp/kiduki/>

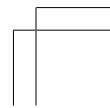
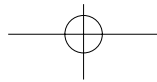
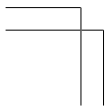
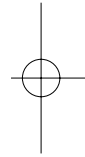
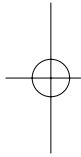


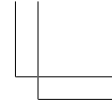
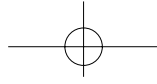
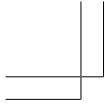
本書の内容の無断転載などはおやめください。



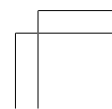
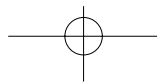
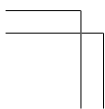
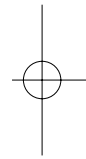
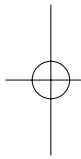


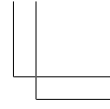
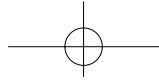
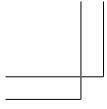
303



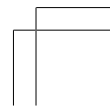
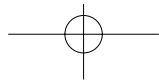
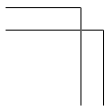
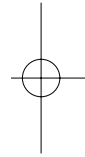
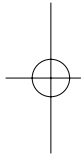


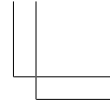
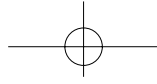
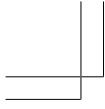
304





305





306

